

平成30年度 厚生労働省 老人保健健康増進等推進事業

認知症の人の意見に基づく 認知症施策の改善にむけた方法論等に関する 調査研究事業

認知症の本人と
ともに進める
認知症施策
多様な取組報告を
聴いてみよう！

事業報告会



平成31年2月9日

日本認知症本人ワーキンググループ

平成 30 年度老人保健健康増進等事業
認知症の人の意見に基づく認知症施策の改善に向けた方法論等に関する調査研究事業

事業報告会 プログラム

○日 時：平成 31 年 2 月 9 日（土） 10:30～16:30

○場 所：品川フロントビル（東京都港区港南 2-3-13）

予定時間	内 容	頁
10:30～10:45	開会 ごあいさつ ■検討委員長：栗田主一（東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム研究部長）	1
10:45～11:00	本調査研究事業に関連して：情報提供 ■厚生労働省老健局認知症施策推進室 井上 宏 さん	2
11:00～11:45	事業概要とみてきたこと ■検討委員：藤田 和子（日本認知症本人ワーキンググループ） 永田 久美子（認知症介護研究・研修東京センター）	18
11:45～12:45	昼 休 憩	
12:45～16:00	試行地域からの報告 ■コーディネーター：永田 久美子（検討委員）	
(12:45～13:15)	【1】静岡県：静岡県の認知症施策 認知症の本人の声を起点としたやさしい地域づくり ■静岡県健康福祉部長寿政策課	37
(13:15～13:45)	【2】諫早市：誰もが望む居場所へつながるために ■諫早市健康福祉部高齢介護課 岩本 節子 さん ■福田 人志 さん	47
(13:45～14:15)	【3】藤沢市：認知症についてあなたの声を聴かせてください ～本人ミーティングから始まった共に創る暮らしと地域～ ■藤沢市地域包括ケアシステム推進室	66
(14:15～14:30)	休 憩	
(14:30～15:00)	【4】上田市豊殿地区の取り組み ～当事者と共にすすめる地域づくり～ ■春原 治子さん・神林 芳久さん（「安心」の会） ■櫻井 記子さん（社会福祉法人 ジェイエー長野会）	86
(15:00～15:30)	【5】香川県三豊市立西香川病院（認知症疾患医療センター） ■井川 咲子さん・渡邊 康平さん・野島 正光さん	別紙
(15:30～16:00)	【6】御坊市：認知症の人とともに築く 総活躍のまち“ごぼう” ■御坊市市民福祉部介護福祉課 谷口 泰之さん ■御坊市在宅介護支援センター藤田 玉置 哲也 さん	97
16:00～16:30	まとめ・閉会	
参 考	○報告地域以外の試行地域情報 ○日本認知症本人ワーキンググループについて（本人ガイド・希望宣言）	110

ごあいさつ

認知症の政策の立案に、認知症の当事者が参画できない状況があるとすれば、それは異常なことである・・・その異常さに私たちが気づき、その状況を変えなければいけないと深く認識するようになったのは、つい先ごろのことかと思われまふ。

認知症の本人が、「私たち抜きで、私たちの事を決めないで！」と声をあげ、日本認知症本人ワーキンググループを立ち上げたのは 2014 年 10 月でした。また、本人たちの声によって、「本人の視点の重視」という言葉が認知症の国家プランに盛り込まれたのは 2015 年 1 月でした。これに基づいて、2015 年度より、認知症の本人の視点を政策に反映させるための方法論の研究が国家プロジェクトとしてはじまりました。

これまでの流れを簡単に要約しますと、まず、2015 年度～2016 年度の老健事業「認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論等に関する調査研究事業」において、本人が主体となって出会い、話し合い、意見を述べ、それを施策に反映させることをめざした「本人ミーティング」という方法が開発され、そのガイドブックが作成されました。続いて、2017 年度の老健事業「認知症診断直後等における認知症の人の視点を重視した支援体制構築推進のための調査研究事業」において、本人が政策や地域づくりに参画できる環境をつくるための自治体向けガイドブック「本人の声を起点とした認知症地域支援体制づくりガイド」が作成されました。また、同時に、認知症の本人による認知症の本人のためのガイドブック「本人にとってのよりよい暮らしガイド：一足先に認知症になった私たちからあなたへ」が作成されました。

そして、2018 年度の老健事業「認知症の人の意見に基づく認知症施策の改善に向けた方法論等に関する調査研究事業」では、一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループが事業を受託し、全国の 11 の自治体で、認知症の本人が参画して、「認知症の人の意見に基づく」地域づくりが試行されました。それぞれの地域における取組みは多様であり、さまざまな課題に直面しながら、さまざま創意工夫が重ねられています。しかし、いずれの地域においても、まずは認知症とともに生きる本人の声に耳を傾け、その深い意味に気づき、それを可視化させ、実現させようとする試みがなされ、そのようなプロセスの中で、共に未来を創ることの価値が認識され、その認識が人々の間で広がりを見せているように思われます。そのような経験をさらに多くの人々と共有し、未来共創に向けて歩みだすことができる社会・環境・文化を醸成することが、本報告会の大切な役割であろうと考えています。

平成 31 年 2 月 9 日

東京都健康長寿医療センター研究所
自立促進と精神保健研究チーム研究部長
栗田主一



認知症の人の意見に基づく認知症 施策の改善に向けた方法論等に関 する調査研究事業報告会資料

平成31年2月9日

厚生労働省老健局認知症施策推進室
井上 宏

認知症の人の将来推計について

- 長期の縦断的な認知症の有病率調査を行っている久山町研究のデータから、新たに推計した認知症の有病率(2025年)。
 - ✓ 各年齢層の認知症有病率が、2012年以降一定と仮定した場合:19%。
 - ✓ 各年齢層の認知症有病率が、2012年以降も糖尿病有病率の増加により上昇すると仮定した場合:20.6%。
- ※ 久山町研究からモデルを作成すると、年齢、性別、生活習慣病(糖尿病)の有病率が認知症の有病率に影響することがわかった。
本推計では2060年までに糖尿病有病率が20%増加すると仮定した。
- 本推計の結果を、平成25年筑波大学発表の研究報告による2012年における認知症の有病者数462万人にあてはめた場合、2025年の認知症の有病者数は約700万人となる。

「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」(平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業 九州大学 二宮教授)による速報値

年	平成24年 (2012)	平成27年 (2015)	平成32年 (2020)	平成37年 (2025)	平成42年 (2030)	平成52年 (2040)	平成62年 (2050)	平成72年 (2060)
各年齢の認知症有病率が一定の場合の将来推計 人数/(率)	462万人 15.0%	517万人 15.7%	602万人 17.2%	675万人 19.0%	744万人 20.8%	802万人 21.4%	797万人 21.8%	850万人 25.3%
各年齢の認知症有病率が上昇する場合の将来推計 人数/(率)		525万人 16.0%	631万人 18.0%	730万人 20.6%	830万人 23.2%	953万人 25.4%	1016万人 27.8%	1154万人 34.3%

認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)の概要

～ 認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて ～ (平成29年7月5日一部修正)

- ・ 新プランの対象期間は団塊の世代が75歳以上となる2025(平成37)年だが、策定時の数値目標は、介護保険事業計画に合わせて2017(平成29)年度末等で設定されていたことから、第7期計画の策定に合わせ、平成32年度末までの数値目標に更新

新オレンジプランの基本的考え方

- ・ 高齢者の約4人に1人が認知症の人又はその予備群。高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加
2012(平成24)年 462万人(約7人に1人) ⇒ 2025(平成37)年 約700万人(約5人に1人)
- ・ 認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要。

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す。

- ・ 厚生労働省が関係府省庁(内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省)と共同して策定
- ・ 策定に当たり認知症の人やその家族など様々な関係者から幅広く意見を聴取

七つの柱

- ① 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進
- ② 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供
- ③ 若年性認知症施策の強化
- ④ 認知症の人の介護者への支援
- ⑤ 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
- ⑥ 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進
- ⑦ 認知症の人やその家族の視点の重視

2

I 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進

① 認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解を深めるキャンペーンの実施

- ・ 認知症への社会の理解を深めるための全国的なキャンペーンを展開
⇒ 認知症の人が自らの言葉で語る姿等を積極的に発信

② 認知症サポーターの養成と活動の支援

- ・ 認知症サポーターを量的に養成するだけでなく、活動の任意性を維持しながら、認知症サポーターが様々な場面で活躍してもらうことに重点を置く
- ・ 認知症サポーター養成講座の際に活動事例等の紹介や修了した者が復習も兼ねて学習する機会を設け、活動につなげるための講座など、地域や職域の実情に応じた取組を推進

【認知症サポーターの人数】(目標引上げ)

2017(平成29)年度末 800万人 ⇒ 2020(平成32)年度末 1200万人

③ 学校教育等における認知症の人を含む高齢者への理解の推進

- ・ 学校で認知症の人を含む高齢者への理解を深めるような教育を推進
- ・ 小・中学校で認知症サポーター養成講座を開催
- ・ 大学等で学生がボランティアとして認知症高齢者等と関わる取組を推進

3

認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進

認知症サポーターの養成と活動の支援

- 地域や職域で認知症サポーターの養成を進めるとともに、活動の任意性は維持しつつ、養成された認知症サポーターが認知症高齢者等にやさしい地域づくりを加速するために様々な場面で活躍してもらえるようにする。【厚生労働省】

(認知症サポーター)

- 認知症に関する正しい知識と理解を持ち、地域や職域で認知症の人や家族に対してできる範囲での手助けをする人

○キャラバンメイト養成研修

実施主体：都道府県、市町村、全国的な職域団体等

目的：地域、職域における「認知症サポーター養成講座」の講師役

である「キャラバンメイト」を養成

内容：認知症の基礎知識等のほか、サポーター養成講座の展開方法、対象別の企画手法、カリキュラム等をグループワークで学ぶ。



○認知症サポーター養成講座

実施主体：都道府県、市町村、職域団体等

対象者：

〈住民〉自治会、老人クラブ、民生委員、家族会、防災・防犯組織等

〈職域〉企業、銀行等金融機関、消防、警察、スーパーマーケット

コンビニエンスストア、宅配業、公共交通機関等

〈学校〉小中高高等学校、教職員、PTA等



【実績と目標値】

サポーター人数：2018(平成30)年12月末実績 1,110万人(目標値：2020(平成32)年度末 1200万人)

※認知症サポーター養成講座の際に活動事例等の紹介や、修了した者が復習も兼ねて学習する機会を設け、活動につなげるための講座など、地域や職域の実情に応じた取組を推進

4

Ⅱ 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供

【基本的考え方】

- ・ 容態の変化に応じて医療・介護等が有機的に連携し、適時・適切に切れ目なく提供

発症予防

発症初期

急性増悪時

中期

人生の最終段階

- ・ 早期診断・早期対応を軸とし、妄想・うつ・徘徊等の行動・心理症状(BPSD)や身体合併症等が見られても、医療機関・介護施設等での対応が固定化されないように、最もふさわしい場所で適切なサービスが提供される循環型の仕組み

① 本人主体の医療・介護等の徹底

② 発症予防の推進

③ 早期診断・早期対応のための体制整備

- ・ かかりつけ医の認知症対応力向上、認知症サポート医の養成等
- ・ 歯科医師・薬剤師の認知症対応力向上
- ・ 認知症疾患医療センター等の整備
- ・ 認知症初期集中支援チームの設置

【かかりつけ医認知症対応力向上研修の受講者数(累計)】(目標引上げ)

2017(平成29)年度末 60,000人 ⇒ 2020(平成32)年度末 75,000人

【認知症サポート医養成研修の受講者数(累計)】(目標引上げ)

2017(平成29)年度末 5,000人 ⇒ 2020(平成32)年度末 10,000人

【歯科医師認知症対応力向上研修の受講者数】(目標新設)

2016(平成28)年度研修実施 ⇒ 2020(平成32)年度末 22,000人

5

④ 行動・心理症状(BPSD)や身体合併症等への適切な対応

- ・ 医療機関・介護施設等での対応が固定化されないように、最もふさわしい場所で適切なサービスが提供される循環型の仕組みを構築
- ・ 行動・心理症状(BPSD)への適切な対応
- ・ 身体合併症等に対応する一般病院の医療従事者の認知症対応力向上
- ・ 看護職員の認知症対応力向上 ・ 認知症リハビリテーションの推進

【看護職員認知症対応力向上研修の受講者数】(目標新設)
2020(平成32)年度末 22,000人

⑤ 認知症の人の生活を支える介護の提供

- ・ 介護サービス基盤の整備
- ・ 認知症介護の実践者⇒実践リーダー⇒指導者の研修の充実
- ・ 新任の介護職員等向けの認知症介護基礎研修の実施

⑥ 人生の最終段階を支える医療・介護等の連携

⑦ 医療・介護等の有機的な連携の推進

- ・ 認知症ケアパス(認知症の容態に応じた適切なサービス提供の流れ)の積極的活用
- ・ 医療・介護関係者等の間の情報共有の推進
⇒ 医療・介護連携のマネジメントのための情報連携ツールの例を提示
地域ケア会議で認知症に関わる地域資源の共有・発掘や連携を推進
- ・ 認知症地域支援推進員の配置、認知症ライフサポート研修の積極的活用
- ・ 地域包括支援センターと認知症疾患医療センターとの連携の推進

6

認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～

Ⅱ 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護サービス等の提供

③早期診断・早期対応のための体制整備＜認知症疾患医療センター等の整備＞

- 認知症の疑いがある人については、速やかに鑑別診断が行われることが必要。認知症疾患医療センターについては、都道府県ごとに地域の中で担うべき機能を明らかにした上で、認知症疾患医療センター以外の鑑別診断を行うことができる医療機関と併せて、計画的に整備を図っていく。【厚生労働省】

		基幹型	地域型	連携型
設置医療機関		病院（総合病院）	病院（単科精神科病院等）	診療所・病院
設置数（平成30年5月現在）		16か所	358か所	55か所
基本的活動圏域		都道府県圏域	二次医療圏域	
専門的医療機能	鑑別診断等	認知症の鑑別診断及び専門医療相談		
	人員配置	・専門医（1名以上） ・専任の臨床心理技術者（1名） ・専任の精神保健福祉士又は保健師等（2名以上）	・専門医（1名以上） ・専任の臨床心理技術者（1名） ・専任の精神保健福祉士又は保健師等（2名以上）	・専門医（1名以上） ・看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者等（1名以上）
	検査体制 （※他の医療機関との連携確保対応で可）	・CT ・MRI ・SPECT（※）	・CT ・MRI（※） ・SPECT（※）	・CT（※） ・MRI（※） ・SPECT（※）
	BPSD・身体合併症対応	空床を確保	急性期入院治療を行える医療機関との連携体制を確保	
	医療相談室の設置	必須		－

【事業名】 認知症疾患医療センター運営事業

【実績と目標値】 2018(平成30)年5月現在 429か所 ⇒ 2020(平成32)年度末 約500か所

※ 基幹型、地域型及び連携型のより効果的、効率的な機能や地域での連携の在り方を検討するとともに、設置されていない地域がなくなるよう、二次医療圏域に少なくとも1センター以上の設置を目標とする。

7

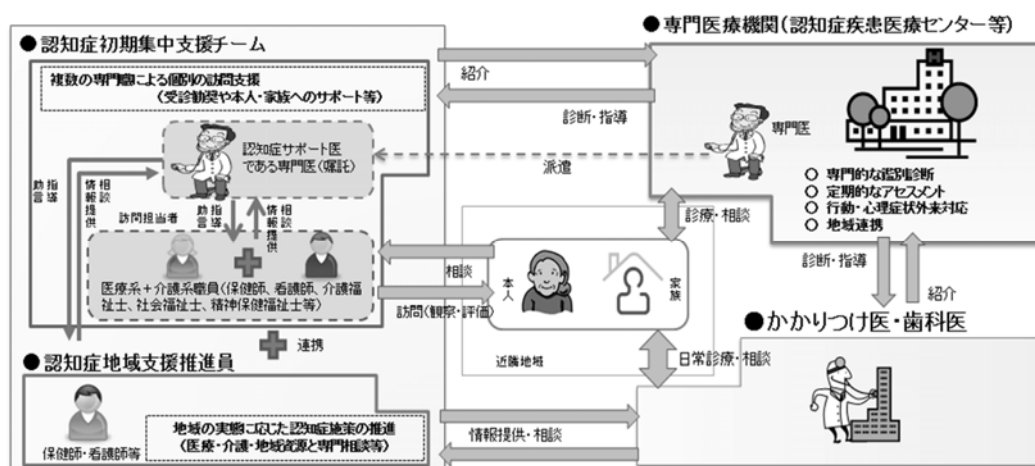
認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～

Ⅱ 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護サービス等の提供

③早期診断・早期対応のための体制整備＜認知症初期集中支援チームの設置＞

- 早期に認知症の鑑別診断が行われ、速やかに適切な医療・介護等が受けられる初期の対応体制が構築されるよう、認知症初期集中支援チームの設置を推進。

このほか、早期診断の際に地域の当事者組織の連絡先を紹介するなど、地域の実情に応じ、認知症の人やその家族の視点に立った取組を推進。【厚生労働省】

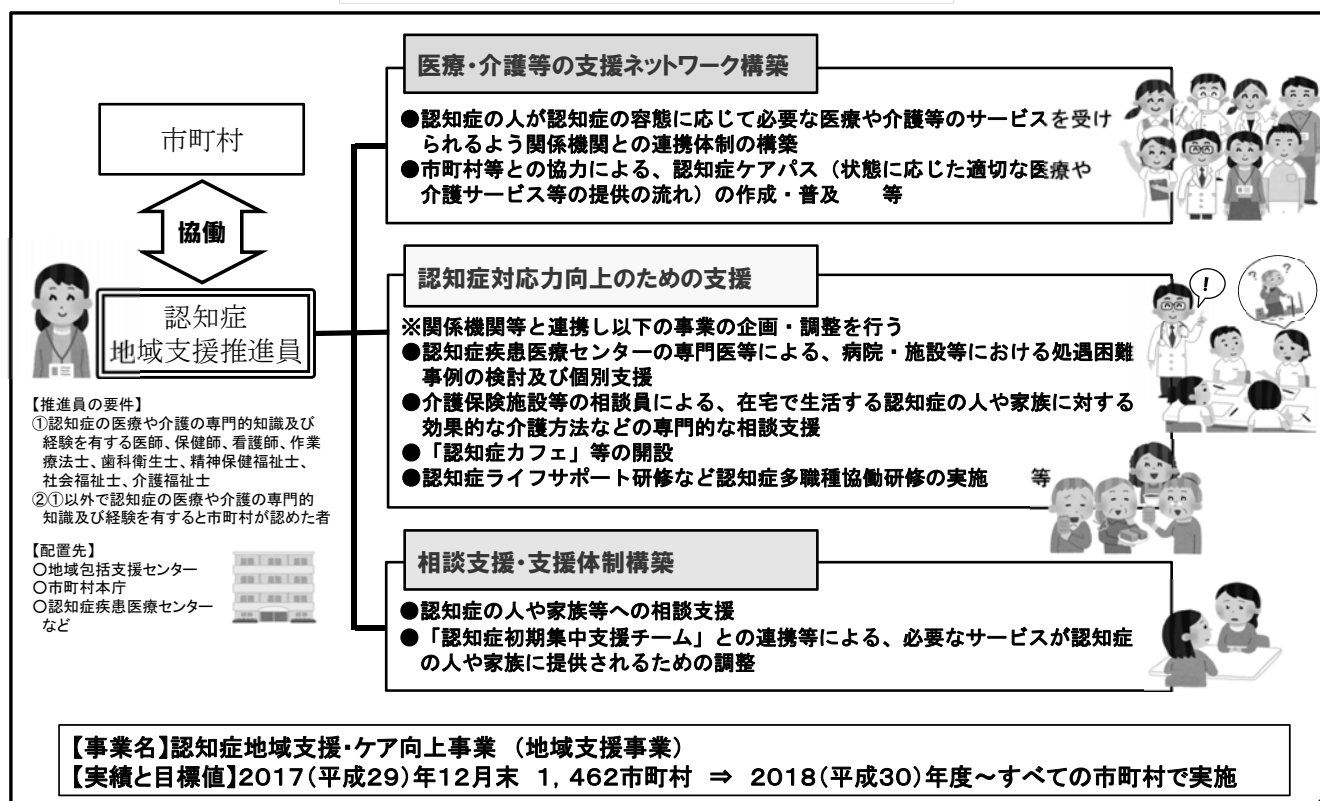


【事業名】 認知症初期集中支援推進事業

【実績と目標値】 2017(平成29)年12月末 1,105市町村 ⇒ 2018(平成30)年度～ すべての市町村で設置

8

認知症地域支援推進員



9

Ⅲ 若年性認知症施策の強化

- ・ 若年性認知症の人やその家族に支援のハンドブックを配布
- ・ 都道府県の相談窓口に関係者のネットワークの調整役を配置
- ・ 若年性認知症の人の居場所づくり、就労・社会参加等を支援

Ⅳ 認知症の人の介護者への支援

① 認知症の人の介護者の負担軽減

- ・ 認知症初期集中支援チーム等による早期診断・早期対応
- ・ 認知症カフェ等の設置

【認知症カフェ等の設置・普及】

地域の実情に応じて認知症地域支援推進員等が企画するなど、認知症の人が集まる場や認知症カフェなどの認知症の人や家族が集う取組を2020（平成32）年度までに全市町村に普及させる

② 介護者たる家族等への支援

- ・ 家族向けの認知症介護教室等の普及促進
- ・ 家族等に対する支援方法に関するガイドラインの普及

③ 介護者の負担軽減や仕事と介護の両立

- ・ 介護ロボット、歩行支援機器等の開発支援
- ・ 仕事と介護が両立できる職場環境の整備
（「介護離職を予防するための職場環境モデル」の普及のための研修等）

10

若年性認知症の人への支援

■相談（相談窓口）■

- ①本人や家族との悩みの共有
- ②同行受診を含む受診勧奨
- ③利用できる制度、サービスの紹介や手続き支援
- ④本人、家族が交流できる居場所づくり

■支援ネットワークづくり■

- ・ ワンストップの相談窓口の役割を果たすため、医療・介護・福祉・労働等の関係者による支援体制（ネットワーク）の構築
- ・ ネットワークにおける情報共有、ケース会議の開催、普及啓発等

■普及・啓発■

- ・ 支援者・関係者への研修会の開催等
- ・ 企業や福祉施設等の理解を促進するためのパンフレット作成など

これらの支援を一体的に行うために
若年性認知症支援コーディネーター
を各都道府県に配置

若年性認知症の特性に配慮した就労・社会参加支援

- ①若年性認知症の人との意見交換会の開催等を通じた若年性認知症の人のニーズ把握
- ②若年性認知症の人やその家族が交流できる居場所づくり
- ③産業医や事業主に対する若年性認知症の人の特性や就労についての周知
- ④企業における就業上の措置等の適切な実施など治療と仕事の両立支援の取組の促進
- ⑤若年性認知症の人がハローワークによる支援等が利用可能であることの周知 等

【目標】 若年性認知症支援コーディネーターの資質の向上や認知症地域支援推進員との連携を進めるとともに、先進的な取組事例を全国に紹介すること等を通じて、地域の実情に応じた効果的な取組を推進する。



11

認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～

Ⅳ 認知症の人の介護者への支援

＜認知症の人の介護者の負担軽減＞＜介護者たる家族等への支援＞

- 認知症の人の介護者の負担を軽減するため、認知症初期集中支援チーム等による早期診断・早期対応を行うほか、認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う認知症カフェ等の設置を推進。
- また、家族向けの認知症介護教室等の取組について、好事例を収集して全国に紹介し、その普及を進める。
【厚生労働省】

認知症カフェの様子



夜のカフェの様子

- 1～2回／月程度の頻度で開催(2時間程度／回)
- 通所介護施設や公民館の空き時間を活用
- 活動内容は、特別なプログラムは用意されていなく、利用者が主体的に活動。
- 効果
 - ・認知症の人 → 自ら活動し、楽しめる場所
 - ・家族 → わかり合える人と出会う場所
 - ・専門職 → 人としてふれあえる場所(認知症の人の体調の把握が可能)
 - ・地域住民 → つながりの再構築の場所(住民同士としての交流の場や、認知症に対する理解を深める場)

【事業名】 認知症地域支援・ケア向上事業

【目標値】 地域の実情に応じて認知症地域支援推進員等が企画するなど、認知症の人が集まる場や認知症カフェなどの認知症の人や家族が集う取組を2020(平成32)年度までに全市町村に普及させる

12

V 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進

① 生活の支援(ソフト面)

- ・家事支援、配食、買物弱者への宅配の提供等の支援
- ・高齢者サロン等の設置の推進
- ・高齢者が利用しやすい商品の開発の支援

③ 就労・社会参加支援

- ・就労、地域活動、ボランティア活動等の社会参加の促進
- ・若年性認知症の人に対する、通常の事業所での雇用継続に向けた支援、通常の事業所での雇用が困難な場合の就労継続支援(障害福祉サービス)

② 生活しやすい環境(ハード面)の整備

- ・多様な高齢者向け住まいの確保
- ・高齢者の生活支援を行う施設の住宅団地等への併設の促進
- ・バリアフリー化の推進
- ・高齢者が自ら運転しなくても移動手段を確保できるよう、公共交通の充実を図るなど移動手段の確保を推進

④ 安全確保

- ・独居高齢者の安全確認や行方不明者の早期発見・保護を含めた地域での見守り体制の整備
- ・高齢歩行者や高齢運転者の交通安全の確保
- ・詐欺などの消費者被害の防止
- ・成年後見制度(特に市民後見人)や法テラスの活用促進
- ・高齢者の虐待防止

13

「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定ガイドラインの概要

趣旨

認知症の人を支える周囲の人において行われる意思決定支援の基本的考え方（理念）や姿勢、方法、配慮すべき事柄等を整理して示し、これにより、認知症の人が、自らの意思に基づいた日常生活・社会生活を送れることを目指すもの。

誰のための誰による意思決定支援か

認知症の人を支援するためのガイドラインであり、また、特定の職種や特定の場面に限定されるものではなく、認知症の人の意思決定支援に関わる全ての人による意思決定を行う際のガイドラインとなっている。

意思決定支援の基本原則

認知症の人が、意思決定が困難と思われる場合であっても、意思決定しながら尊厳をもって暮らしていくことの重要性について認識することが必要。本人の示した意思は、それが他者を害する場合や本人にとって見過ごすことのできない重大な影響が生ずる場合でない限り尊重される。

また、意思決定支援にあたっては、身近な信頼できる関係者等がチームとなって必要な支援を行う体制（意思決定支援チーム）が必要である。

日常生活・社会生活等における意思決定支援のプロセス

人的・物的環境の整備

- 意思決定支援者の態度
(本人意思の尊重、安心感ある丁寧な態度、家族関係・生活史の理解 など)
- 意思決定支援者との信頼関係、立ち会う者との関係性への配慮
(本人との信頼関係の構築、本人の心情、適慮などへの心配り など)
- 意思決定支援と環境
(緊張・混乱の排除、時間的ゆとりの確保 など)

意思形成支援：適切な情報、認識、環境の下で意思が形成されることへの支援

[ポイント、注意点]

- 本人の意思形成の基礎となる条件の確認（情報、認識、環境）
- 必要に応じた 都度、繰り返しの説明、比較・要点の説明、図や表を用いた説明
- 本人の正しい理解、判断となっているかの確認



意思表明支援：形成された意思を適切に表明・表出することへの支援

[ポイント、注意点]

- 意思表明場面における環境の確認・配慮
- 表明の時期、タイミングの考慮（最初の表明に縛られない適宜の確認）
- 表明内容の時間差、また、複数人での確認
- 本人の信条、生活歴・価値観等の周辺情報との整合性の確認



意思実現支援：本人の意思を日常生活・社会生活に反映することへの支援

[ポイント、注意点]

- 意思実現にあたって、本人の能力を最大限に活かすことへの配慮
- チーム(多職種協働)による支援、社会資源の利用等、様々な手段を検討・活用
- 形成・表明された意思の客観的合理性に関する慎重な検討と配慮

意思決定支援のプロセスの記録、確認、振り返り

各プロセスで困難・疑問が生じた場合は、チームでの会議も併用・活用

14

VI 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進

- ・ 高品質・高効率なコホートを全国に展開するための研究等を推進
- ・ 認知症の人が容易に研究に参加登録できるような仕組みを構築
- ・ ロボット技術やICT技術を活用した機器等の開発支援・普及促進
- ・ ビッグデータを活用して地域全体で認知症予防に取り組むスキームを開発

VII 認知症の人やその家族の視点の重視

① 認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解を深めるキャンペーンの実施

(再掲)

② 初期段階の認知症の人のニーズ把握や生きがい支援

- ・ 認知症の人が必要と感じていることについて実態を把握する取組や支援体制の構築手法等を検討
 - ※ 地域で認知症の人が集い、発信する取組(本人ミーティング)の手引きを周知し、診断直後から本人ミーティングにつながるまでの一連の支援体制の構築手法等について検討。
- ・ 認知症の人の生きがいづくりを支援する取組を推進

③ 認知症施策の企画・立案や評価への認知症の人やその家族の参画

- ・ 認知症の人やその家族の視点を認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための好事例の収集や方法論の研究

15

7. 脳とこころの健康大国実現プロジェクト 平成30年度予算のポイント

認知症やうつ病などの精神・神経疾患等の発症に関わる脳神経回路・機能の解明に向けた研究開発及び基盤整備を各省連携の下に強力に進めることにより、革新的診断・予防・治療法を確立し、精神・神経疾患等を克服する。

◆国際的な基礎脳科学・疾患関連脳科学研究における協力体制の構築を推進するとともに、認知症等の対策に資する新たな研究開発を開始する。

AMEDによる一貫した支援・推進体制(PD/PS/PO連絡会等による連携促進)

トランスレーショナルリサーチの更なる充実と社会実装化に向けた推進

臨床からのフィードバックに基づく基礎研究への展開
(新たなシーズの創出・検証研究等)

基礎的研究

【文】革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト(革新脳)

霊長類の高次脳機能を担う神経回路の全容をニューロンレベルで解明し、精神・神経疾患の克服や情報処理技術の高度化等に貢献

- ・中核拠点 (霊長類の脳構造・機能マップ作成、技術開発)
- ・臨床研究グループ (ヒト精神・神経疾患等原因究明等に向けた研究開発)
- ・技術開発個別課題 (中核拠点、臨床研究グループが必要な技術を開発)

基礎脳科学・疾患関連脳科学研究における国際連携を加速するための体制構築

脳機能ネットワークの解明

連携

協力

疾患原因究明や、
診断・予防・治療法の
シーズ創出と育成

国際連携

【文】脳科学研究戦略推進プログラム(脳プロ)

「社会に貢献する脳科学」の実現を目指し、社会への応用を明確に見据えた脳科学研究を戦略的に推進

環境適応脳 (行動選択・環境適応を支える種を超えた脳機能原理の抽出と解明)
・柔軟な環境適応を可能とする意思決定・行動選択の神経システムの研究

融合脳 (臨床と基礎研究の連携強化による精神・神経疾患の克服)
・認知症、うつ病等、発達障害等の克服
・認知症等の革新的治療法を指向したシーズ探索および実証的研究

社会実装

【厚】障害者対策総合研究事業

精神医療の診療方法の標準化及び治療法の開発

主要な精神疾患についての包括的な治療ガイドラインの策定

心の健康づくりの推進

精神疾患の予防を図るための介入プログラムの開発を実施

依存症対策の推進

薬物依存症、アルコール依存症、ギャンブル等依存症などの依存症対策に資する研究を充実

精神科医療の標準化
依存症対策

【厚】認知症研究開発事業

コホート研究、レジストリ研究、臨床研究実施支援する研究、

若年性認知症、BPSDの治療指針等の研究開発等の継続

高齢化に伴う難聴者の認知症予防に関する研究

認知症における性差とそのメカニズム解明に関する研究

認知症とその他の臓器・疾患連関に関する研究

栄養摂取による認知症に及ぼす影響に関する研究

登録・連携システムを活用、推進する研究

認知症の新たな創薬シーズやバイオマーカーの臨床研究・治験を支援

支援

国立長寿医療研究センター(NCGG)

国立精神・神経医療研究センター(NCNP) 等

創薬支援ネットワーク

医療機器開発支援ネットワーク

(独)医薬品医療機器総合機構(PMDA)による支援

精神・神経疾患等の克服

16

本人ミーティングを

知る



本人ミーティングとは何か、何が大切かを伝えている本人

★本人ミーティングとは

認知症の本人が集い、本人同士が主になって、自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場です。

『集って楽しい!』に加えて、本人だからその気づきや意見を本人同士で語り合い、それらを本人同士、そして地域に伝えていくための集まりです。

★なぜ、本人ミーティングが必要?

本人	地域の人、支援関係者、行政
◆声をよく聴いてもらえない ◆わかってくれる人、仲間に出会えない ◆世話になる一方はつらい、役立ちたい ◆自分の暮らしに役立ちたい ◆生きていく強みがない ◆どこにも、元気がなくなる	◆本人の声をよく聴いたことがない ◆本人のことが、よくわからない ◆つきあい方、支え方がよくわからない ◆本人が地域の中で元気で生きていくをもって暮らし続けるために、どんな(新しい)サービスが必要かわからない

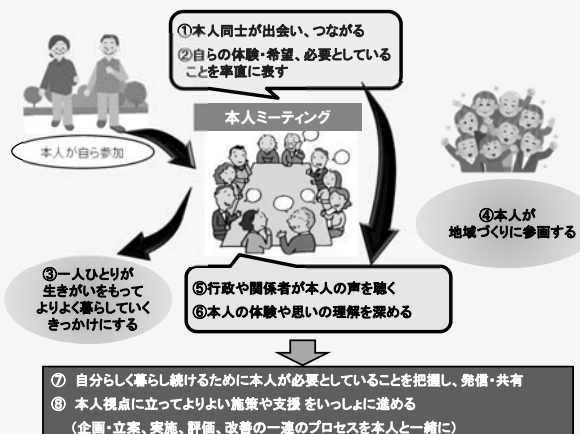
○本人が仲間と出会い、思いを率直に語れる場/聴く場が、地域にあつたら、お互いに、素に、元気になる。

○本人が、声をもとに本人と地域の様々な人が一緒に考え活かしていくことで、やさしいまちをスムーズにつくれる。

地域の現状を、みんなで一緒に、よりよく変えていこうとして
始まったのが、本人ミーティングです。

★本人ミーティングのねらい

○本人ミーティングは、認知症の人の視点を重視したやさしい地域づくりを具体的に進めていくための方法です。



参考

認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)【抜粋】

- 認知症の人が住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けるために必要と感じていることについて実態調査を行う。
- 認知症の人の暮らしを支えるために、カフェを超えた地域の中での更なる活動へと繋げていけるような認知症の人の生きがいづくりを支援する取組を推進する。
- 認知症の人やその家族の視点は、本戦略だけでなく、地方自治体レベルで認知症施策を企画・立案し、また、これを実行するに当たっても尊重されることが望ましい。認知症の人やその家族の視点を認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための好事例の収集や方法論の研究を進め、これを発信することで全国的な取組を推進していく。

ニッポン一億総活躍プラン【抜粋】

- 認知症の人が集まる場や認知症カフェなど、認知症の人やその家族が集う取組を2020年度までに全市町村に普及させ、こうした活動の情報を市町村や地域包括支援センターから住民に発信する。

本人ミーティングの様々な取組例

多様な場を活かして、多様な人たちが開催しています。

本人ミーティングでの本人の声

- 同じような体験をしている人と話せてうれしかった。自分もいろいろ言えて、元気が出た。
- 自分たちが言わないと、わかってもらえない。自分たちが話すことが、まちをよくすることに役立つと感じて、胸がすく思いがした。
- 仲間が欲しい。認知症の人同士で話し合える場所がもっと近くにほしい。
- 診断後すぐ、先生(医師)がいろいろ場につないでほしい。
- 家族がいろいろしてくれるのはありがたいが、心配すぎ。
- できることを奪わないでほしい。失敗しても怒らないで。
- (医療や介護の人)家族と話している。自分に話してほしい。
- 家族に頼らないで誰かがいてくれて、出かけられるように。
- 自分が自分でいられる場がほしい。
- 自分のやりとこといろいろある。今のサービスでなく、もっと自由な場があるといい。
- 自宅で暮らせなくなった時)家のように自由に暮らせて、やさしく助けてくれる人いる場所がほしい。
- 認知症施策を作る時に、自分たちをいければ変わるのではいい。本人の声を行政に届ける仕組みがほしい。
- 「私、認知症です」と言える社会に。

同席・同行した人の声

- 話せるか心配だったが、自分から話していき。驚いた。(家族)
- 帰り道の(本人の)足取りが軽く、とても嬉しそうでも嬉しくなった。(家族)
- 知らないことを楽しそうに話しておられた。もっと新鮮きかかなければ。(介護職)
- ふざんと活き活きさが全然違った。他の職員にも参加してもらい、一緒に変えていきたい。病棟看護士。
- こうした場があれば、大事なこと、やるべきことが具体的にわかる！(地域包括支援センター)
- やってみたらうちの地域でもできた。自分の方が元気と勇気ももらった。続けていきたい。(行政事務職)



地域食堂で(北見市)
主催:介護・医療の地域ネットワーク



駅近の交流スペースで(仙台市)
主催:本人、家族、医師、ケア関係者等、地域の多職種の自主組織



小規模多機能事業所で(上田市)
主催:社会福祉総合施設



認知症カフェで(国立市)
主催:地域の医療機関/在宅療養相談室



町役場の多目的室で(綾川町)
主催:地域包括支援センター



介護施設の交流スペースで(大牟田市)
主催:ケア関係者の研究会

※ 平成28年度老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進等事業)「認知症の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画立案や評価に反映させるための方法論等に関する調査研究事業」本人ミーティング開催ガイドブック <https://www.ilc-japan.org/study/> をもとに作成

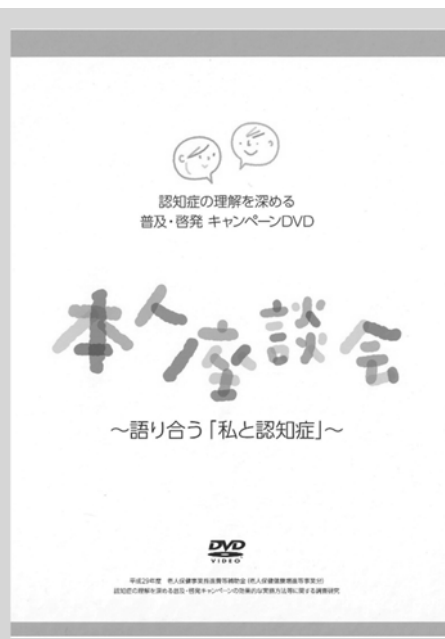
18

認知症の理解を深める普及・啓発キャンペーン

「認知症と共に生きる社会」、誰もが自分らしく暮らすことができる「地域共生社会」の中で、「認知症」をどう考えるか、一人ひとりが自分のことと考えるためのDVDを作成。

※映像内容は、下記のURLからも確認いただけます。

https://www.npwo.or.jp/dementia_campaign/index.html



DVD映像は、4人の認知症当事者が、今、伝えたいことを、考え話し合ったものです。

～以下、『活用の手引き』から抜粋～

- とりわけ、これまであまり「認知症」について考えてこなかった、そのような人にぜひ視聴いただきたいと思っています。
- 自分の抱いていた「認知症」とどこが同じなのか、あるいはどこが違うのか、認知症の人の発言を聞いてどう思ったかなど、改めて「認知症」について考えてみてください。
- 多様な価値観の中で、あなた自身の「認知症観」を考えていただきたいのです。ですので、このDVDは、認知症について何らかの「答え」を提供するものではありません。むしろ、話し合った認知症の当事者からの「問いかけ」とも言えるでしょう。それぞれの答えは、これを見た皆さんの側にあります。



19

終わりに

- 認知症高齢者等にやさしい地域の実現には、国を挙げた取組が必要。
⇒ 関係省庁の連携はもとより、行政だけでなく民間セクターや地域住民自らなど、様々な主体がそれぞれの役割を果たしていくことが求められる。
- 認知症への対応に当たっては、常に一歩先んじて何らかの手を打つという意識を、社会全体で共有していかなければならない。
- 認知症高齢者等にやさしい地域は、決して認知症の人だけにやさしい地域ではない。
⇒ コミュニティーの繋がりこそがその基盤。認知症高齢者等にやさしい地域づくりを通じ地域を再生するという視点も重要。
- 認知症への対応は今や世界共通の課題。
⇒ 認知症ケアや予防に向けた取組についての好事例の国際発信や国際連携を進めることで、認知症高齢者等にやさしい地域づくりを世界的に推進。
- 本戦略の進捗状況は、認知症の人やその家族の意見を聞きながら随時点検。
- 医療・介護サービス等の提供に関し、個々の資源の整備に係る数値目標だけでなく、これらの施策のアウトカム指標の在り方についても検討し、できる限りの定量的評価を目指す。
⇒ これらの点検・評価を踏まえ、本戦略の不断の見直しを実施。

22

参 考 資 料

介護保険法の改正（抜粋）

（認知症に関する施策の総合的な推進等）

第5条の2 国及び地方公共団体は、認知症（脳血管疾患、アルツハイマー病その他の要因に基づく脳の器質的な変化により日常生活に支障が生じる程度にまで記憶機能及びその他の認知機能が低下した状態をいう。以下同じ。）に対する国民の関心及び理解を深め、認知症である者への支援が適切に行われるよう、認知症に関する知識の普及及び啓発に努めなければならない。

2 国及び地方公共団体は、被保険者に対して認知症に係る適切な保健医療サービス及び福祉サービスを提供するため、認知症の予防、診断及び治療並びに認知症である者の心身の特性に応じたリハビリテーション及び介護方法に関する調査研究の推進並びにその成果の活用^{（一）}に努めるとともに、認知症である者を現に介護する者の支援並びに認知症である者の支援に係る人材の確保及び資質の向上を図るために必要な措置を講ずることその他の認知症に関する施策を総合的に推進するよう努めなければならない。

3 国及び地方公共団体は、前項の施策の推進に当たっては、認知症である者及びその家族の意向の尊重に配慮するよう努めなければならない。

※下線部が改正箇所。

24

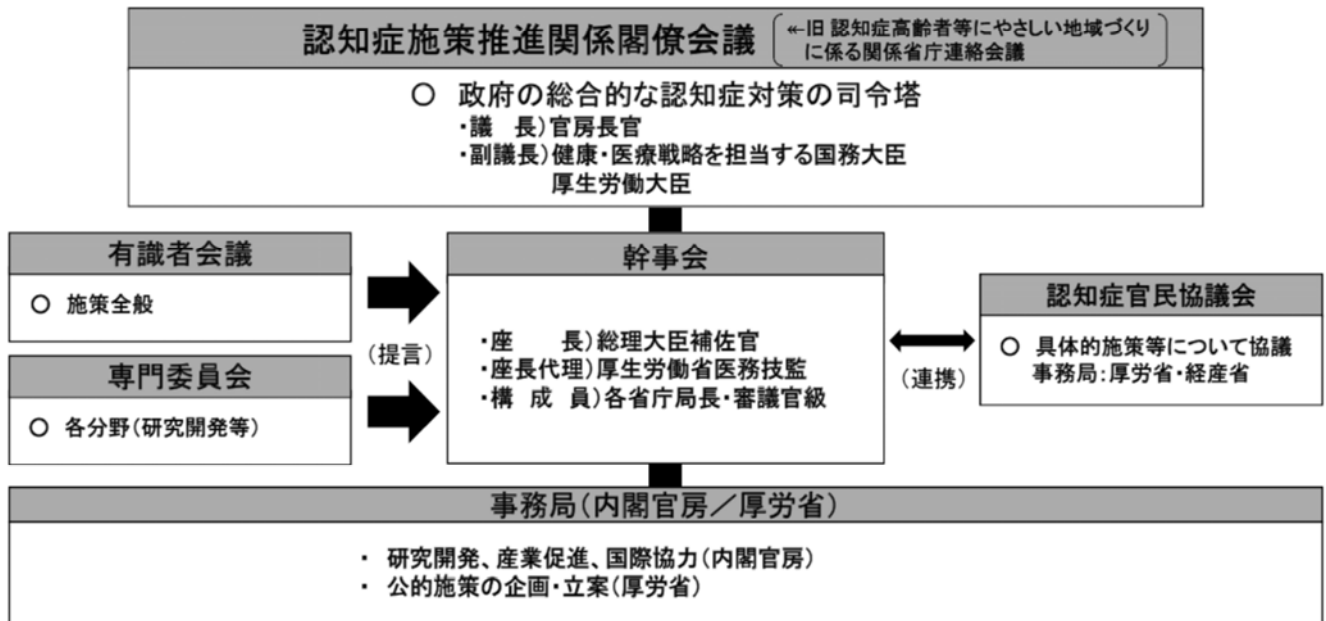
数値目標一覧

項目	新プラン策定時	進捗状況(H28年度末)	(現) 目標	目標案 (H32年度末)
認知症サポーター養成	545万人 (H26.9末)	880万人	800万人 (H29年度末)	1,200万人
かかりつけ医認知症対応力 向上研修	38,053人 (H25年度末)	5.3万人	6万人 (H29年度末)	7.5万人
認知症サポート医養成研修	3,257人 (H25年度末)	0.6万人	5千人 (H29年度末)	1万人
歯科医師認知症対応力 向上研修	－	0.4万人	H28年度より 研修開始	2.2万人
薬剤師認知症対応力 向上研修	－	0.8万人	H28年度より 研修開始	4万人
認知症疾患医療センター	289か所 (H26年度末)	375か所	500か所 (H29年度末)	500か所 ※2次医療圏域に少なくとも 1センター以上設置
認知症初期集中支援チーム 設置市町村	41か所 (H26年度末)	703か所	全市町村 (平成30年度～)	好事例の横展開等により 効果的な取組の推進
一般病院勤務の医療従事者 認知症対応力向上研修	3,843人 (H25年度末)	9.3万人	8.7万人 (H29年度末)	22万人
看護職員認知症対応力 向上研修	－	0.4万人	H28年度より 研修開始	2.2万人
認知症介護指導者養成研修	1,814人 (H25年度末)	2.2千人	2.2千人 (H29年度末)	2.8千人
認知症介護実践リーダー研修	2.9万人 (H25年度末)	3.8万人	4万人 (H29年度末)	5万人
認知症介護実践者研修	17.9万人 (H25年度末)	24.4万人	24万人 (H29年度末)	30万人
認知症地域支援推進員の 設置市町村	217か所 (H26年度末)	1.2千か所	全市町村 (平成30年度～)	好事例の横展開等により 効果的な取組の推進
若年性認知症に関する事業の 実施都道府県	21か所 (H25年度)	42か所	全都道府県 (平成29年度末)	コーディネーターの資質向上 好事例の横展開の推進
認知症カフェ等の設置	－	H25年度から 国の財政支援実施	－	全市町村

25

推進体制(案)

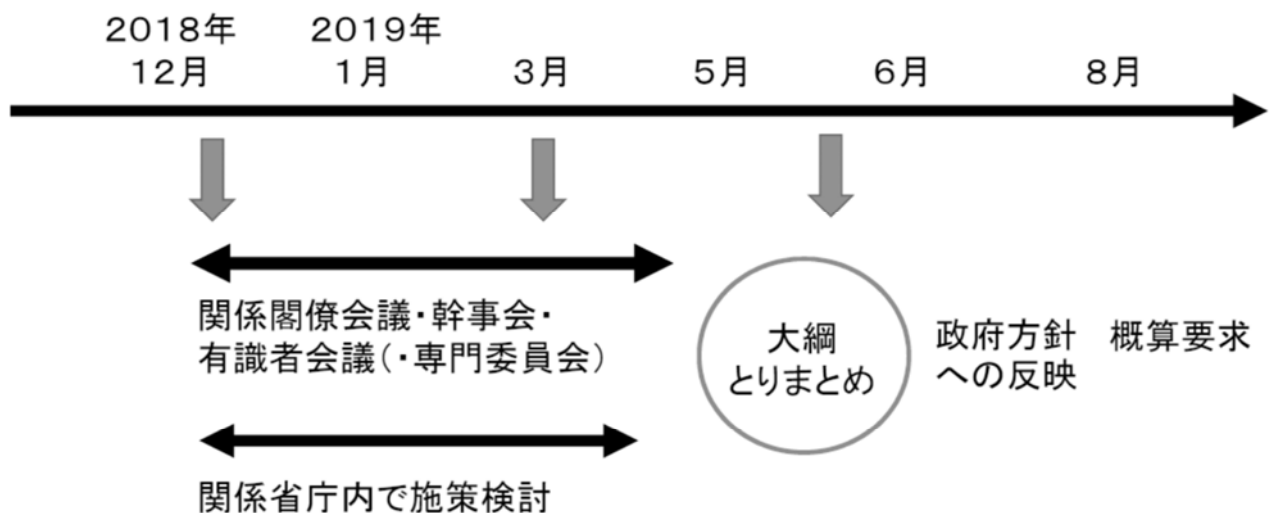
認知症に係る諸問題について、関係行政機関の緊密な連携の下、政府一体となって総合的な対策を推進するため認知症施策推進関係閣僚会議の設置をはじめ、横断的かつ実質的な推進体制を構築。



26

スケジュール(案)

関係行政機関からの施策を取りまとめて大綱を策定し、政府方針へ反映。



27

認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)の進捗状況及び今後の方向性

策定経緯・取り巻く状況

- 高齢者の4人に1人が認知症またはその予備軍とされ、今後も増加が見込まれる。
- 2014年の認知症サミット日本後継イベントにおいて、安倍総理の指示を受け2015年1月に新オレンジプランを策定。

進捗・取組状況

- 2017年7月に改定した数値目標(2020年度末)は15項目設定(次ページ)
 認知症サポーターの養成 : 1066万人(2018年9月末)
 認知症サポート医の養成 : 8000人(2018年3月末)
 認知症初期集中支援チームの設置 : 1736市町村(2018年11月末)
 認知症カフェの設置 : 1265市町村(約6千カ所)(2018年11月末) など
- 認知症サポーターの養成について、大人だけでなく小中学生にも広げると共に、認知症の方に関わることの多い業界(金融機関、交通機関、マンション管理など)でも拡大
- 本人・家族視点を重視した、認知症の当事者・家族の方による発信の拡充、社会参加の推進
- 成年後見制度利用促進基本計画に基づく施策の着実な推進
 「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」を策定
- 新オレンジプランを契機に新たな取組を開始した自治体も多く、認知症の方とその家族を支援する地域資源は着実に増加

今後の方向性

- 厚生労働省が中心的役割を担い、引き続き「共生」を重視しつつ、「予防」の取組も一層強化し、車の両輪として取り組む。

共 生



予 防

28



ご静聴ありがとうございました。

認知症施策推進室では、Facebookアカウントを運用しています。

オレンジポスト~知ろう認知症~

検索



認知症に関する様々な情報を発信しています。
フォロー、いいね！よろしくお願いします。

厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室

事業の概要と見えてきたこと



藤田 和子 検討委員

日本認知症本人ワーキンググループ*
代表理事

永田 久美子 検討委員

認知症介護研究・研修東京センター
研究部長

* 一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）
認知症とともに暮らしている本人が主になって結成された全国組織。
希望と尊厳をもって暮らしていける地域社会を創っていくことをめざして活動をしている。

お伝えしたいこと

1. 今回の事業の背景と目的

2. 事業の内容:取組んだこと

3. 主な結果と見えてきたこと

4. これからに向けて

Ⅰ. 今回の事業の背景と目的

【背景】 認知症施策が、年々、急ピッチで進められている

「本人視点の重視」「本人の意思の尊重」「自分らしく暮らし続けることができる社会」が目指されている。

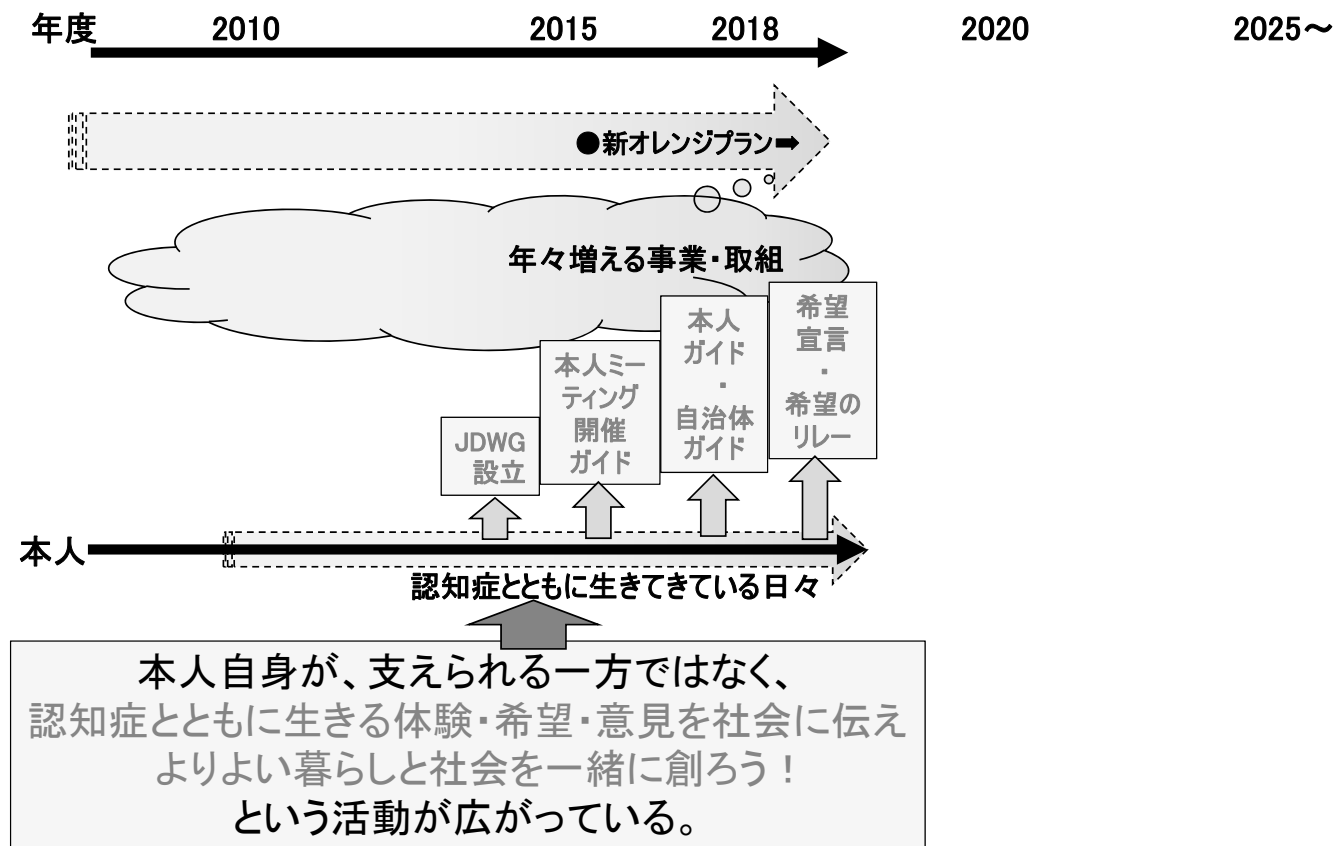


年度 2010 2015 2018 2020 2025

A thick black horizontal arrow pointing to the right, starting from the year 2010 and ending at 2018.

【背景】 認知症施策が、年々、急ピッチで進められている

「本人視点の重視」「本人の意思の尊重」「自分らしく暮らし続けることができる社会」が目指されている。



私たち本人の声を活かして生まれた成果物（研究事業）



★本人にとってのよりよい暮らしガイド
【通称;本人ガイド】
認知症の診断が新たなスタート。
よりよく生きていくための
本人向けガイド（2017年度）



★本人ミーティング開催ガイド
本人同士が出会い、語りあい、
よりよい暮らしと地域を、
共に創っていくための
本人ミーティングのポイント・
事例を紹介（2016年度）

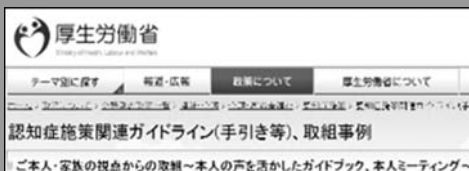
都道府県・市町村向けガイド



★本人の声を起点にした認知症
地域支援体制づくりガイド
全国の自治体が、本人とともに
着実に地域支援体制を築いて
いくためのガイド（2017年度）

厚生労働省のホームページから、
3つのガイドをダウンロードできます。

厚労省 本人ガイド で、検索！



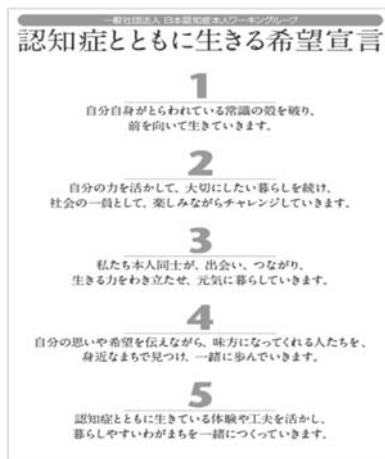
本人ガイドは
JDWGで頒布
しています。
（巻末参照）

認知症になってからも、希望をもってよりよく生きる可能性が広がっている！

認知症とともに生きる希望宣言(2018)

～一足先に認知症になった私たちから、すべての人へ～

- * 日々いろんなことが起き、不安や心配はつきませんが、可能性がたくさんあることも見えてきました。
- * 一度しかない人生をあきらめないで、自分らしく暮らし続けたい。
- * 次に続く人たちが、暗いトンネルに迷いこまずにもっと楽に、いい人生を送って欲しい。よりよい日々、人生を送ってほしい。
- * 私たちは、自分の体験と意志をもとに、「認知症とともに生きる希望宣言」をします。



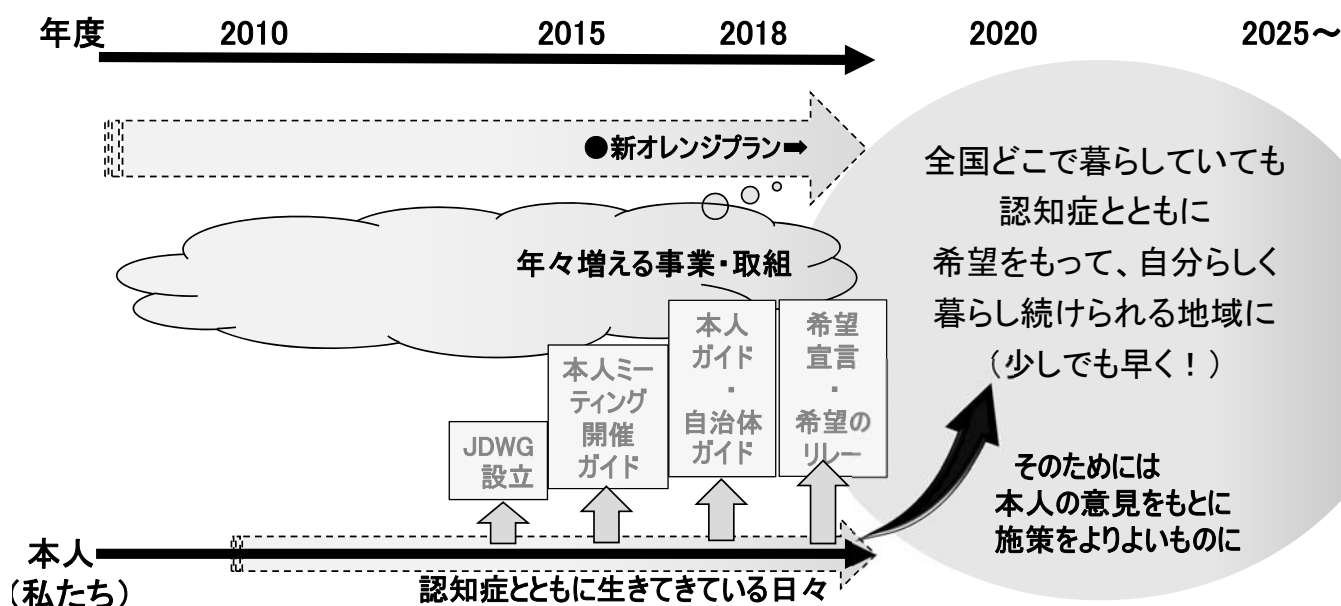
参考：配布資料/巻末資料



★希望のリレーが
全国各地で

【背景】 認知症施策が、年々、急ピッチで進められている

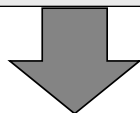
「本人視点の重視」「本人の意思の尊重」「自分らしく暮らし続けることができる社会」が目指されている。



認知症施策が、本人からみて真にやさしい地域を創りだすものに

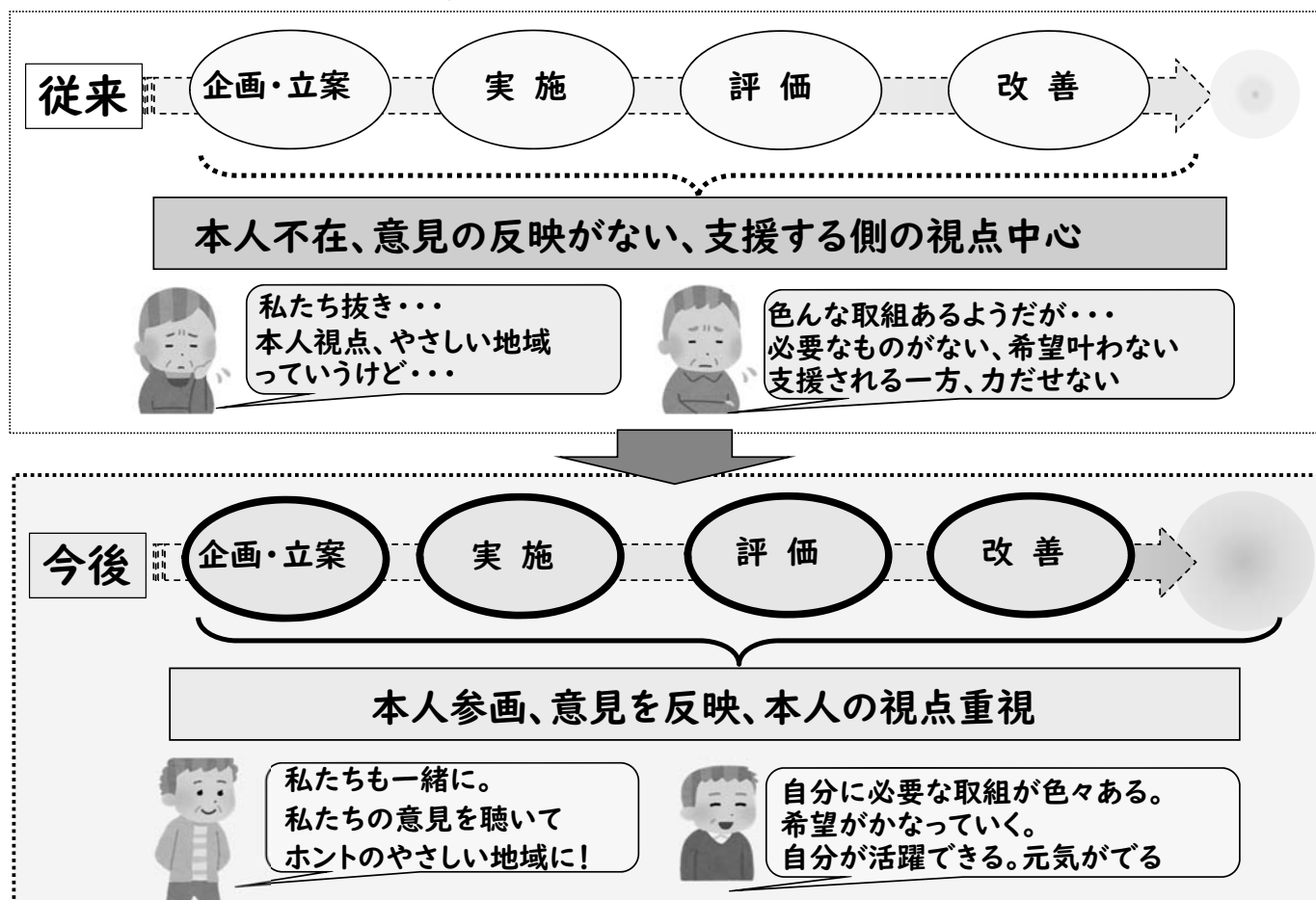
【今年度の事業の目的】

認知症の人の意見をもとに、
各自治体の認知症施策や事業を
よりよいものに改善していくための
方法論を明らかにする。

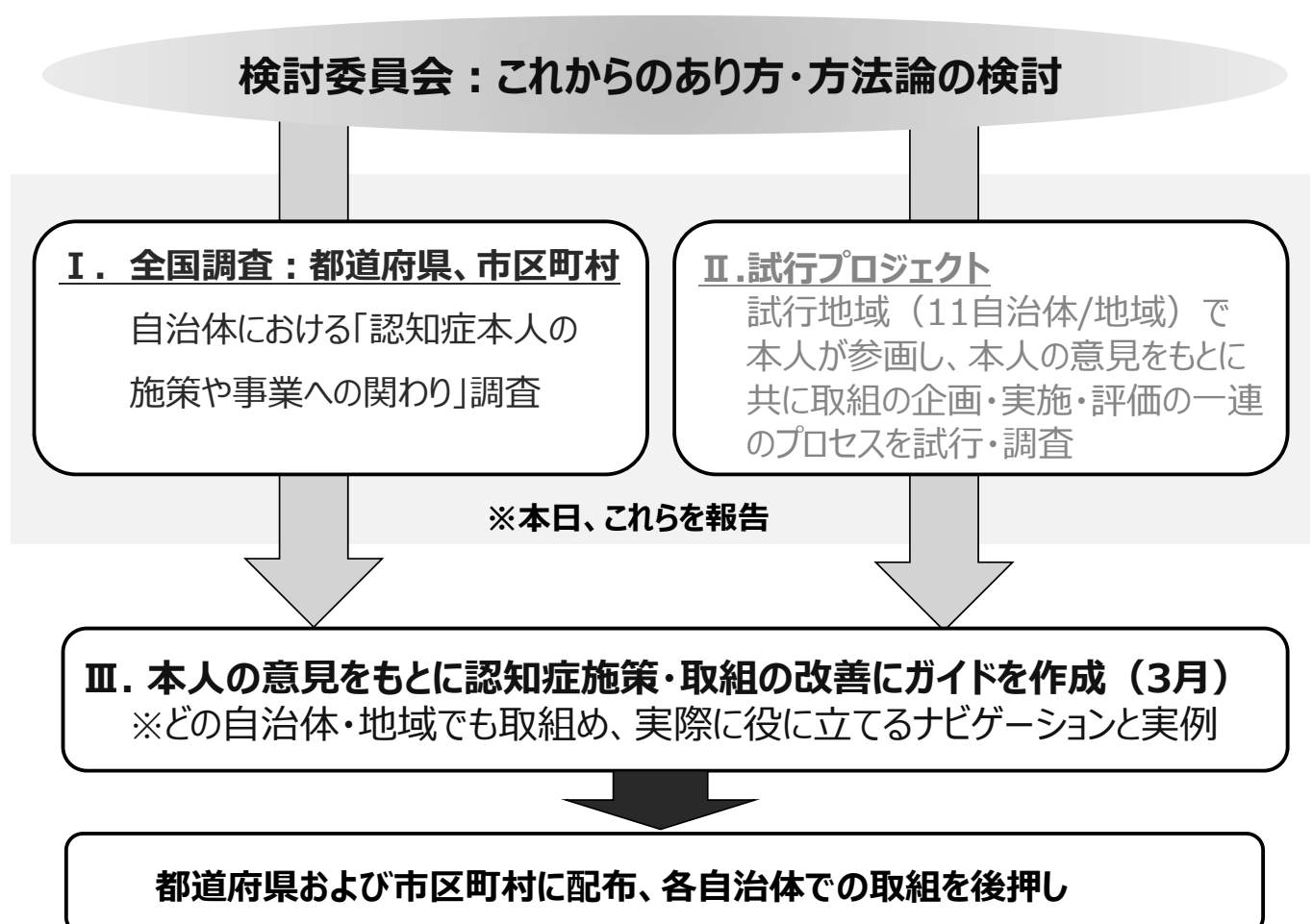


どの自治体でも、認知症の本人の視点にたって
真に効果的な施策を着実に展開していくことを
推進する。

自治体の施策や事業のあり方は・・・



2. 事業の内容：取組んだこと



4. 主な結果と見えてきたこと

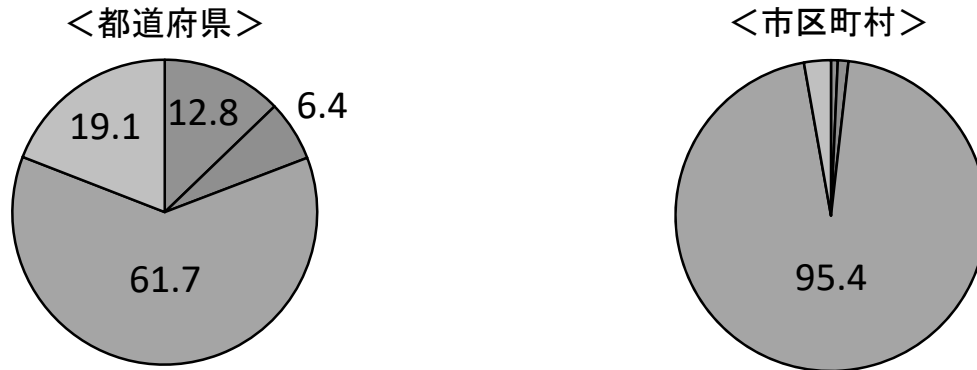
I. 全国調査 結果概要

- 調査対象：都道府県（47）・市区町村（1,741）
- 調査時期：平成30年10月～平成31年1月
- 調査方法：電子メールによる調査票送付・回収
（市区町村は、都道府県の協力を得て送付、回収は直接）

区分	回答数	回答率
都道府県	47	100.0%
市区町村	1,025	58.9%

全国調査 結果概要

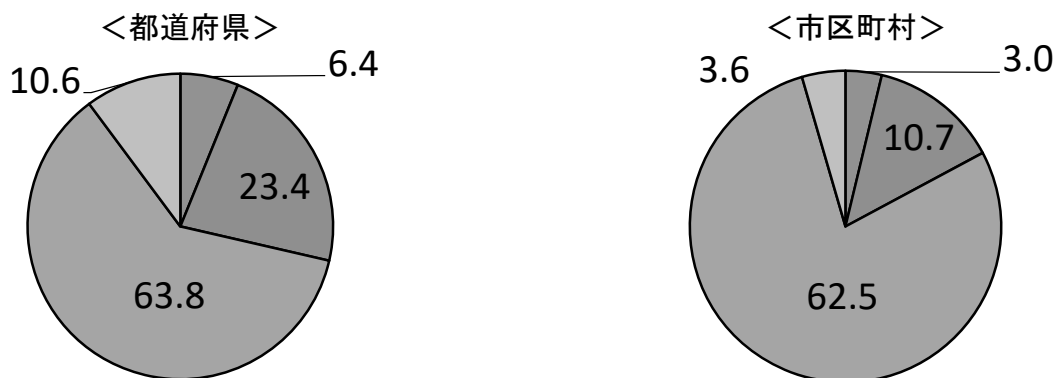
1. 認知症施策等の計画作りに関する本人の参画状況



	都道府県 (%)		市区町村 (%)	
実際に委員会等に入ってもらい、本人の意見を聴いている。	6	12.8	7	0.7
会議に本人を招いて話をしてもらったことはあるが、委員としての参画はない。	3	6.4	11	1.1
委員会等への本人の参画や、本人を招いて話をしてもらったことはない。	29	61.7	975	95.4
その他	9	19.1	29	2.8
無回答	0		3	
全回答数	47		1,025	

全国調査 結果概要

2. 認知症施策等に関する事業や取組の評価や見直し等への本人の参画状況



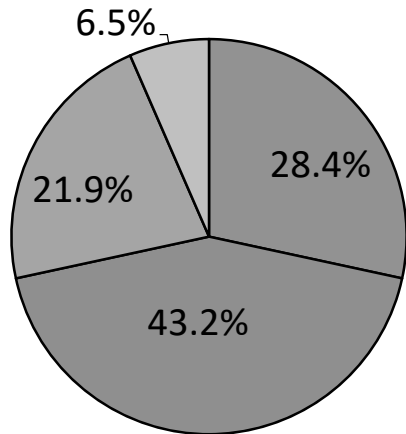
	都道府県 (%)		市区町村 (%)	
事業等の評価の段階で本人の意見を聴いている。	3	6.4	31	3.0
事業等の工夫や改善のために、本人の意見を聴いている。	11	23.4	110	10.7
事業等の評価や見直しについて、本人に意見を聴いたことはない。	30	63.8	641	62.5
その他	5	10.6	37	3.6
全回答数	47		1,025	

全国調査 結果概要

3. 本人ミーティングの開催

* 本人ミーティング：地元の本人が集り、本人同士で自らの体験や必要なこと、希望等を話し合い、本人の声を、暮らしや地域に活かしていくための機会

1) 市町村での開催状況



開催あり	291	28.4%
開催無し	443	43.2%
あるかどうか、把握していない	224	21.9%
その他	67	6.5%
合計数	1025	

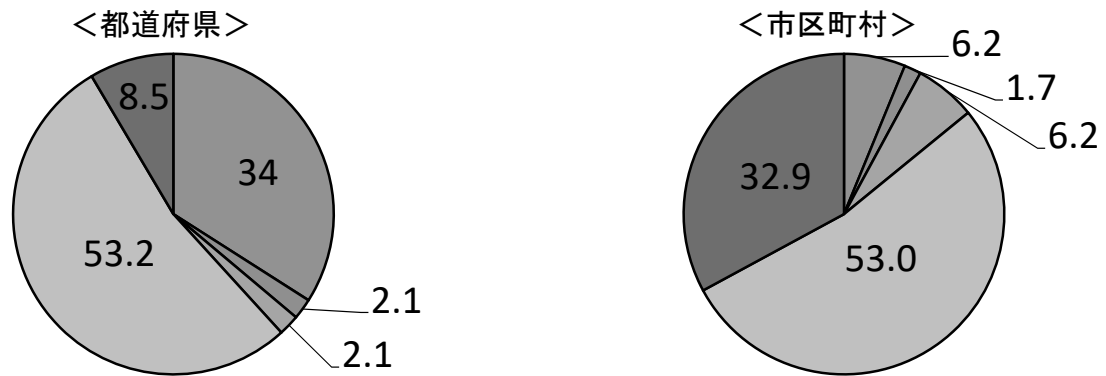
全国調査 結果概要

2) 市町村で開催「あり」の場合の実施主体

	複数回答	市区町村 (%) (N=1,025)
①都道府県が主催/委託して、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		8.2
②市区町村が主催/委託して、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		11.4
③本人の自助グループが、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		2.1
④家族の自助グループが、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		8.5
⑤管内医療機関（認知症疾患医療センター等）が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		3.9
⑥管内介護事業所が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている		10.1
⑦管内医療・介護職等の自主組織が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		4.0
⑧管内社協等、地域活動組織が、本人同士が集まり話し合う機会をつくっている。		7.6

全国調査 結果概要

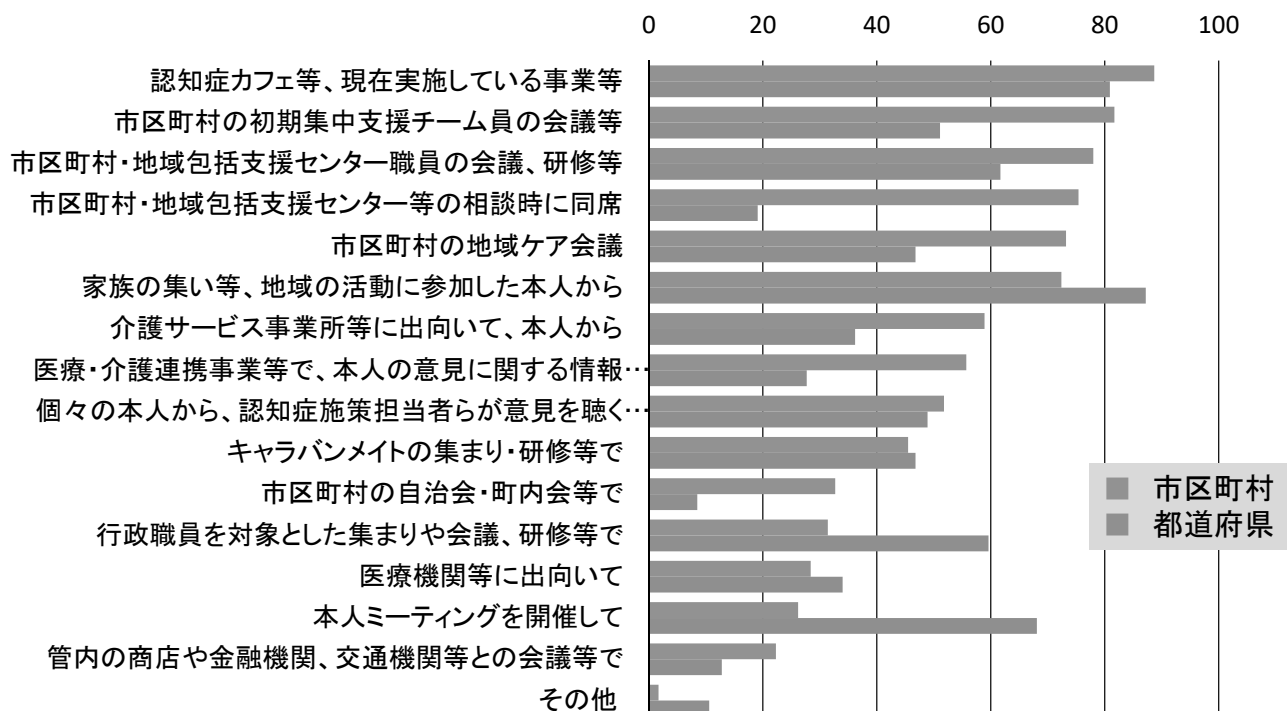
4. 認知症施策・事業・取組について、認知症の本人の意見を聴く計画



	都道府県 (%)		市区町村 (%)	
平成30年度中に実施する具体的な計画がある。	16	34	64	6.2
平成30年度中に実施を検討したい。	1	2.1	17	1.7
具体的な計画・予定はないが、平成30年度中に何らかの意見を聴く試みをしたい。	1	2.1	64	6.2
平成30年度はないが、次年度以降の実施にむけて検討したい。	25	53.2	543	53.0
実施・検討の予定はない。	4	8.5	337	32.9
全回答数	47		1,025	

全国調査 結果概要

5. 認知症の本人に意見を聴く場合の 実施可能と考える機会と場、方法



全国調査 結果概要

6. 認知症施策等に関する事業・取組について、 本人に意見を聴くこと、意見を活かすことへの課題と考えること

<都道府県・自由記述の主なもの>

意見を聴く取組をまだ進めていない	意見を聴く取組を進めている
○意見をいう本人がいない。 ○意見をいう本人に出会えない。 ○意見をいう本人を集められない。 ○偏見が強く、本人が声を出せない。 ○家族を通じての把握になってしまう。 ○意見を聞く力をつけることが必要。 ○担当者が少なく、そこまでやれない。 ○新しい事業が多く、優先度が低い	○市町村とのつながりが重要。市町村に 出向いて、本人の声を聴くようにしている。 ○一人の人がきっかけで広がっていく。 ○県として力をいれてきており、県で 本人の意見を聞く場を作り、市町村 の機運が高まっている。 ○推進しているが市町村の取組に温度差。 ○意見を聴くようになってきているが、 施策等への反映はこれから。 ○意見をもとに、大きなことではなく、 ちょっとした改善が大事。その共通 認識が必要。

全国調査 結果概要

6. 認知症施策等に関する事業・取組について、 本人に意見を聴くこと、意見を活かすことへの課題と考えること

<市区町村・自由記述の主なもの>

意見を聴く取組をまだ進めていない	意見を聴く取組を進めている
○意見を言える人がいない。 ○進んでしまってからの方が多く、 本人が話せない。 ○周囲に知られたくない人が多く 本人が出てない。 ○家族に依頼したが、本人は無理と。 ○本人のことを聴こうと思うが、家族の困り 事を聴くことが中心になってしまう。 ○業務量が増える一方。人手、時間ない。 ○目標値、成果を求められるので、数に なりにくい曖昧なことには、動けない。	○本人の声を聴くことを、あたりまえの ことにする（明確にする）と取組が進む。 ○相談業務等で本人に会う職員らが日常 的に意見を聞き、その情報を施策や事業に 活かしていく。 ○認知症に向き合い、オープンにできる地域 （環境）づくりを進めること。 ○聞く、で終わらずに、事業に活かすことを 目的としていくことが大事。 ○本人や家族等への配慮、意見を言っ てくれた人のフォローをどのようにするか、 本人が参画しやすくその後がよりよくなる ための一連の流れとして考えることが必要。

全国調査 結果概要

7. 認知症施策等に関する事業・取組をよりよいものにしていくための計画・点検・評価に本人が参画することを進めていく上で必要なこと

＜複数回答＞

	都道府県(44)		市区町村(963)	
①他地域の取組事例を知りたい。	44	100.0%	891	92.5%
②他地域の計画・企画について具体的に知りたい。	41	93.2%	842	87.4%
③関係者間の合意づくりの際に利用できる資料がほしい。	34	77.3%	702	72.9%
④本人による点検・評価等の具体的な進め方や内容を知りたい。	38	86.4%	751	78.0%
⑤本人の参画に関する研修や情報交換の場がほしい	37	84.1%	724	75.2%
⑥本人による点検・評価等の実際を見て知ることでわかるわかりやすい映像資料がほしい。	31	70.5%	528	54.8
⑦特になし	1	2.3%	44	4.6%

全国調査（概要）から見えてきたこと

①施策等の計画作りに本人が何らかの形で参画しているのは
都道府県 約20%
市区町村 約 2%

②事業や取組の評価や見直し等への本人の何らかの参画状況は
都道府県 約30%
市区町村 約14%

③本人ミーティングの開催状況は
市区町村 約 28%

④今後、施策等について本人の意見を聴く計画あり（検討も含め）
都道府県 91.5%
市区町村 67.1%

⑤計画・点検・評価に本人が参画することを進めていく上で必要なこと
都道府県、市区町村ともに、
取組事例、具体情報、研修や
情報交換、合意形成の資料を
7割以上が求めている。

①今は施策等への本人参画のスタートの時期

②本人の意見を聴く・参画に関する意識・動きに、自治体間で大きな開きがある

③都道府県が重要性を意識し動き始めた地域では、市町村も動き始めている

④3割の市区町村で本人ミーティングが開催されるようになっており、形骸化させずに、本人が意見を発信し、それを活かす場に育てていくことが必要

⑤本人の意見を聴く計画がある自治体が高率に上っている。
計画や見直しへの本人参画進めるための、
取組事例や情報交換を求める声が多く、
どの地域でも取組みやすい具体情報の
共有を図ることで、本人意見をもとにした
取組の加速が期待される。

⑥本人意見重視の価値や意義について
自治体関係者の合意形成が必要。

Ⅱ．試行プロジェクト 結果概要

試行プロジェクトの目的

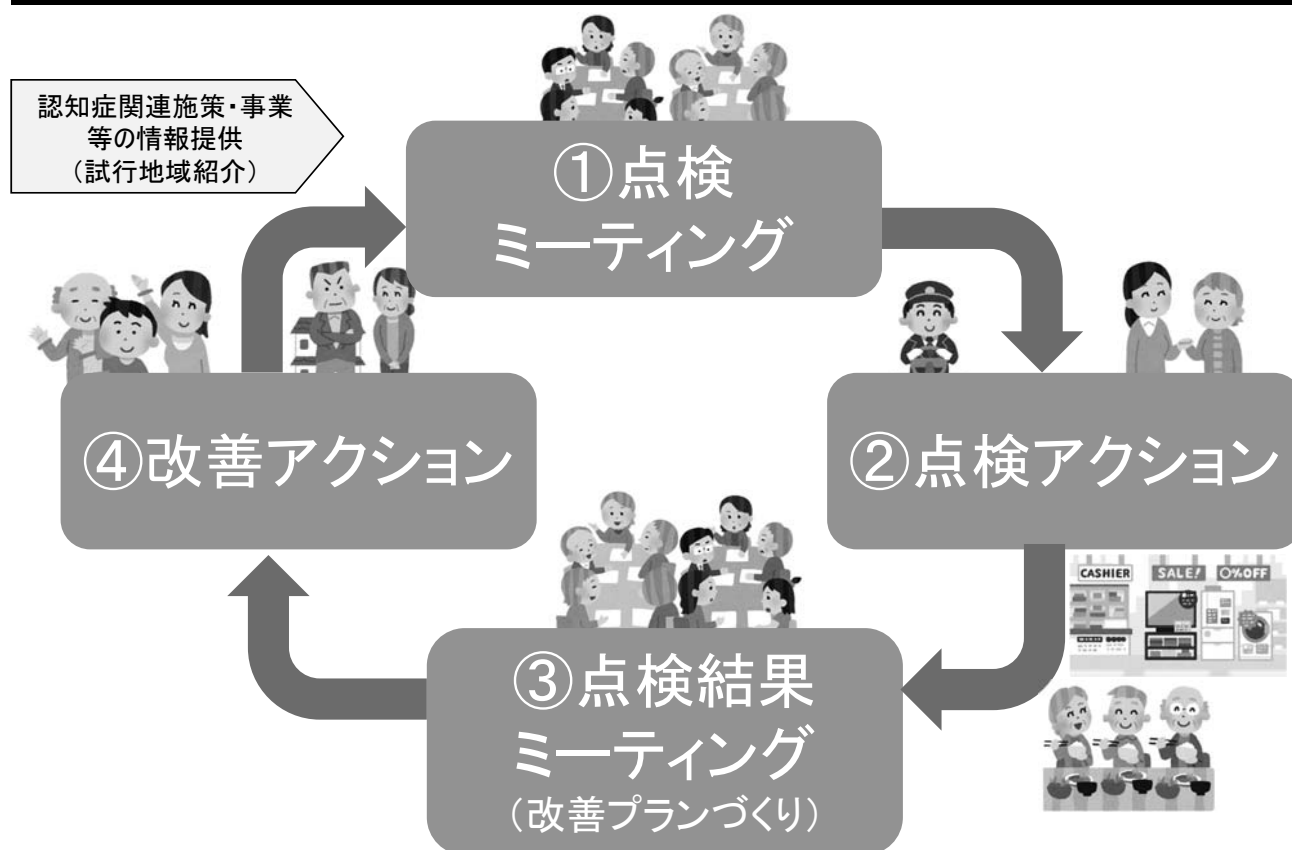
各地域の特性や実情に応じて、本人が参画しながら
施策・取組等を企画・実施・点検・改善するプロセスを、
実際に各地域で試行してみることを通じて、本人が参画した
多様な取組方法、成果と課題等を明らかにし、次に続く地域
がより取組やすく効果的に進めていけるための知見や事例
を提示する。

試行プロジェクト実施地域

	地域	都道府県	人口(高齢化率) * 2018年	主な実施主体
1	北見市	北海道	●人口:117,993人(32.4%)	介護事業者等による地域食堂、
2	大崎市	宮城県	●人口:131,692人(28.7%)	行政+認知症地域支援推進員
3	藤沢市	神奈川県	●人口:430,662人(24.2%)	行政+認知症地域支援推進員
4	上田市	長野県	●人口:158,309人(29.1%)	地区組織(豊殿地区 安心の会)
5	有田市	和歌山県	●人口:28,740人(32.3%)	行政+認知症地域支援推進員
6	有田川町		●人口:26,919人(31.19%)	行政+認知症地域支援推進員
7	御坊市		●人口:24,005人(30.12%)	行政+認知症地域支援推進員
8	鳥取市	鳥取県	●人口:188,562人(28.3%)	行政+認知症地域支援推進員
9	三豊市	香川県	●人口:66,642人(34.52%)	認知症疾患医療センター(西香川病院)
10	諫早市	長崎県	●人口:136,746人(29.00%)	行政+認知症地域支援推進員 +県内の当事者
11	大和村	鹿児島県	●人口:1,524人(39.8%)	行政+郡医師会

* 都道府県として静岡県が、共同試行

試行プロジェクトのプロセス



①点検ミーティング

「認知症の本人」が参画するミーティングを開催し、

- ①今ある施策、事業、取組みについて、本人の感想や意見を聴く。
- ②本人たちが、日頃望んでいること
(こんなことがあれば暮らしやすいか等)を聴く。
- ③本人がともに「点検」を行いたい事業・取組み等をリストアップ

例: ○認知症カフェ等、今ある事業・取組の機会と場を活用。
○地域密着型サービス等で、利用者の声を聴く。
○訪問の際の「話題」にしてみる。



②点検アクション



点検ミーティングの結果のまとめ(整理)、
実際にどうかを確認してみる

(本人もできるだけ参加)

○今ある事業にちょっと工夫で改善できること

(ちょっとした手順の見直しや、付けたし等:事業のチューンナップ)

○本人が利用している地域資源等への協働をアプローチ

○本人の声をもとに、今後地域で取り組んでみたいことを
地域で話し合う

例:○認知症カフェ等、今ある事業・取組の機会と場を活用。

○医療機関・介護サービス事業所等の職員と話しあう機会を設ける

○町内会・民生委員等と情報を共有する機会を設ける



③点検結果ミーティング (プランづくり)

「点検アクション」を通してわかったことを整理する。

○今ある事業にちょっと工夫で改善できること

(ちょっとした手順の見直しや、付けたし等:

(事業の”チューンナップ”)

○本人が利用している地域資源等への協働を
アプローチ

○本人の声をもとに、今後地域で取り組んでみたい
ことを本人と地域で話し合う



④改善アクション



- それぞれの改善アクションプランをもとに、取り組みを本人とともに進めていく。
- 取り組みについては、本事業の一部としてだけではなく、各地域の認知症施策・事業のPDCA（計画-実施-評価-改善）の一環として、継続的な取り組みにつなげていく。

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

①地元には、意見を伝え改善に参画したい思いのある本人がいる

○身近な地域にいる本人との出会い

スタート前、「本人の意見を聴けていなかった」、「意見を語る本人に出合えていなかった」という自治体でも、「取組む」方針を決め、アンテナをはることで、意見を語る「本人」が身近にいることが分かり、出会い・つながり、取組が進んでいった。

* 本人の日頃の支援者等、なじみの人とのつながり・協力が大切

○近隣自治体で、すでに発信している本人の力を借りて

自治体内では難しくても、近隣自治体ですでに発言や活動を始めている本人の参画を依頼しその人とともに取り組みを進めていくと、その人の姿や声に触発されて、地元の本人たちが声をあげ、つながりはじめる。

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

②本人を「対象者」ではなく、「協働者」とし、
ともに創っていく関係者・方針の共有が重要

- 行政等から「意見を聴取される」のではなく、自分が秘めている「思いや希望、意見」を自由に伝えられる(つぶやける)関係の中で、本人が思いがけない率直な意見を発信。
- 「聴かれておしまい」ではなく、「一緒につくる」プロセスを通じて本人が「発信力」を高め、改善へのアイデアが増えていく。
本人自身が自信を高め、元気になっていく。
- 最初の段階での本人と関係者での関係性・方針の共有の有無が、その後の本人参画の状況を大きく左右する。

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

③1～数回程度の点検ミーティングで、具体的な改善点がみつかる

○「目からウロコ」の発言

行政や支援関係者、家族が気づけなかったこと、
考えてもみなかったことを、本人が教えてくれる。

○取組んでいる事業を、本人意見をもとに具体的に点検
すると、様々な改善点が連鎖的にみつかる

啓発事業、認知症カフェ、認知症ケアパス、
見守り・SOS体制づくり、模擬訓練、
相談、日常の医療・介護、防災対策、条例 等

○本人の一言から、本人視点にたった改善を図れる点が
豊富にある

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

④本人の意見を活かした小さな改善・取組の連鎖

○大がかりでなく、小さな改善やすぐできる新たなトライアルにまずは動き出すことで、次の改善の糸口や新たな協力者が連鎖的に生まれてくる。

○本人の意見にもとにした改善は、本人のみならず、地域の他の人たちにも役立つ場合も多く、本人そして関係者、地域の人たちの改善へのモチベーションや協働が強まっていく。

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

⑤本人の意見をもとに、一部の人だけでなく、地域の多様な人たちと共有し、話しあうことで、新しい解決力がうまれる。

○「本人の意見」には、いつもの関係者だけでは改善が難しいことも多い。そこであきらめずに、地域の多様な人にも本人の意見を伝え、一緒に話し合ってみると、意外な解決策（改善案）がうまれる。
分野横断で

○本人の意見が、日頃つながりのなかった多様な地域の人たちとの、あらたなつながりを生んでいく。 共生の拡充

○医療・介護連携等、それまでの連携のあり方が、「本人の意見」をきっかけに本人視点の連携に刷新されていく。
多職種連携が本人視点に根差したものに

Ⅱ．試行プロジェクトを通じて起きたこと・ 見えてきたこと

⑥最初から決めすぎず、本人にそって柔軟に

○本人の意見・参画状況に沿いながら「本人とともに進める」
ことを守っていけるか、次第に関係者側のペースになって
しまうかで、その後の本人の発信・参画が左右

○成果を焦らずに、本人の意見を聴く・一緒に動くを
継続的に積み重ねていくことが大切。
単年度ではなく、息長く経年的に



5 . こ れ か ら に 向 け て



- * 認知症とともに生きている本人の体験や工夫を活かし、暮らしやすいわがまちを、一緒につくっていこう。
- * 「暮らしやすい地域」についての「意見を語る」ことは、認知症になってからの私たちの新しい役割
 - ★「本人だからこそできること」がある。
 - ★施策、事業のアドバイザー役、仕事としての展開も
- * 意見を伝えたい、一緒に地域をよくしたいと願っている本人に、チャンスを。
 - ・年齢が若い本人も、90歳以上の本人も
 - ・軽度の人、中重度になっている人も
 - ★発言のきっかけ、その押しを持っている人が、どの地域にもいる。
 - ★誰もが発言しやすい環境を作る。

- * 新しいことの始まりは、いきなり進むわけではない。まずはやってみながら。息長く。
- * 本人（次に続く私たち）が、発言し参画することが「あたりまえ」という新しい文化を、一緒につくっていこう。
 - ★「そのうち」ではなく、ここから始めよう。





2019.2.9 認知症の人の意見に基づく認知症施策の改善に向けた
方法論等に関する調査研究事業報告会

静岡県の認知症施策

認知症の本人の声を起点とした
やさしい地域づくり

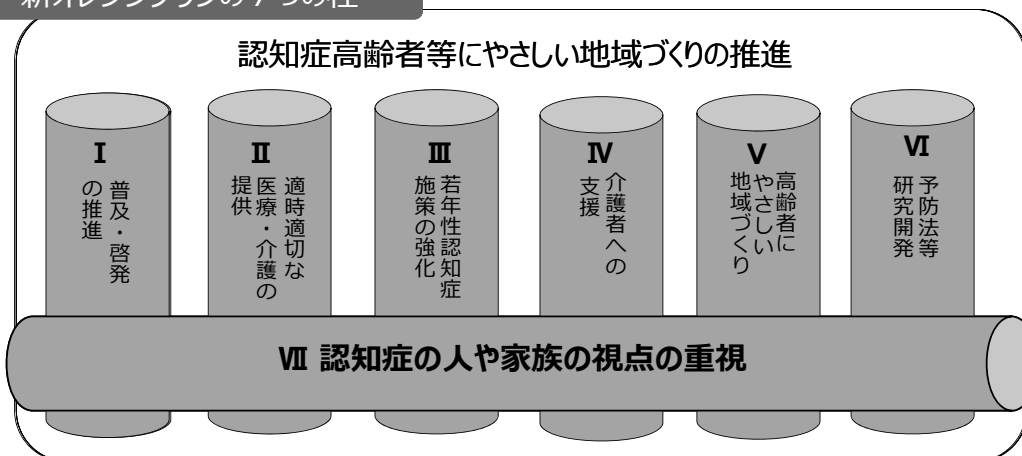
静岡県健康福祉部 長寿政策課

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）

基本的な考え方

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく
暮らし続けることができる社会の実現を目指す。

新オレンジプランの7つの柱



地域再生の視点

- 認知症高齢者等にやさしい地域は、決して認知症の人だけにやさしい地域ではない。
- ⇒ コミュニティーの繋がりがこそその基盤。認知症高齢者等にやさしい地域づくりを通じ
地域を再生するという視点も重要

新オレンジプランに対応した県の取組

7つの柱		概 要	H29実績
I	普及・啓発の推進	・認知症サポーターの養成	累計299,279名
		・キャラバン・メイトの養成	累計3,222名
II	適時・適切な医療・介護等の提供	・かかりつけ医への認知症対応力向上研修	累計814名
		・認知症サポート医の養成	累計233名
		・認知症疾患医療センターの運営支援	15か所(うち県指定11か所)
		・認知症初期集中支援チームの設置	累計21市町
		・認知症地域支援推進員の配置	累計27市町
		・認知症連携パス(ふじのくにささえあい手帳)の普及	全県で活用
		・認知症関係施設従事者向け研修	基礎研修、実践者研修 等
III	若年性認知症施策の強化	・若年性認知症の理解・普及	県民向けに開催
		・若年性認知症支援ガイドブックの作成	市町等で活用
		・若年性認知症相談窓口の設置 (H28.7～)	相談153件
		・若年性認知症居場所(仕事の場)づくり支援	モデル事業3か所
IV	介護者への支援	・認知症コールセンターの設置(H22.4～)	相談201件
		・介護マークの普及促進	全国人口割合45.3%
		・認知症カフェの設置	累計131か所(H30.4)
V	高齢者にやさしい地域づくり	・県HPへの身元不明者情報の公開	13名の身元判明
		・身元不明者情報の共有・公開に関するガイドラインの策定	平成27年2月公表
VI	予防法等研究開発	・認知症予防研修会の実施	先進事例の展開
VII	認知症の人や家族の視点の重視	・認知症の本人や家族との意見交換会	県主催 3回
		・若年性認知症フォーラムの開催(再掲)	県民向けに開催

3

I 普及・啓発の推進

◎ 認知症サポーターの養成人数

「認知症サポーター」とは

- ・認知症を理解し、認知症の人や家族を温かく見守る支援者
- ・認知症サポーター養成講座を受講することで、資格取得
- ・講座受講者にはサポーターの証である「オレンジリング」を配布

講座受講者に配布される
オレンジリング

新オレンジプラン の全国目標	2020年度末までに1,200万人
本県の目標	2020年度末までに36万人

↓
2018(H30).12末時点で32万4千人

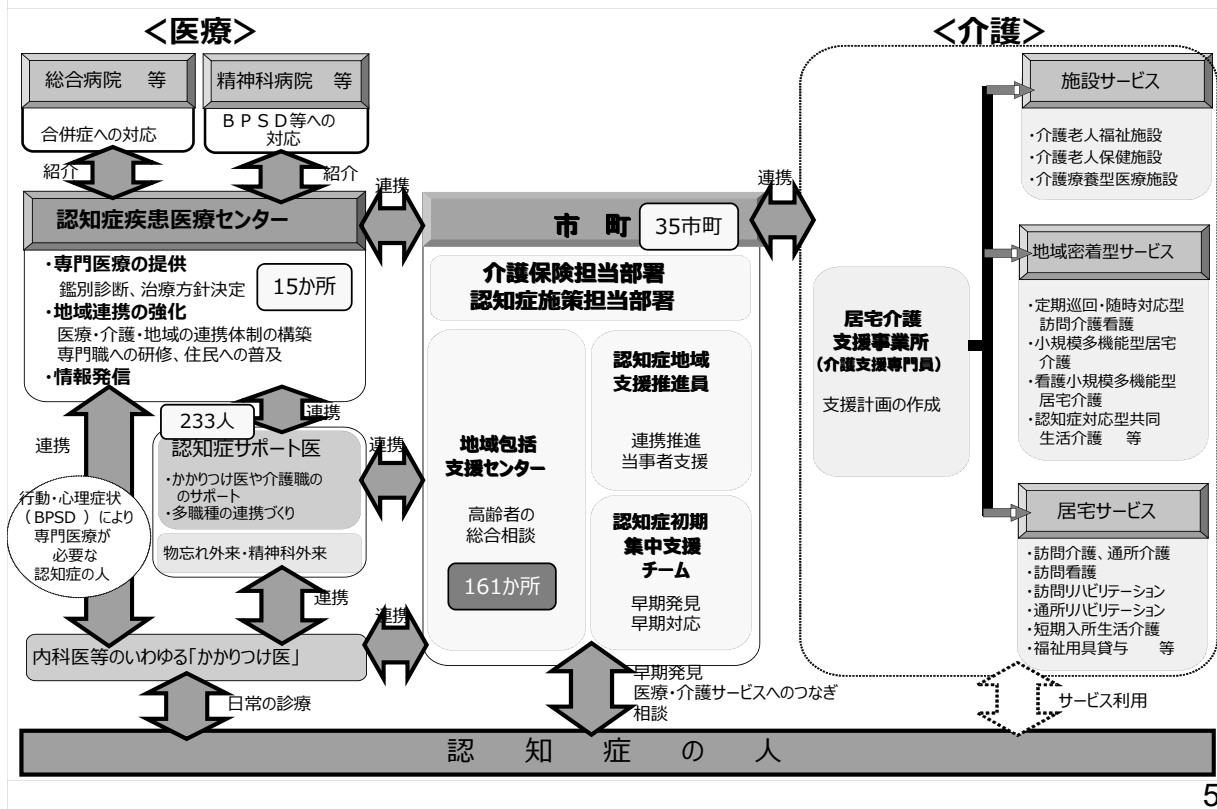
◎ 認知症サポーターの活躍の場の拡大

- 困りごとのお手伝い(見守り、外出支援、ボランティア訪問)
- 孤立しないための関係づくり(認知症カフェ、本人ミーティングへの誘い・同行)



4

Ⅱ 適時・適切な医療・介護の提供



Ⅱ 適時・適切な医療・介護の提供

認知症連携パス～ふじのくに“ささえあい”手帳～の活用

◎目的

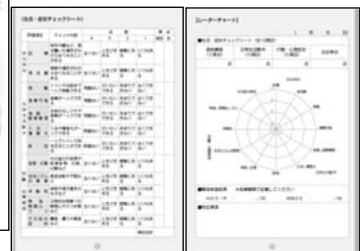
- ・認知症に関わる多職種の専門職による適宜・適切な情報共有
- ・地域における認知症の多職種連携の取組等の推進



＜表紙＞



＜裏表紙＞



＜生活・症状チェックシート＞

◎ふじのくに“ささえあい”手帳の概要

手帳の構成

第1部	本人情報（本人のプロフィールや医療情報）
第2部	経過記録（生活・症状の変化の記録）
第3部	連絡ノート（専門職と介護者の日常的な連絡）

手帳の特徴

レーダーチャートの活用	経過記録の見える化
記載の省力化	チェック方式による記載
ささえあい人の見える化	「私」を中心に、ささえあい人がサイン
多職種の連携	専門職、家族等による委員会の意見を聴取し作成

活用事例（昨年度のモデル地域での事例から）

区分	内容
本人	80歳代の女性
家族	長男夫妻、孫
利用者	家族、主治医、ケアマネ、訪問看護師
利用方法	サービス事業者、地域包括サービス利用時に本人の状態を記載 家族は、異変発見時の症状を記入 手帳は受診時に持参
手帳使用の利点	医師が介護者の困り事、症状を確認 サービス事業者間の情報共有 体調や症状の変化を理解、把握

『ふじのくに“ささえあい”手帳』は、平成29年度からの全県での活用を推進

Ⅲ 若年性認知症施策の充実

○初めての若年性認知症実態調査

＜調査方法＞（時期：平成26年11月～27年1月）

区分	目的	調査対象	備考
一次調査	県内の若年性認知症の人の把握	医療機関や介護サービス事業所等	把握数444人
二次調査	当事者や家族の生活実態の把握	一次調査で把握した本人・家族	回答164人

＜結果の概要＞

(1) 若年性認知症に対する認識不足

- ・発症時に若年性認知症について知らなかった方が43.9%（72人）

(2) 相談・支援機関による支援

- ・最初の相談先は、医療機関が59.1%（97人）
家族、地域包括支援センター、市役所・町役場はそれぞれ1割未満

(3) 発症後の就労支援の不足

- ・発症時に仕事をしていたのは、42.7%（70人）でありこのうち現在も就労を継続（異なる職場の場合も含む）しているのは、12.8%（9人）

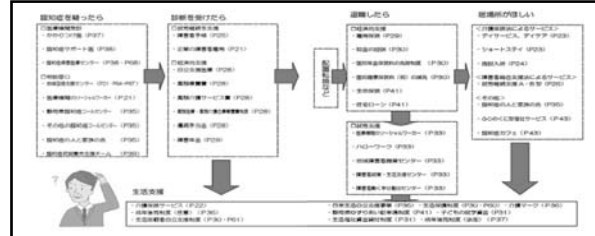
○相談・支援体制の充実

・若年性認知症相談窓口の設置（平成28年7月～）

相談日時 週3日（月・水・金）
午前9時～午後4時
電話番号 054-252-9881
相談体制 若年性認知症支援コーディネーター
業務内容
・利用できる制度・サービス紹介、申請手続き助言
・関係機関（市町、医療機関等）との連絡調整
・勤務先との調整を含む就労支援



・相談・支援機関のためのガイドブックの作成



【若年性認知症支援ガイドブックより抜粋】

○就労支援

・若年性認知症居場所（仕事の間）づくり支援事業（H29～）

内容 若年性認知症の人が軽作業などの仕事を
を通じ、社会参加や仲間・支援者につな
がる居場所（仕事の間）づくりのモデル
事業を実施

平成29年度、30年度 各3事業所で実施



Ⅳ 介護者への支援

◎ 認知症コールセンターの開設

認知症の人と家族の会静岡県支部の会員が
認知症介護経験者の視点で、仲間としての
立場から相談対応



◎ 介護マークの普及

介護を行っている人が周囲の人に介護中であることを察してもらうために使う「介護マーク」を、**全国で初めて作成し、県内外に普及を促進**



全国515市区町村に普及

Ⅳ 介護者への支援

◎ 県内各地に広がる“認知症カフェ”

- ・認知症の人と家族、地域住民等の誰もが自由に参加できる「集いの場」
- ・介護者にとって、他の介護者との交流・情報交換の場となっており、負担軽減につながっている

平成28年4月時点
11市町、24箇所

平成30年4月時点
27市町、131箇所に増加



川根本町の「ケアラズカフェ」の取組が、
平成29年度「健康寿命をのばそうアワード」で厚生労働省老健局長賞を受賞

9

Ⅶ 認知症の人や家族の視点の重視

認知症の本人が自ら意見を発表

○若年性認知症フォーラム

- テーマ 認知症になっても
できることはたくさんある
- 開催日 平成27年6月6日
- 開 場 静岡労政会館
- 参加者 230名
- 富士宮市在住の佐野光孝さん
による意見発表



○若年性認知症セミナー

- テーマ 就労について
ともに考える
- 開催日 平成29年2月17日
- 開 場 ホテルアソシア静岡
- 参加者 180名
- 名古屋市在住の山田真由美
さんによる意見発表



○認知症シンポジウム

- テーマ 認知症の人を
地域で支える
- 開催日 平成29年10月7日
- 開 場 アクトシティ浜松
コンgresセンター
- 参加者 230名
- 東京都在住の中田哲行さん
による意見発表



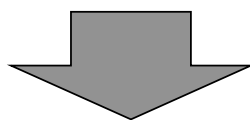
10

◎ 認知症の本人が集い、
本人同士が主体となって話し合う場のこと

◎ その声を市町等が聴き認知症の人を理解し、
地域づくりに活かすこと

⇒ 両方を実現するにはどうしたらよいか・・・！？

11



一足先に認知症になった本人の声に
耳を澄ませてみよう！

認知症とともに暮らす中で
どんな体験をし
何を思い
何を願っているのか。
何があったらいいか。

* 本当のことは、本人自身にしかわからない。
* 本人が、次に続く人に役立つ大切なことを伝えている。

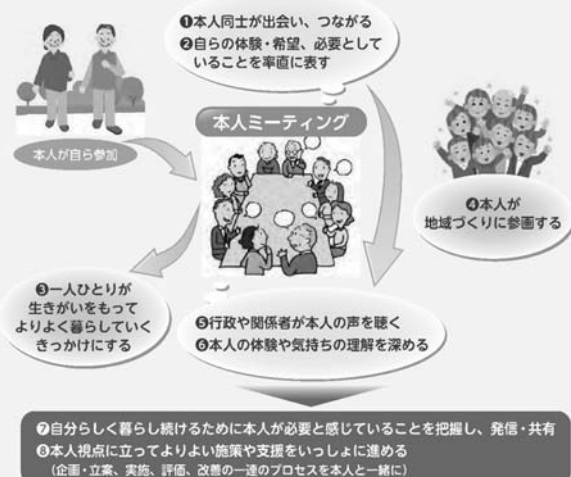
認知症のわたしたちが集い、語り合う、やさしいまちをいっしょにつくろう!!

本人ミーティングの開催

認知症の本人が集い、**本人同士が主になって**、自らの体験や希望、必要としていることを語り合い、**自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域のあり方を一緒に話し合う場**

●本人ミーティングのねらい

●本人ミーティングは、認知症の人の視点を重視したやさしい地域づくりを具体的に進めていくための方法です。



●三島市における本人ミーティングの取組



＜場所＞

認知症カフェ

＜テーマ＞

- ・生活の中で工夫していること
- ・今後やってみたいこと

＜ご本人からの言葉＞

「少しぐらい忘れることはあっても気にしない。わからないことがあったら誰かに聞かし、困ったことも何とかしちゃうから大丈夫」「人それぞれでいいの。」「カレンダーにメモするのが一番忘れにくい。」「今までしていた普通の生活を続けているだけ。」「

**認知症の本人たちが発した声を、
施策や支援につなげる取組を推進します!!**

出典：本人ミーティング開催ガイドブック（一般財団法人長寿社会開発センター）、三島市作成資料

13

認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡 の開催

～一足先に認知症になった私たちがあなたへ～

“**認知症の本人**”が**主役**となって、認知症の本人が真に必要なとする支援体制や暮らしやすい地域について、**自らの声で発信**することにより、**認知症に対する理解促進**を図る“集い”を開催（鳥取県に次いで全国では2番目の開催）

●開催日・会場

平成30年10月8日(月・祝)
グランシップ 中ホール ほか

●主催

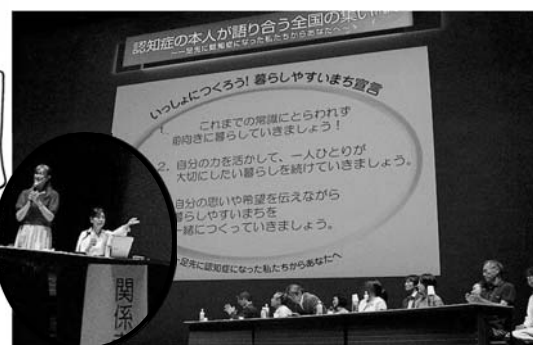
静岡県、日本認知症本人ワーキンググループ
認知症の人と家族の会静岡県支部 ほか

●県内外の認知症の本人による意見交換会（第1部）

- ・認知症のご本人15人が参加（市町職員が聴講）
- ・認知症の本人同士が「暮らしやすいまちはどんなまち」をテーマに、想いを率直に語り合う

●公開シンポジウム（第2部） 720名が来場

- ・三島市における本人ミーティングの取組紹介
- ・本人（7人）、支援者を交えたパネルディスカッション
- ・全国の集いからの発信
『いっしょにつくろう!暮らしやすいまち宣言』
- ・認知症の相談、啓発等のブース展示（22ブース）



＜認知症の本人と支援者を交えたパネルディスカッション＞
囲みは日本認知症本人ワーキンググループ 藤田和子 代表理事
認知症介護研究・研修東京センター 永田久美子 部長

【日本認知症本人ワーキンググループ】

- ・平成26年に認知症の当事者が仲間を集い、発足した日本初の当事者組織
- ・「認知症になっても、希望と尊厳をもって暮らし続けることができ、より良く生きている社会」の実現に向け、集約した意見を社会に向けて発信する取組を行う。

14

いっしょにつくろう! 暮らしやすいまち宣言

1. これまでの常識にとらわれず
前向きに暮らしていきましょう。
2. 自分の力を活かして、一人ひとりが
大切にしたい暮らしを続けていきましょう。
3. 自分の思いや希望を伝えながら
暮らしやすいまちを
一緒につくっていきましょう。



～足先に認知症になった私たちからあなたへ～

15

認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡の成果①

○認知症の“本人”が主役の集いを開催 参加者720名

- ・日本認知症本人ワーキンググループと企画段階から協働
- ・認知症の一人ひとりが、体験していること、感じていること、工夫をしていることを語り合う
- ・県外をはじめ、県内の病院や公共交通機関など民間の様々な分野から参加

○全ての市町職員が参加し、認知症の本人の思いを聴く

- ・本人同士による意見交換（本人ミーティング）を見て、聴いて、感じる
- ・市町（職員）が主宰する本人ミーティングへの道筋を示す

○共同宣言を参加者全員で唱和

- ・次に続く人たちが認知症になっても前向きに暮らしていけるまちを
ともに創っていくことの必要性を参加者全員で共有

○認知症の“本人”に有意義な集い

- ・県内の本人が10人参加できた。（意見交換に参加、シンポジウムに登壇）
- ・認知症の本人が、同じ立場の人と話し合うことで、
「気持ち楽になった」、「勇気を貰えた」、「自分も地域の中で活動したい」
などの感想が得られた

16

認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡の成果②

○参加者の高い満足度

- ・「とても良かった」、「良かった」と回答したのは95.4%
- ・本人が自ら意見を語ることにより、認知症に対する偏見や誤解の払拭、理解の促進につながる

○本人ミーティングの普及展開

- ・三島市の本人ミーティングの取組経過の映像と全国の集いのプログラムをDVDとして全市町等に配布し、本人ミーティングの開催を支援
(老健事業 自治体における認知症施策や事業への本人の参画・評価等に関する全国調査)
 - 平成30年度中に計画、実施検討、意見を聴く：9市町（26%）※全国14%
 - 次年度以降の実施に向けて検討：18市町（51%）※全国53%
 - 合計（77%）※全国67%
- ・県のHPに映像を掲載し、本人ミーティングを企業等民間で普及

P.S :平成30年10月8日以降、「いっしょにつくろう！暮らしやすいまち宣言」を広報材料として、様々な場面で使用している。

17

認知症の本人が語り合う全国の集いin静岡をスタートに！

◎市町や地域で、認知症の本人の声を聴いて 施策や支援につなげる取組を促進

<今後の県の取組>

- ◎ 認知症のピア（仲間）サポート活動を支援
認知症診断直後等で今後の生活に不安を抱く人を対象に、認知症の本人同士のピア（仲間）活動を推進
- ◎ 若年性認知症の人の就労を支援
デイサービスにおける若年性認知症の人の就労メニューを開発し普及

18

認知症になっても、
誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるように
本人の声を起点とした「認知症にやさしい地域づくり」を推進します



平成30年9月21日に開催された
「RUN伴2018」@県庁前
参加者 100名超

19



Shizuoka Prefecture

ご清聴ありがとうございました

「認知症の人の意見に基づく認知症施策の改善に向けた方法論」

誰もが望む居場所へ つながるために



長崎県諫早市健康福祉部高齢介護課
岩本 節子

自治体基礎情報

人口	137,836名 (H30.4.1)	65歳以上人口	39,394名
高齢化率	28.6%	第7期介護保険料	71,640円(月5,970円)
要介護支援認定者数	7,239名 (H30.3月末日)	要介護支援認定率	18.3%
日常生活圏域数	15圏域	包括数	直営：1 委託：4

認知症地域支援推進員数：5名（うち行政：2名専任・3名兼務、直営・委託0名）

地域の特徴：

平成17年3月に1市5町が合併し新諫早となる。将来都市像「ひとが輝く創造都市・諫早」
長崎県の中央部に位置し、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と3方が海に面し、北は多良
岳の秀峰を仰ぎ4本の国道と、JR、島原鉄道が交わる交通の要所。市の中央部を流れる本
明川は、市街地を通して有明海に注ぎ、下流の諫早平野は県下最大の穀倉地を形成してい
る。肥沃な丘陵地帯はみかんや野菜の特産地である。



諫早市民栄誉賞の
内村航平さん





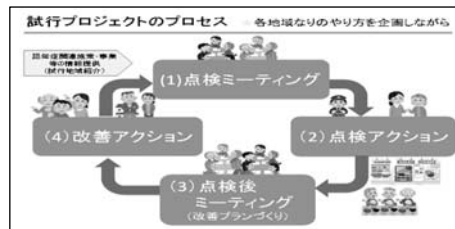
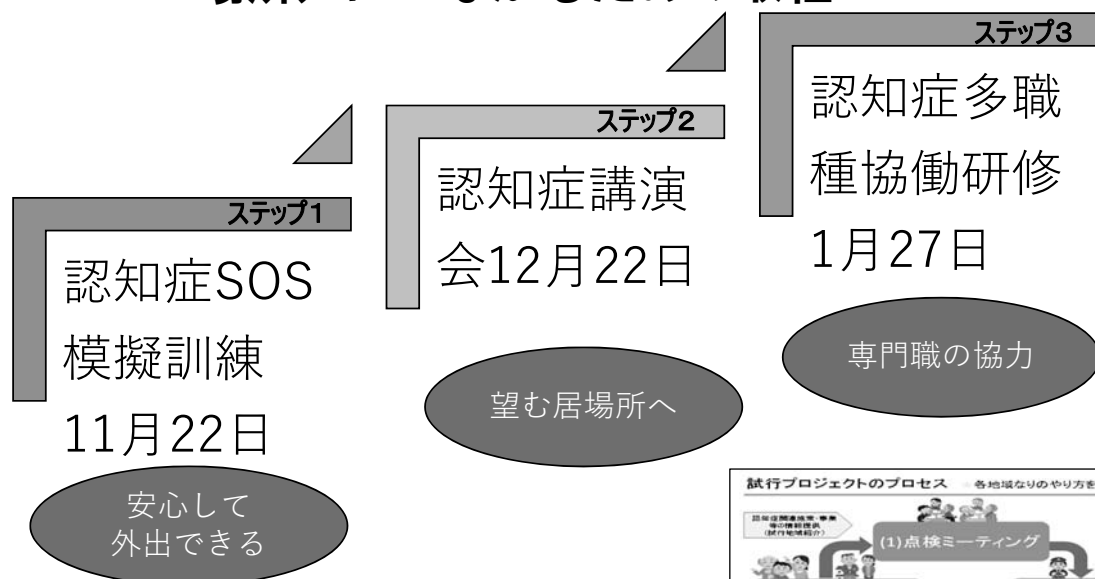
ドラマ化され、1985年7月4日 - 9月26日にフジテレビ系列で毎週木曜日22:00 - 22:54に放送された。

長崎県諫早市を舞台に、困った時に強い絆を感じられる「血縁」をテーマにして繰り広げられる人間ドラマであった。諫早出身の役所広司が時代劇以外で主演した最初の作品である。(ウィキペディアより)



1 試行地域として 取り組んだこと

(1) 居場所（いきいきと過ごせる場所、安らげる場所）につながるための取組



(2) 手法 本事業説明会資料より →

2. 点検ミーティング（全体）

諫早市地域包括推進ケア体制にある

(1) 認知症対策推進会議で協議

(地域住民団体、介護・医療団体から推薦を受けた人14名で構成)

第7期諫早市介護保険事業計画

「認知症の人やその家族の視点を重視することを認知症施策のすべてに共通する理念として取組を進めます。」を受けたフリートークから今回の点検事業の方向性を総括（以下要約の一部）

- 認知症講演会 認知症の人が望む居場所づくりを、カフェを例として検討
 - 認知症多職種協働研修 当事者が望むケアへ。日頃の取組に直結する内容
 - 認知症SOS模擬訓練 搜索練習ではなく迷い人にならないために。方法は、まず市がモデルとして実施しマニュアルを作る機会とする。
 - その他の意見 家族からの相談はあるが、当事者からの相談はない。
- 認知症の人の心のアンケート ▣ 認知症の人の生の声を聴き事業に反映する

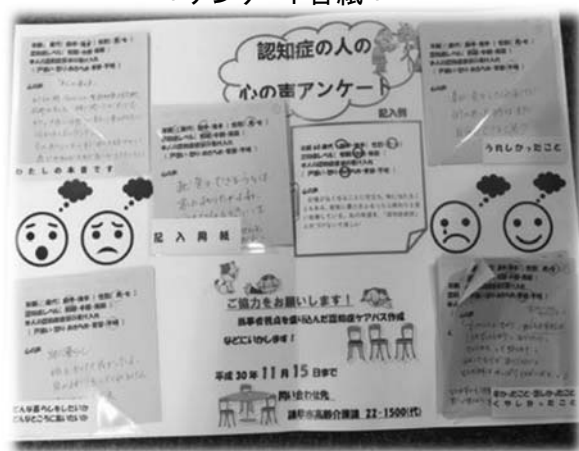


第1回認知症対策推進会議の様子

(2) 認知症の人の心の声アンケート 本人たちが日頃望んでいることを知る

- ①方法 認知症地域支援推進員、介護支援専門員、グループホーム職員、認知症専門医療機関がアンケート用紙にて聴き取りを実施。本人(福田さん)にも記入を依頼

* アンケート台紙 *



* アンケート用紙 *

年齢 歳代(前半・後半) 性別 (男・女)
 認知症レベル (初期・中期・後期)
 本人の認知症症状の受け入れ
 (戸惑い・怒り・あきらめ・受容・不明)
 ～心の声～

②実施結果

居宅介護支援事業者38事業所 グループホーム17事業所 認知症専門医療機関5事業所
 認知症地域支援推進員訪問の際 認知症カフェ等集いの場3箇所

延べ1000名強の声が集まりました。

認知症の人の心の声概要 (一部要約)

初期	中期	後期
私のことは私が決めたい * 進行しないように気を付けて物忘れ対策をしている * できることがいっぱいある * 楽しみがある * 役に立ちたい。できる事があれば手伝いたい。 * 今が幸せだと思う	私抜きで決めないでほしい * 忘れても大丈夫 * 気に入ったよ！安心できるよ。 * できることがある、手伝いたい。 * 希望がある 「わからんごととなりよっと。思い出せなくてごめんね。」 「昔は私がガミガミ言っていたわ。今は立場が逆転してしまった…」	笑顔が嬉しい、できる事を続けたい * 安心できる、一緒にいたい。 * 希望や幸せがある * やりたいことがある。 * わからないところは手伝ってもらおう 「迷惑かけていることはわかっている。だから“ありがとう”“ごめんね”と伝えている。」
周囲への要望「わたしを理解し、寄り添ってほしい・・・。」		
- 寄り添っていてほしか・・・ - しっかりと伝えたい。ゆっくり待って聞いて - 理解してもらえたらありがたいな - ゆっくりひとつずつ説明してほしい。 - 弱った姿は見せたくない。しかし、これまでどおり皆と集みたい。 - 用事や片付けを一緒にしてくれると助かる - できていたのに、今はできない、分らない。苛立つ。泣きたい位に不安になる。	- 気分が乗らない時もあるし、疲れやすくなった。無理をさせないでほしい。 - 大切なものがそばにないと不安になります。一緒に探してほしい。 - 今日より“今”どうしたらよいか教えてほしい。 - 私抜きで決められるとわからなくなる。私の気持ちを尊重して。 - 昼寝の後など、誰かが側にいてくれると喜ばれるので安心。 - 自由に話したい。会いたい人に会いたい。 - 役割を持つことがいいと決めつけしないで - 自分でしたいし、出来ると思うから私なりにやっている。危険だと何でも禁止しないで見守って。 - 通所にはずっと通いたい	- 頭が真っ白になって不安で怒鳴ってしまう。温かく見守ってほしい。 - やっぱり家がいい。 - 食事もトイレも入浴も私のタイミングやペースがある。いきなり触れられたり、無理にされるとびっくりします。 - 自分で思うようにできない歯がゆさをわかってほしい。 - 怒られてばかりはきつかよ。死んだほうがましと思うこともあるから優しく笑ってください。 - ひとりが怖い。必要としてほしい。誰か来て話しかけてくれるのを待っています。 - 時間をかければできることがいっぱいある。

3. 居場所（いきいきと過ごせる場所、安らげる場所） につながるための取組

（ステップ1）認知症SOS模擬訓練について

①点検ミーティング

認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症専門嘱託医、市担当者

○認知症の人が迷わない安心して外出できる地域に向けた取組。
迷い人の搜索訓練にならないように、声かけによって本人が安心できる形でしかるべきところへつなぐこと。

認知症SOS模擬訓練

認知症になっても安心して外出できる地域を目指し、住民の皆様と共に認知症SOS模擬訓練を実施します。ご協力をお願いします！

内容
＊オリエンテーション
＊認知症の声かけ・見守りに挑戦
＊模擬搜索に参加
＊意見交換
担当 講師 佐賀県市「春行の会」 福田人志さん
諫早市認知症地域支援推進員

模擬訓練から帰ったら…あったかつみれ汁で健康づくり。

平成30年 **11** 月 **22** 日（木）
13:00～16:30（開場 12:30）※参加無料

西諫早公民館
3階第1・2講座室

ルートとの点検、声かけをして、人と人とのつながりをつくり、搜索ではなく見つけ声をかける。

○搜索から始まるが搜索だけになってはいけない。

今回の対象は搜索依頼を受けた人。もしこのような人がいたら、搜索依頼が出ている・いないに関わらず、声かけを行っていけるように練習することも必要。

②点検アクション

認知症SOS模擬訓練

日時 平成30年11月22日(木) 13:00～16:30
会場 諫早市西諫早公民館
担当 諫早市高齢介護課

1 あいさつ
オリエンテーション

2 認知症の人の正しい理解と対応

(1) 認知症の正しい理解 ……スライド3～8

(2) 認知症の人の気持ち体験 ……スライド9～12

(3) 当事者視点からのアドバイス
担当 一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 福田 人志 さん
春行の会(佐世保市)

3 認知症 SOS 訓練について

(1) 内容 届出の目安はいなくなつてから「30分経過」 ……スライド14～22

(2) 屋外訓練 認知症 SOS 訓練の実施 ……グループ毎説明

4 まとめ

(1) 手ばかり栄養教室について
(2) 意見交換
(3) 認知症 SOS 訓練を通じて感想
担当 一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 福田 人志 さん
春行の会(佐世保市)

12月22日は認知症講演会へ
いさはやオレンジ手帳をご希望のかたは、
スタッフにお申し出ください。

（工夫した点）

- ①いさはやオレンジ手帳を活用し、認知症の人の気持ち体験を実施する
- ②なぜ迷い人になるのか、どういうタイミングでなりがちなか、当事者からのアドバイスを入れる
- ③今回は模擬訓練だが、日ごろの取組（声かけ・見守り）が必要だということをわかってもらう
- ④意見交換を通じて、参加者の声を今後の取組に反映する。

認知症の人の気持ち体験



**いさはやオレンジ手帳」自分史シートを記入して
認知症の人の気持ちを体験します**



**目を閉じて想像してみましょう
どんなかわりをしてほしいですか？**



認知症の正しい理解と対応



**当事者視点(本人) からのアドバイス
【講師】 福田人志 氏**



真剣な1Gの皆さん (山川第1グループ)

SOS模擬訓練



2 Gの様子
(最初は皆さん本当に町子さんがいるのか半信半疑です)



3 Gは坂の多い区域を搜索

手ばかり栄養教室について

つみれ汁試食



味も良いよ！



寒かったね・・・。



意見交換

自身の体験を
語る自治会長さん 民生委員さんか
ら御質問

家族の会からの御意見



推進委員から
御意見



事業所から
御意見



民生委員さん
から御意見



小船越町
自治会長さん
御挨拶

～三人の町子さん役の感想～



同じ場所を10往復していたら、地域住民や郵便配達の方から変な目で見られて、早く見つけてもらえないかな…と。



今回会場を一番沸かせたのは
町子さんへのインタビュー
でした



皆さんからの優しい声かけは嬉しかったです

3人の町子さん役が
地区を分けて不明人

まさか町子さんがこんなに若い人とは！
(若くて認知症になる人もおられる)



2G発見の場面

誰も気が付いてくれないから、自分から皆さんのいる前に行ってみましたよ…

認知症SOS訓練アンケート結果(一部抜粋)

模擬訓練に参加したことで自身の認知症の人への対応が変わると思いますか？

大いに変わる	変わる	あまり変わらない	無回答
18	35	4	5
29.0%	56.5%	6.5%	8.1%

どのように変わるとお感じになりますか？下記よりお選びください（複数回答可）

優しく接するようになる	32
ご本人の気持ちを尊重するようになる	39
ご本人の行動を止めないようにして、見守る。	30
少しでも認知症の人の助けになるように、気がけて声をかける。	38
ご本人の言葉や行動には、何らかの意味や理由があると思う	30
介護するご家族の苦労をねぎらいたい	29
認知症について、もっと知りたいと思う	21
その他	5

今回のような訓練を何度もしてほしい。

実際に認知症の方に声かけしたことがありますか

したことがある	したことがない	その他	無回答
23	36	0	3
37.1%	58.1%	0.0%	4.8%

認知症役の人を増やしてほしい。
声かけ訓練をやりたい。

自分が認知症になったら…と心配だったけど、多くの方が勉強されているので安心しました。

③点検後ミーティング

認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症の人と家族の会、認知症専門嘱託医、市担当者

○訓練をすることで、探すことだけではなく、町の人々の能力、スキル、意識が広がることがいい。

○ご本人の話を聞き、認知症のことを勉強、理解してから実施したことがよかった。（実施する時に）習ったことをしっかり取り入れられていた。

○いさはやオレンジ手帳で認知症体験を入れたのはよかった。本人の気持ちの理解が深まり、その後の声掛けにも生かされていた。

○実際に検索するときは（情報も人も）もっと少ない。ローラー作戦は厳しい。ひとりでもできるボランティアへ。



○意見交換で民生委員・自治会長など、色々考えておられた。認知症の人の見守りが、隣近所の井戸端会議から広がるそんな流れがいい。

(ステップ2) 認知症講演会について

①点検ミーティング

認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症専門嘱託医、市担当者

テーマ:居場所

○福田さん「当事者同士の交流を持ちたかったが、いろんな可能性を考え認知症カフェを始めた。」

○家族が気分転換のために連れて行きたいものなのか、それとも本人が行きたいところなのか。

○相談窓口には、本人からの相談はなく、家族からの相談、それも困ってからの相談が多い。本人が相談することができればよい。

○福田さん「告知の時期は早いほうが良い。」

本人も言われたほうが安心するし、どうにかしようという気持ちが出る。告知が遅れると進行も止められない。早い告知が大事。混乱の時期もあったが「現状維持が出来る」と思えるようになって落ち着いていったように思う。

○認知症専門嘱託医

告知することが重要ではなく、告知できる環境かを見極めたうえですることが重要



平成30年度
認知症講演会

日時 平成30年 **12月22日** (土)
14:00～16:30(開場 13:30) **入場無料**

場所 **諫早文化会館 大ホール**
※駐車場に限りがあります。お車の方は、できるだけ乗り捨ててください。

講演 **私たちが望む居場所づくり**
～認知症カフェを例として～
西田保健衛生大学医学部認知症・高齢診療科教授
たけち ひとし
武地 一 氏

パネルディスカッション
「私たちが望む居場所づくりとは(仮)」
佐賀県市「老行の会」 **福田 人志氏**
市認知症専門嘱託医 **宮田 史朗氏** ほか

(申し込み先着順となります。)
※会場にて事前にお申し込みください。
この会場の方には「いばはやオレンジ手帳
きーぶらダー」を頒布します。

②点検アクション

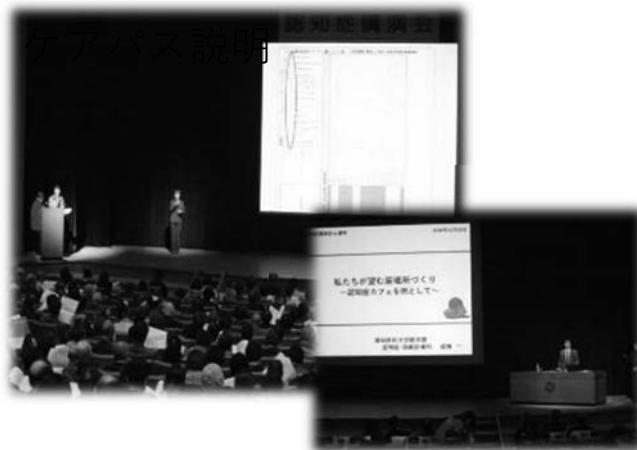
(工夫した点)

○誰もが行きたいところに行ける町づくりが大事。

○認知症カフェが最終的な居場所ではなく、認知症カフェから次の場所、新しい居場所へ。
望む居場所へつながるために地域の機運を高める工夫。

○諫早市の認知症の人の心の声アンケートでの生の声を紹介するとともに、福田さんの意見を聴くことで、認知症の人の気持ちを理解する。

○認知症を自らのものととらえるために、病気を告知されたとき、周囲への協力依頼、そして地域住民の理解の重要性を再認識する機会とする。



会場参加型パネルディスカッション



参加者へ質問：認知症になったら告知してほしい



「認知症になったらどうやって暮らしていけば良いかという話を伺ったところだったので、自分が告知を受けることで取り組みができるのかな、と思いました」



「周りからケアしてほしいと思い “はい” としました」

○認知症の人の心の声紹介

経験者に学ぶ

病気に関する不安・情けなさ・周囲の人への憤りなどの声。
しかし認知症という病気とどう付き合おうかと言う前向きな思いを表現していた…。

○福田さんの経験談

主治医から告知を受けたとき、自分ができていなかったことが
そういう病名がつくんだと思って安心したところもあった。
ところが、その病名を一生懸命調べてみると希望を持ってないような
状況しか書いてなかった。
認知症に対する偏見を持ち、なったら終わりなんだな・・・と
いう考えが強くなり、半年間ぐらい自分の病気と向き合えなかつた。



しかし気がついたら周りの人から沢山の力を頂いて、少しずつ気持ちが変わって、少しでも頑張っていこうということになっていった…。

参加者へ質問：認知症になったらオープンにする



『やっぱりわからないんですけども、色んな話を進めていくうちに、自分がなった場合は地域の方に言ってサポートしてもらう方がいいのかなと考え方を変化しています。』



『どうせなったんやったら、オープンにして、わがままも活かして生きていきたいと思う。』

『わからんなあ』



経験者に学ぶ

○福田さんの経験談

自分自身で偏見があって世間が言うようなイメージがあったカミングアウトしたとたんにイメージが、ぱあっと気持ちよく消えていった。

声を上げたことによって、「実は僕も、私も、私の家族も」と出会うことができた。出会いから繋がりになって、僕たち同士の自信に繋がって、少しでも前向きになればやりたいこともできるようになり、生き方も人生も少しずつ変わった。

オープンにしたことによって皆さんに僕たちの本当の気持ちを聞いてもらえるということがすごくありがたいと思っています。だからこういうつながりをこれからも大事にしたいと思っています。

僕ら当事者が声を上げて本当はこうしてほしいんだというのを誰かに伝えていかなければ、本当に自分たちが住みやすい街づくりじゃないと思う....





福田さんの望み

「本当の居場所って自分が住んでいる地域や町全体じゃないかな、当事者の人達が住む地域が自分の居場所になればいいなって思っています。早くそうなってほしいです」

認知症講演会アンケート結果（一部抜粋）

○居場所について

「カフェもサロンもいいことだという思いが大きくなった。」

○告知やカミングアウトについて

「認知症の告知の有無、立ち直りができるかどうか良い勉強になった」

「私は認知症だと言われたら皆に知らせ知って貰い、周囲に見守られ生活できるのがいい」

「認知症だとわかった方の生の声を聴けて自分を見つめなおすきっかけとなった。」

「認知症について自分自身の偏見に気づかされた」

「自身が認知症になったら…。と考えさせられた」

「家族が本人の認知症を隠していると何もできない」

○先に認知症になった人への気持ち

「認知症の人のお話をもっと聴きたかった」「話をきいてわかった」

「症状は忍び寄る予感があり、福田さんの話はしみてきます。」

「認知症の人の声を聴けてよかった。」 など

③点検後ミーティング

認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症の人と家族の会、認知症専門嘱託医、市担当者

○病名告知

認知症という診断名で、ショックも受ける。でも告知した方が、今できること、したいことを悔いのないようにできる。空白の時間は短い方がいいし、手助けに繋がる。

○カミングアウト

認知症だということをオープンにすることで生き生きと生活することができると思うのだけれど、家族に偏見があり難しい現状もある。福田さんの講演後「本当に認知症なの？」という声もある。

そういうことを聞くと、僕も戸惑う。一生懸命話しているのに。困った僕を見せればいいのか。それで認知症とわかってどうなるのか。

まさに福田さんが言っていることが、みんな病気になって初めて体験すること。それをサポートするのが医療・介護職。地域の人

（ステップ3）認知症多職種協働研修

①点検ミーティング

認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症の人と家族の会、認知症専門嘱託医、市担当者

○福田さん 認知症対応型デイサービスに出かけ手伝っている、認知症の本音を聴く機会がある。利用者の持つ強みを生かしケアをしている。時に介護職と当事者の思いに、ずれがあることが…。

○認知症と言わなくても生活できることが1番の理想。笑顔で喋っているからいいんだと思われる。言いたいことは色々あるんだけど…。

本人：
理解してもらえないことが…。

介護職：
理解できないことが…。

認知症の人が
気を使って生活
を過ごして
いる

○病院では色々話すと、薬が増える。言いたいことを言えない。伝えたくないことを家族が話す。画像検査がビビる。緊張する。“現状維持”だった時はほっとした。悪くなっていたらと思うと。

○医療が認知症の人に対してできることはほんの少ししかない。要するにそういった意味では何もできない人なんです。大事なものは環境。

平成30年度認知症多職種協働研修のご案内	
1 目的	認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域での良い環境で暮らし続けることを目指し、オレンジネットワークを活用した医療や介護および生活支援を行うサービス関係者が有機的に連携したネットワークの構築するために、本研修会を開催する。
2 実施主体	熊本市 所管 健康福祉部高齢介護課 22-1500 (代)
3 対象	・市内の介護保険指定サービス事業者や医療機関に所属し認知症支援に関わる、介護・医療関係者 医師・歯科医師・薬剤師・保健師・看護師・作業療法士・ソーシャルワーカー・介護支援専門員・理学療法士・介護福祉士・介護職員・栄養士・歯科衛生士・社会福祉士等 ・市内の医療機関に勤務する職員（医・医技、薬局受付職員） ・市内の事務所に所属する弁護士・司法書士
4 研修日時	平成31年1月27日（日）13:00～17:00
5 場 所	熊本市文化会館 熊本市宇都町9-2 ☎0957-25-1500
6 研修内容	別添プログラム参照 受講終了者には修了証を交付いたします。
7 募集人数	250名 受講料は無料です。
8 その他	・グループ分けがありますので、お早めにお申し込みください。申込後、都合により当日受講ができなかった場合には、あらかじめ必ず御連絡ください。当日は、名簿交換を致しますので御確認ください。

②点検アクション



< 平成30年度多職種協働研修プログラム >



日時 平成30年 1月27日(日) 13:00~17:00

場所 読早文化会館中ホール

第1部 (13:00~15:05) 本人視点の認知症ケアの流れになるために私たちができることとは何か

- (1) 講演 「 自立支援を促すおたがいさんケア その先へ 」
株式会社あおいけあ代表取締役 加藤忠相 氏
- (2) 講演 「 当事者視点の認知症ケア 」
佐世保市耆行の会・一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 福田人志 氏
- (3) グループワーク「 講演の感想 」
- (4) 名刺交換 兼 休憩 (14:55~15:05)

第2部 (15:05~17:00) 本人視点の認知症ケアのポイントと実際

ワークショップ 「 皆で一緒に認知症ケアを作ろう 」

- (1) 個人ワーク
気になる認知症の人のいざはやおレンジ手帳(自分史シート・いままでシート なじみシート)を記入しよう
- (2) グループでのおたがいさんケアを創ってみよう

パネルディスカッション「 明日からできるおたがいさんケアへ 」

シンポジスト

株式会社あおいけあ代表取締役 加藤忠相 氏
佐世保市耆行の会・一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 福田人志 氏
読早市認知症専門嘱託医 宮田史朗 氏

(工夫した点)

・当事者の気持ちとケア職の気持ちのずれを知る。

・認知症の人の強み(頼りになるところ・良かところ)と地域との接点を持つことで資源となる。

・認知症の人それぞれの強みに働きかけるケアをつくるための方法を、実践者である加藤さんと、当事者である福田さんのコメントをいただきながら、学ぶ機会とする。

明日からやってみようと思えるように・・・。

第1部 本人視点の認知症ケアの流れになるために私たちができることとは何か

- (1) 講演 「 自立支援を促すおたがいさんケア その先へ 」
株式会社あおいけあ代表取締役 加藤忠相 氏

これは理想ではなく現実なんです

- (2) 講演 「 当事者視点の認知症ケア 」
佐世保市耆行の会・日本認知症本人ワーキンググループ 福田人志 氏



認知症本人目線で感じたこと、気づいたこと、見えたもの



介護職の声	本人の声
今日は元気なさそう	スタッフが忙しそうで声をかけられない。帰りたいなあ。帰ろうかなあ。
レクリエーションを楽しくやりましょう	同じことばかりでつまらん。他になんかなかたね。
お風呂に入って、すっきりしましょうよ	まだ来て1時間しかたたとに、入らせるとね。ゆっくりしたいとに。
脳トレで会場が沸く	やたら質問が多くて、間違ったら恥ずかしか
連絡帳を家に忘れたそう・・・	何でも記録で監視されている。トイレ回数など書かれるけん、もう持ってこん。

第2部 本人視点の認知症ケアのポイントと実際

(1) 個人ワーク

気になる認知症の人の「いさはやオレンジ手帳（自分史シート、いままでシート・なじみシート）」を記入しましょう

(2) グループワーク



意見を出し合い、それぞれの方の強み
(良いところ・頼りになるところ)に
働きかけた、おたがいさんケアを考える

- ・それぞれのひとりひとりのケアを話題
- ・集まってできることは？
- 地域の方と一緒にできること？ など…を自由に考える。

講演内容を
思い出して

自分たちが何かするのではなく、利用者や地域住民が動く・
動かす環境、それはイベントだと一過性であるが、普段から
できることであれば「きっかけ」を通じて何回もでき「自信につ
ながる

参考になるグループには講師より発表をお願いします！



パネルディスカッション「明日からできるおたがいさんケアへ」

株式会社あおいけあ代表取締役
佐世保市壺行の会・一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ
諫早市認知症専門嘱託医

加藤忠相 氏
福田人志 氏
宮田史朗 氏



福田さんが推薦したグループ

「グループホーム入所後閉じこもりがちな女性が気になる」

いさはやオレンジ手帳には、

家に居た頃はでは様々な活動をしていた...との記載。



一方、グループホームには、



新しい入居者を気にしている人もいた..

すると、
フロアーへ
の移動もで
きるかも...

部屋の中に
訪ねて女子会
したら？



その人にとっ
て、部屋の外
は家の外？

何故？

もしかして
自分のことを
守ろうとして
いる？

- * 可能性が広がる
- * いっしょに歩く人がいるとよい
- * 本人が望むことを探し一緒にする



アンケート結果「良かった9割弱」

「当事者がどのように思ったり、感じたりしているか良くわかった」
生活相談員 10年

「してあげるケア」から「こういうことをしたら楽しいだろうなあ」へ
介護支援専門員 10年

「福田さんの人柄が好きになった」
薬剤師 28年

当事者ならではの視点が面白い
社会福祉士 2年

利用者のことをもっと知りたい
看護師 10年

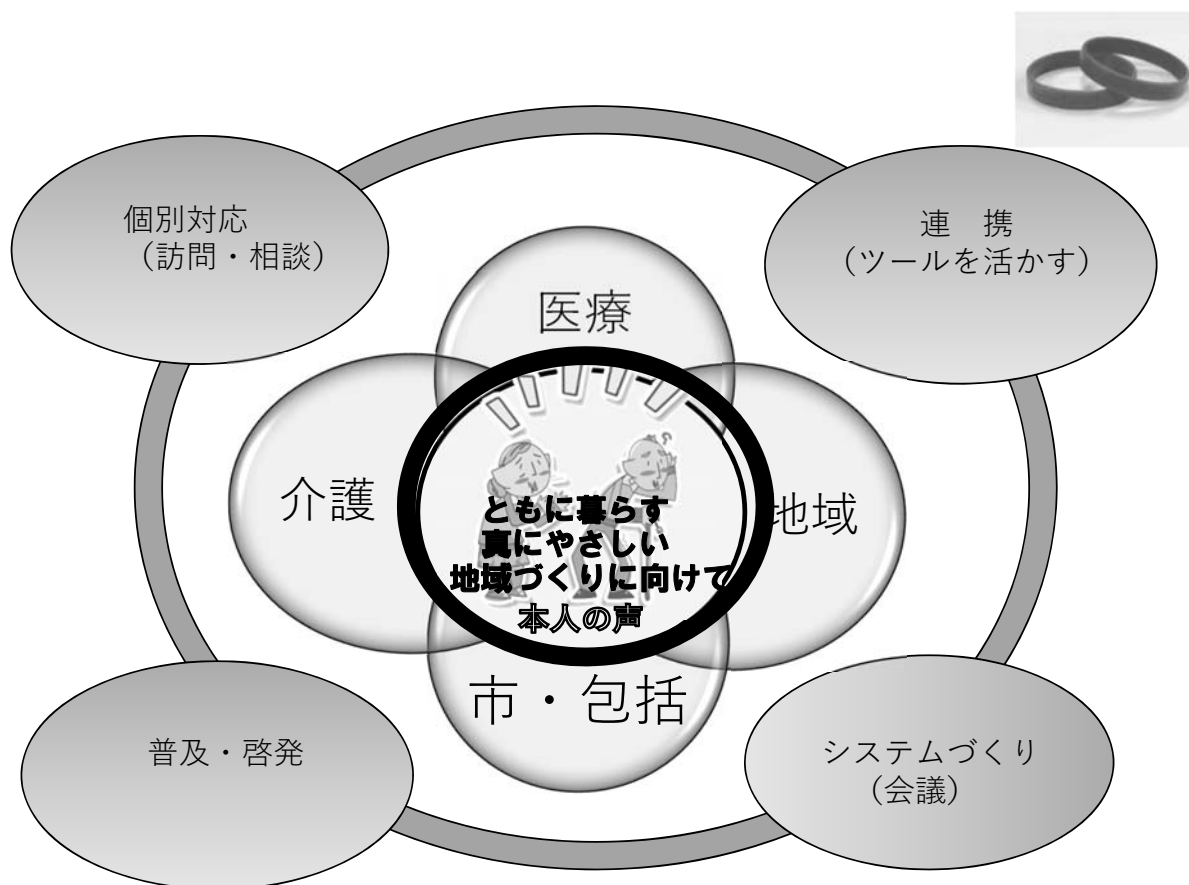
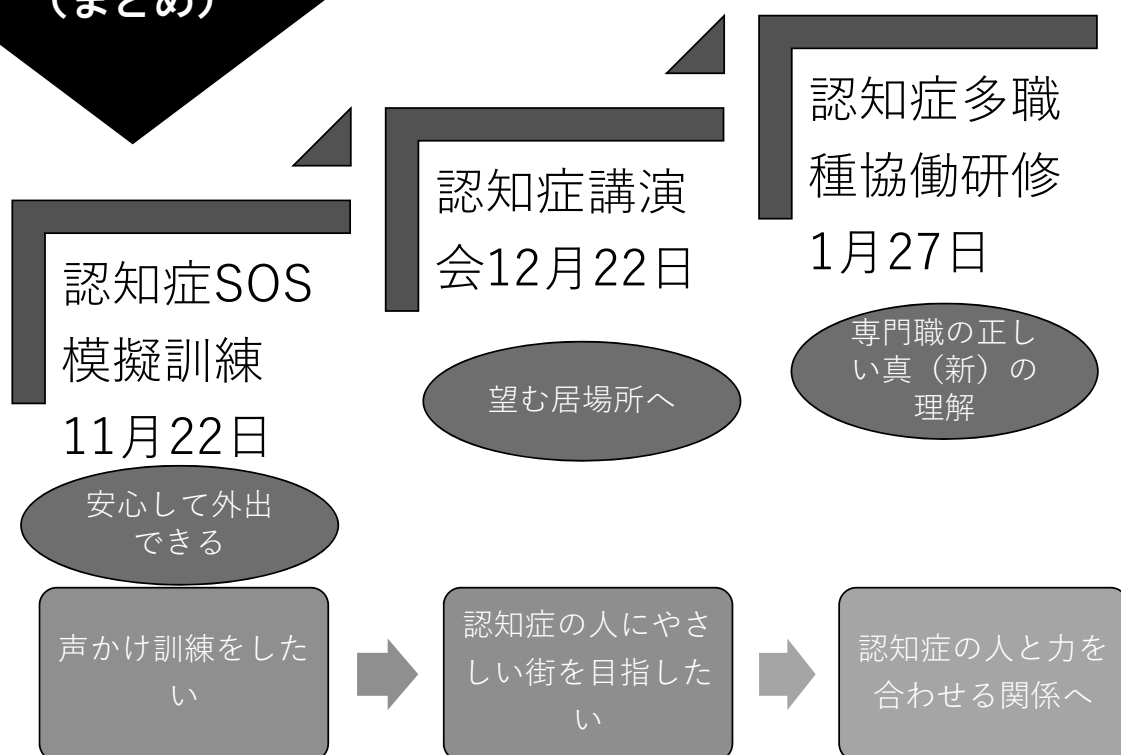
もっと知りたい
保健師 1年

③点検後ミーティング
認知症本人WG福田氏・中倉氏、認知症の人と家族の会、認知症専門嘱託医、市担当者

- ・「気になる認知症の人の情報」をまとめたところ「輝いていた頃」の情報が少ない。「なぜその人が気になるか」となるとマイナス要因が出されることもあった。
- ・性格や今までの生活史との関係もあり「情報収集とアセス方法」の研修が今後も必要。
- ・今回の研修参加者は、認知症ケアの意識や関心が高かった。今回のネットワークをそれぞれが生かせるとよい。

4. 改善アクション (まとめ)

望む居場所につながるための取組





「認知症についてあなたの
声を聴かせてください」
～本人ミーティングから始まった共に創る暮らしと地域～
(神奈川県藤沢市)

- 2019年2月9日
- 藤沢市 地域包括ケアシステム推進室

本日の内容

2

- 1 はじめに
- 2 本人ミーティング開催まで
- 3 本人ミーティング当日の様子
- 4 ご本人からの意見
- 5 本人ミーティング開催後の
具体的なプラン
- 6 最後に

1 はじめに

藤沢市の紹介



【藤沢市の概要】

- ・面 積 : 69.57 km²
- ・人 口 : 432,631 人
- ・世帯数 : 187,737 世帯

(2018年10月1日現在)



【鉄道交通】鉄道路線の駅数

- | | | | |
|-----------|----|-----------|----|
| ・JR東海道本線 | 2駅 | ・小田急江ノ島線 | 9駅 |
| ・江ノ島電鉄線 | 6駅 | ・相鉄いずみ野線 | 1駅 |
| ・横浜市営地下鉄線 | 1駅 | ・湘南モノレール線 | 2駅 |

【名所・観光】

- ・江の島、遊行寺、湘南海岸、新江ノ島水族館



藤沢市の基礎情報

(2018年10月1日現在)

項 目	
日常生活圏域	13地区
高齢者数	104,956人
高齢化率	24. 26%
介護保険認定率 (第1号被保険者)	17. 8%
地域包括支援センター	18カ所 (2018年10月から、サテライトが2か所増)

藤沢市の認知症施策

いきいき長寿プラン2020より

基本目標2 認知症施策の推進

1. 認知症予防の推進

認知症予防のための事業の充実と普及啓発

2. 認知症支援体制の充実・強化

(1) 認知症の早期発見・早期受診・診断・対応

(2) 認知症になっても安心して暮らせるまちを
めざした地域づくり

2 本人ミーティング開催まで



本人ミーティング開催のきっかけ



本人ガイドとの
出会いが始まり
でした。が始まりで
した。

- * 本人の声を藤沢市でも大切にしたい。
 - * このガイドを市の様々な人に知って欲しい。
 - * 認知症サポート医からもこのガイドのお勧めがあった。
- ↓
- * 市が購入して配布することになる。

認知症本人ミーティングとは

認知症ご本人が集い、自らの体験や希望、必要としていることを話し合い、自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域の在り方を一緒に考える。

認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)7つの柱



「VII 認知症の人やご家族の視点の重視」は、他の6つの柱に共通するプラン全体の理念でもあります。



本人ミーティングの開催まで

- 7月 本人ガイドが縁で、JDWGから試行プロジェクト
 参加への打診
- 9月16日 試行プロジェクトワークショップに参加
 ⇒各地の人たちと出会う⇒藤沢でも動こう・・・！
- 9月18日 本人ミーティング開催日程を決定⇒とにかく始めよう
 チラシの作成 ・ 周知 できることから
- 10月29日 室内打ち合わせ
 当日の意見交換のテーマを決める
- 11月8日 参加者、関係者との打ち合わせ
 当日の流れの確認
- 11月19日 本人ミーティング当日

企画段階で 工夫・検討した点

1)参加の呼びかけ

2)意見交換のテーマの設定

企画段階での工夫点

1) 参加の呼びかけ

① タイトルの設定

「認知症本人ミーティング」



「このタイトルで人が来るかな??？」

「何をご本人に求めているのか

具体的にテーマに示せるといい。」

「本人へのメリットは？」

最初の段階ではねらいや視点のずれがある。
話し合いが肝心！

第1回

認知症についてあなたの声を



聴かせてください

～ 認知症になった私だから言えること ～

【日時】 2018年11月19日(月)
午後2時00分～3時30分 (開場:1時30分)

【会場】 藤沢市役所本庁舎8階 8-1・8-2会議室
(藤沢市朝日町1-1)

【対象】 認知症当事者の方・ご家族の方

【定員】 20名

【内容】 交流会、意見交換会

【申込期間】 11月1日から11月15日まで

【申込先】 藤沢市役所地域包括ケアシステム推進室まで

TEL 0466-50-3544 / FAX 0466-50-8412

家族会を
同時に実施
します。



認知症ご本人が集い、自らの体験や希望、必要としていることを話し合い、自分たちのこれからのよりよい暮らし、暮らしやすい地域の在り方を一緒に考える「認知症本人ミーティング」を開催します。
多くの方の参加をお待ちしております。

企画段階で 工夫をした点

* 周知方法

- ②「直接関係者に届ける」
チラシと 本人ガイドを添えて

配布先： 地域包括支援センター
医療機関 ・ 認知症カフェ
家族会・ ご本人・家族

企画段階の工夫点

2) 当日の交流会のテーマの設定

- ・聞きたいのは、次につながるよう
困ったこと、希望することを聴きたい。
- ・マイナスな内容より
前向きなテーマがよいかな？

用意したテーマ

- ・現在の生活について
- ・困っていること
- ・うれしかったこと・楽しいとき

3 本人ミーティング当日の様子



参加者

○認知症の方ご本人 5名(市内4名 市外1名)

地域での活動をされている方々

地元には
こんな活躍をしている
人たちがいた！

(ヨガ教室の講師、ワインセミナー講師、作業所でパン作りなど)



参加者

- パートナー 3名
- オブザーバー 4名
- 市職員 4名



➤ 家族会を別室で開催しました。

家族 4名

市職員 2名

本人は本人同士、家族は家族同士、それぞれが思いをだせるように

開催場所

市役所内の
会議室にて



こじんまりと、お菓子をつまみながら、くつろいでもらえるように・・・

実施方法

- 本人のみでテーブルを囲む
- 進行役 : 本人が担当
- 進行補助、書記 : 市職員

事前に参加者の一人が
マンドリンが得意ということが
わかる。

→当日、マンドリンを持参し、
演奏して下さい。



意見交換のテーマ

- 現在の生活について
- 困っていること
- うれしかったこと
楽しいとき



4 ご本人からの意見



ご本人からの意見・声 ①

- 医師の勧めで地域のサロンに通い、ヨガ指導を再開。サロンに出会っていなかったら、どうなっていたか・・・。
- 学生時代の楽器演奏を再開し、様々な場所から声がかかり演奏している。
自分に合うサロンに出会えて充実。

本人からの意見・声 ②

- タブレット使用し、記憶障がいを補っている。
- 認知症と診断された後のことをまとめ、本を出版した。
- 落ち込んだ時、氣力を無くした時は反対の言葉「人生は楽しい」「未来はワクワクすることがある」などを書くようにしている。

25

本人からの意見・声 ③

- 認知症の人は、配慮があれば、普通の生活を送れる。
- 認知症のイメージ「何もわからない人」を払拭したい。

26

5 本人ミーティング開催後の 具体的なプラン



第1回を終えて

本人の声から事業の点検につながる点を確認

- 診断後、本人が安心でき、楽しみ・活躍できる暮らしと適切な支援に繋がるネットワークづくり
- おれんじサポーターの活動へ展開
(ご本人のパートナーとしての活動の可能性)
- 認知症の人が活躍する機会や場の情報提供

28

第1回を終えて（次回への課題）

- テーマの設定
- 役割分担
- 家族会と同時開催
- 参加者がなかなか
集まらない・・・
- 開催場所



今後「地域に出向いていく」



今後の具体的なプラン

- 第2回 本人ミーティングを企画
- ALLふじさわ合同ミーティングの開催
- 個別インタビューの実施
- 藤沢おれんじプラン への反映

第2回 本人ミーティング の企画



2019年 2月25日 (月)
14:00-15:30 (開場13:30)

対象 認知症当事者 定員 20名

内容 交流会・意見交換会

会場 かめキッチン (藤沢市厚木7-20-21 東口8F)

申込方法 電話または直接FAX申込書にて

認知症ご本人が「悪い」前年の経験や希望 必要としていることを話し合い
自分たちのこれからよりよい暮らし 暮らしやすい地域の作り方を
一緒に考える「認知症本人ミーティング」を開催します
多くの方のご参加をお待ちしております

藤沢市役所地域包括ケアシステム推進室

TEL: 0466-50-3544

Phone: 0466-50-3544

FAX: 0466-50-8412

fj-houkatsu@city.fujisawa.lg.jp

担当 小島・眞井・青野



地域に出る。
行政の方から
本人がいる場へ。
2回目の場所は
認知症の方が働く
「かめキッチン」に
設定

継続することでご本人の声が見えてくる

ALLふじさわ合同ミーティングの開催

認知症ご本人の声を、
地元の本人や家族、支援者・地域に伝え、
それぞれの立場で、できることについて考える。

＊「本人の声」から、参加者の中で
希望ややりたいことが芽生え、
一緒にできることが広がるといいな。



ALLふじさわ合同ミーティング

・趣旨

「本人ミーティング」の声をもとに、それぞれの立場でできることについて考える。
そして、日頃の取組の紹介や交流を通し、今後に向けての新たな取組など、
広く自由に考える機会とする。

・開催日 2019年3月16日（土）明治市民センター・ホール

・参加者 認知症当事者、家族の方々
市民、地域団体、医療・福祉関係者、民間企業、行政職員等

・内容

（１）認知症ご本人の声の紹介

「本人ミーティング」、個別インタビューの報告、ご本人の生活の紹介

（２）地域での取組の紹介

包括連携協定締結企業の取組（明治地区・見守りチャレンジ）

介護事業所の取組（あおいけあ）、地域住民の取組（鵜沼地区）

（３）意見交換

➤個別インタビューの実施

地域に出向き、本人の声を聴く

今年度取組みつつあった
「藤沢おれんじプラン」に
本人の声を掲載することに

一人ひとりがはじめる
認知症の人を支える“まちづくり”
(仮称)
～ 藤沢おれんじプラン ～



「本人ミーティング」や
「個別インタビュー」など
で伺った、認知症ご本人
からの声をご紹介します。

6 最後に



本人ミーティングを通じての感想

- ご本人に参加を呼び掛けるのは難しい。
なかなかご本人と出会えない・・・
⇒市内には大勢いる！
本人とつながっている現場の人と行政がつながる
- 企画当初、ミーティングを開催すること自体が目的となってしまったようなところも・・・
- ご本人の声を、直接聴くことができて良かった。
 - ・施策担当者として、本人の生の言葉や仲間とともに生き生き過ごす様子、それぞれの好きなこと等に直に触れることができた。
 - ・それらを、他の職員や家族と共有できた。
 - ・施策を進める原動力、新たな出発点になる。
 このこと自体が、施策改善の大事な一步。

本人ミーティングを活かして動き出す際に

- 関係者間で、目的・目標の共有が大切。
- 一緒に考え、参画する仲間を見つけよう。
* 地域に出向くと、仲間がいる。
- そしてまずは一回、開催してみよう。
* そこでの本人の声を大事に活かして
(小さな)アクションをひとつつつ。



ふじキユン♡

ご静聴ありがとうございました。

40

上田市豊殿地区の取り組み

－ 当事者と共にすすめる地域づくり －



「安心の会」 春原 治子・神林 芳久
社会福祉法人ジェイエー長野会 ローマンうえだ 櫻井 紀子

「住み慣れた地域で安心して暮らしたい」



地域住民、社会福祉法人、JA、厚生連病院、関係機関との連携で進める「安心」の地域づくり

高齢化が進む中、住民の声の高まり 特養建設決定
2001年「安心」の地域づくりセミナー発足



2019年1月までに
受講生580人

セミナー実行委員会

協議組織：豊殿、神科、神川地区自治連 まちづくり協議会、「安心」の会、J A信州うえだ 厚生連鹿教湯病院 特別養護老人ホームローマンうえだ

「人生の総仕上げ」にふさわしい施設にしよう !」

地域の風を運ぶ・利用者の声を届ける・世代を繋ぐ



特別養護老人ホーム
「安心」の地域づくりセミナー受講生によるボランティア活動

地域に出かけよう! 施設と地域の連携



地域づくりの種まき人になろう!

住民主体の支え合い活動に発展

—自治会単位のサロン活動— 町吉田・下郷・林の郷・下吉田・矢沢・赤坂



ト田市豊殿地区

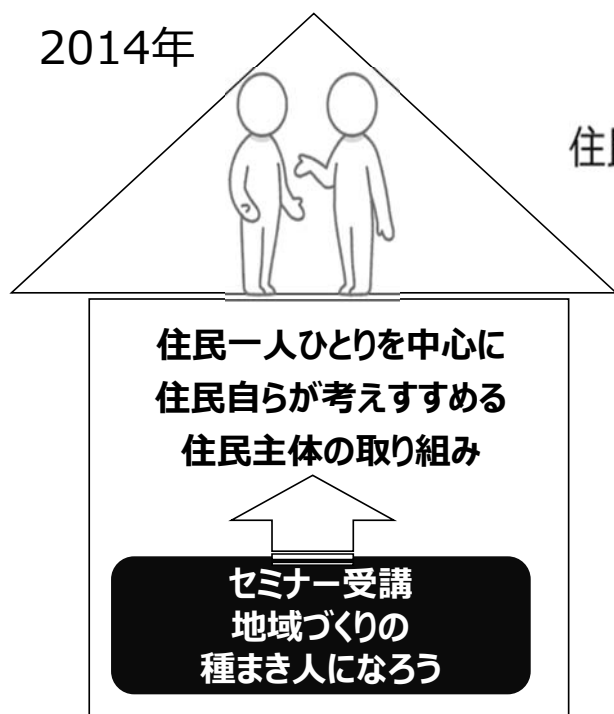


小さなサロン矢沢



支え合いサロンを継続しているが この先が心配・・・

2014年



住民主体の支え合いサロン活動で困難と思う事

—サロン活動スタッフへのアンケート調査—

- 認知症の人や家族への支援
どのようにお誘いしたらよいか戸惑う
行方不明などがオープンにならない
- 独居や高齢者世帯の生活支援
草刈や除雪 ゴミ出し 買い物 配食弁当
巡回バスの増便など
商店や地域の事業所等とも連携したい
- 地域全体の拠り所、活動の場
サロン開催が困難な自治会(限界集落)もある
行政や専門職の支援も必要



私たちは何をすれば良いか・・・

住民の話し合いが始まる

2015年

みんなで叡智を出し合っ
てこれからの備えをしよう



住民の声により空き店舗の活用決定

2018年



2018年3月 住民主体の豊殿ふれあいサロン運営委員会設立
当事者が委員に 安心の地域づくりを みんなで 楽しく



ふれあいサロンhinataboccoとよさと 運営委員会

「安心」の会同窓会、まちづくり協議会福祉部会、自治連、民生児童委員、ボランティア、認知症当事者、JA信州うえだ、ローマンうえだ、神科地域包括、上野丘公民館、
※県長寿開発センター

現在50余名のボランティアが登録

ふれあいサロン hinata bocco とよさと



いよいよ営業開始

大人も子どもも 要介護状態や認知症になっても
みんなが集える 楽しい居場所に
子ども食堂も始まる!



60名以上のボランティアが登録



500円コーヒー付で美味しい昼食が人気!!



認知症になって体験したからこそ わかることがあります

当事者治子さん自身の認知症の人の受けとめ

16年前

セミナーで学んだが、
「認知症だけはなりたくない」...



その後のセミナーや地域活動から
の学び



認知症になっても
地域とつながって
自分らしく生きることが出来る



お互いを知るー「私の大切なこと」を語り合う



みなさんのために、少しでも役に立ちたい

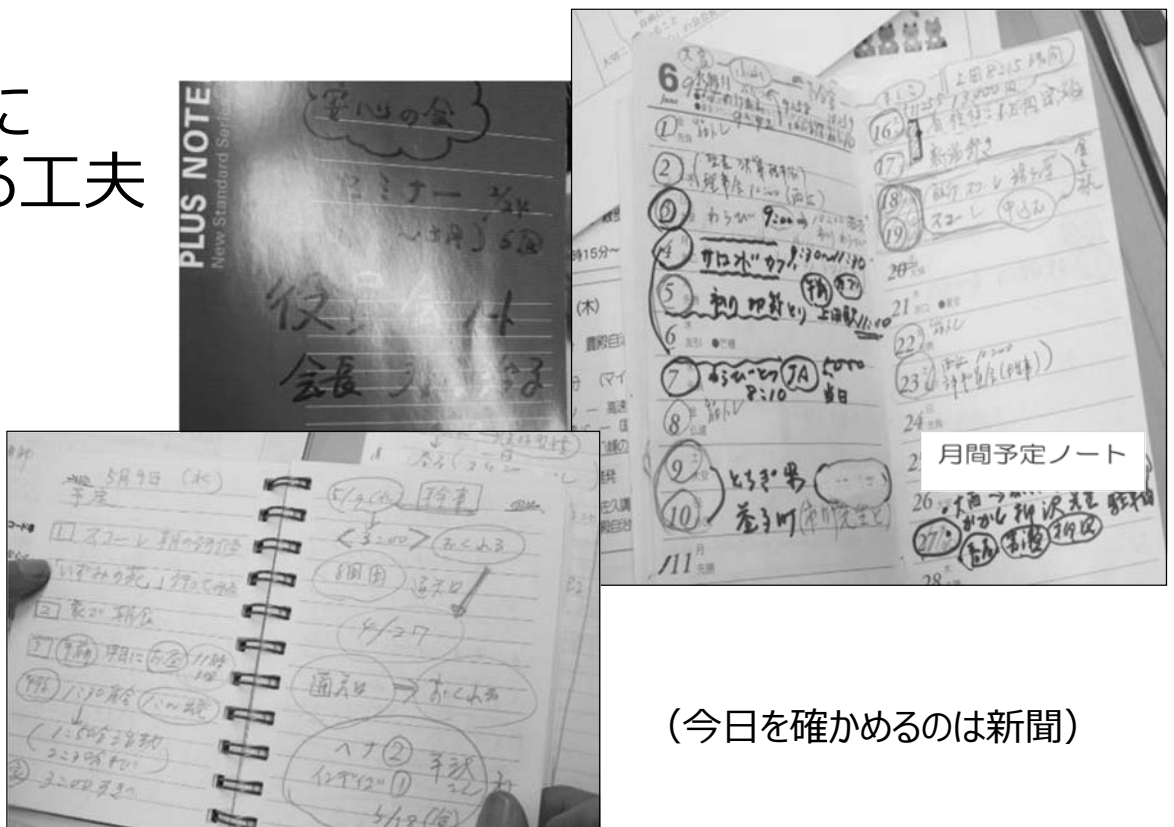
認知症の診断を受けて 私が思ったこと、工夫

- ① オープンにする
そのことで、前向きになれる
- ② 忘れたことを受け入れることができる
- ③ 何回も聞く。友人に「言ってね。」
前日や当日に電話で予定を知らせてもらう
人間関係もうまいく。
- ④ 自分なりに確かめる工夫をして実行している
- ⑤ 今までどおり、外に出て、役割を持ったり、生活を楽しむ

地域に
差別や偏見が
ないから
オープン出来る



自分なりに
確かめる工夫



(今日を確かめるのは新聞)

本人の意見（声）を地域で活かしていくための 仕組みづくり

認知症の人が地域でより良く暮らせるための サロンhinata boccaの活用について

2018年11月 話し合い 上田市高齢者介護課、神科地域包括支援センター、
hinata boccaとよさと代表委員、小規模多機能豊殿
の家管理者、ローマンうえだ

- 行政・包括
- ・ 予備軍も含めて、地域全体の人を対象としてはどうか。
先ずは地域の人に知ってもらう
 - ・ 治子さんのように語れる人は「特別な人」・・・
- 特養
- ・ 施設のスタッフが認知症の人や家族のサロン（相談会）を
毎月2回hinata boccaで開催する

認知症の人が地域でより良く暮らせるための サロン hinata boccaの活用について

治子さんの声

私が一緒に参加。
緊張がほぐれて、
安心して参加きると思う。



提案

個別に悩みもあると思う。
風景を見るだけで疲れることもある。
いきなり喫茶でなく、
最初は静かな部屋で聴いてあげる
のが良いと思う。

体験や工夫などお互
いに話して元気にな
れればいい。

サポーター養成講座を
当事者目線に
変えてください。

一人ふたりと仲間が増
えたら、喫茶で仲間同
士の交流会を持ちたい。

本人の意見・提案から開催方法を変更



静かな部屋で

- 公民館、地域包括、高齢者介護課が広報などで周知

- 当事者、専門職、行政、地域住民、ボランティアが参加、交流



ふれあいサロンhinataboccoでみなさんと交流

認知症の人が地域でより良く暮らせるための サロン hinata boccaの活用について

治子さんの声

- 当事者の役割として、話相手という仕事もあるんだと仲間の皆さんにわかってもらいたい

- なじみの人がサロンにいると認知症の人も地域とつながっていく



これまでどおり楽しくやろうよ



私たちの仲間に
いつも治子さんがいるってことが大事なんです
治子さんがどんなことに困っているかを教えてもらって
一緒に歩んでいきたい

すみちゃん／hinatabocceの会員



治子さんと一緒に生活の困り事にも
取り組んでいこう

認知症の人が人生の最期まで地域でより良く暮らす

声をきく特養の取り組み

食べられなくなった時、どうしたいか 特養に入居している皆さんに訊ねました。

平均介護度4.2 平均年齢90歳

6割の方々がしっかりと
ご自分の意思を示された。



認知症の人が人生の最期まで地域でより良く暮らす

食べられなくなった時、どうしたいか

本人の声

「自然のことだ。自然がいい」

「病院はやだ。点滴もやだ。ここがいい」

「…（指で自然な看取りを指す）」

「老衰だもの。何やったって、ダメだ」

「自然がいい。点滴はやだ。管から栄養も嫌だ」

認知症の人が人生の最期まで地域でより良く暮らす



常子さん 93歳



「大事なことだ。
どうするかだって？
自分で決める！
あたりまえのことだ」

認知症の人が地域でより良く暮らせるための活動のこれから

本人の声から、第一歩が踏み出せた
本人が認知症の人と地域をつないでいる
最期の時まで意思を持って生きている



- 声を大きくするために、本人を中心に据えて地域も関係者も連携強化を
- 認知症の理解をすすめる啓蒙活動を当事者目線に
- 医療やケアの意思決定も最期の時まで、本人の声に耳を澄ます

「認知症の人の意見に基づく認知症施策の 改善に向けた方法論等に関する調査研究 事業」事業報告会

2019. 2. 9(土)

香川県 三豊市

一般社団法人 三豊・観音寺市医師会
三豊市立西香川病院

香川県 三豊市立西香川病院 紹介



三豊市立西香川病院 紹介

一般社団法人観音寺・三豊医師会 三豊市立西香川病院

病院理念:「高齢者にやさしい病院」

高齢者に対する慢性期の医療や介護, リハビリテーションに重点を置いている

- ・入院総数150床

(精神療養病棟60床:認知症専用

介護療養型医療施設30床, 回復期リハビリテーション病棟60床)

- ・重度認知症患者デイケアを併設

- ・物忘れ外来、認知症疾患医療センター

- ・居宅支援事業所

認知症病棟部門

ユニットケア

改築前

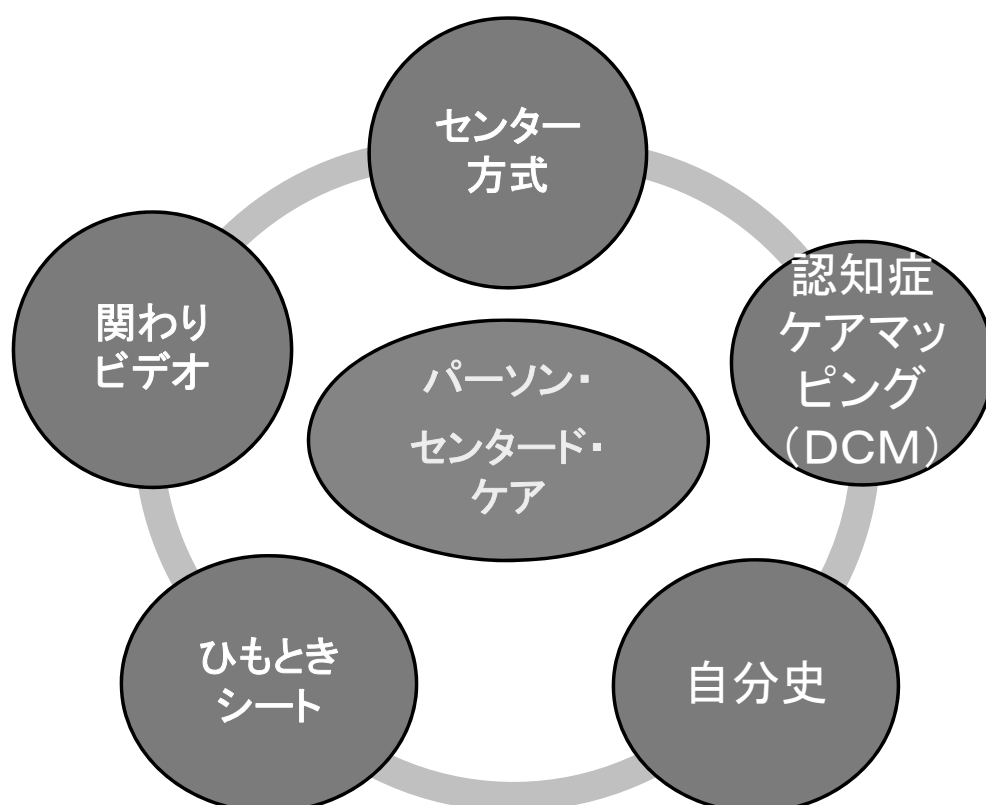


改築後



5

当院の認知症ケアの取り組み



6

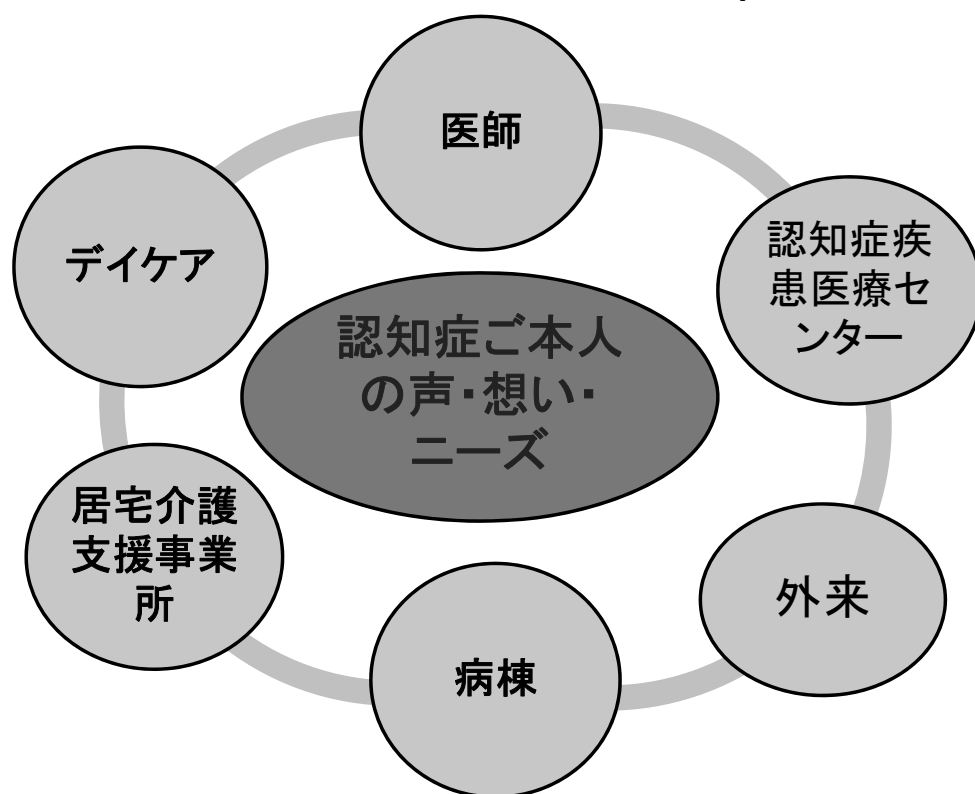
ケアの評価者は認知症のご本人

- ケア者の自己満足のケアではいけない
- 認知症の人のために良かれとしているケアが、認知症の人を傷つけていることもある。
- かかわりを通して、認知症の人の心に寄り添い、ご本人が、「自分を支えてくれる人がそばにいて安心できる」「ありのままの自分でいいんだ」と感じていただけることを大事に。
- 認知症の人が大事にされている、尊重されていると感じられるケアこそ、必要とされているケアである。

7

認知症部門
院内連携

認知症連携ミーティング(毎週1回)



地域づくりと認知症啓発活動

第18回 認知症を考える会

事前申込
必要

“認知症の人が語る想い、語れない想いとは”

開催日：平成31年2月17日(日)
場所：ユーブラザうたづ (香川県綾歌郡宇多津町浜六番丁88番地)

【市民公開講座】13:00～16:00
“当事者が当事者を支援し、
支え合うことを考えよう！”
・当事者の声 認知症当事者 渡邊康平氏
・パネルディスカッション

午前中の講演にもご参加できます。裏面の申込欄に○をつけてください。【開会挨拶】9:40
【特別講演】9:50～10:50 【特別講演】11:00～12:00
「認知症とともに よりよく生きる」 「認知症の人の語りを支える場所と地域づくり」
のぞみメモリークリニック 院長 末之下 豊 氏 社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター
研修部長 矢吹 知之 氏

定員：一般市民と専門職対象 400名
参加費：無料 <車費は各自でご準備ください>
申込締切：平成31年2月8日(金)
主催：三豊市立西香川病院 (認知症疾患医療センター)
共催：きのこ老人保健施設
後援予定：日本認知症ケア学会

参加申し込みは裏面「参加申込書」にてお願い
します。なお、参加希望数が定員になり次第、
締め切らせていただきます。
お問合せ：三豊市立西香川病院 担当：井川・上田
TEL：0875-72-5121
http://www.nishikagawa.jp
→QRコード(裏面HP)から詳細・申込用紙をダウンロードできます

認知症外来部門

認知症外来部門

- 物忘れ外来(H14～現在)

認知症ご本人やご家族への心理的支援
(心理士やSWによる
心理面接)

- 外来医療福祉相談室
→認知症疾患医療センター
オレンジカフェ併設

- 重度認知症患者デイケア(H15～現在)

診察: 本人への心理的支援(初診時から)

- まず、最も重要な信頼関係をつくることに努めながら、本人とその周りの状況を詳しく把握していく
- 心情・心理をできる限り理解し、不安などの軽減を図る
- 悪すぎる認知症のイメージを改善するための説明
- 本人の心情、心理的体験について、
確かめながら代弁できるところを行う
本人に語れるところは語ってもらえるよう援助・工夫
- 悪い部分ばかり見てしまう狭くなった視野を広げ
自己像を修復できるよう援助しつつ、
自身の状況への受容へ(強いずに「待つ」を前提に)
- 楽しみ、生きがいの再発見など人生再構築の援助

診断後支援におけるピアカウンセリング

- 当院では主に、診断後早い時期に院内にあるオレンジカフェにて、認知症当事者の相談員雇用という形を用いて、ピアカウンセリングを施行
- 物忘れ外来で、認知症のイメージの悪さ、誤解についても説明し、できるだけ疾病観を改善しておいてから、カフェを紹介
- 前もって本人の情報を相談員に伝えて準備
- カフェの当日振り返り、月1回のカンファで意見交換
- 相談員の関わりで、心の内面の表出ハードル低下
→状況把握や支援のヒントにも(本人の語り、表情・態度から)

西香川病院のオレンジカフェ(認知症カフェ)



- 病院の敷地内にある、官舎の一室を利用
- 週1回 金曜日 10:00～15:00
- 利用料:無料
- 利用者:西香川病院に通院している認知症当事者やその家族
- 利用人数:1日約20人程度(認知症当事者や家族)

・認知症当事者が相談員として勤務している
・ピアサポートを中心に

地域のオレンジカフェ



西香川病院

- ・ 認知症の本人同士の語りの場
- ・ 家族も理解を深める場所
- ・ つながりが自然と生まれる場所
- ・ 自然な語る雰囲気がある



地域のオレンジカフェ

- ・ 楽しそうな雰囲気
- ・ 専門職と気軽に話ができる

一方で

- ・ サロンの雰囲気が強くなる
- ・ イベントなど楽しみに偏る
- ・ 茶話会、語りの場になりにくい
- ・ 認知症について学ぶことはあってもどこか自分事とまでなりにくい

地域のオレンジカフェ

- ・ 運営する側もどのような形がいいか分かっていない
- ・ 周知の方法も課題



一歩ずつ変える

当事者の声から

当事者の声

- 本人ミーティング
- 院内のオレンジカフェ
- 認知症があっても楽しく生きるつどい
- 認知症デイケア

当事者のさまざまな声

当事者の声を地域で共有し
活かすために

仲間づくり

- 当事者さん同士
- 医療・福祉施設
- 行政(三豊市)
- 社会福祉協議会
- 自治会
- 地域のサロン
- ボランティア団体
- 学校
- 地域住民のみなさん ...など

渡邊康平さん

当事者としての想い

- 認知症になって人生終わりではない。できないことは仕方がないが、できることや楽しめることを大事に。
- 認知症になっても尊厳を持って胸を張って生きる。
- 認知症でも人間らしい生活を送ることができる。(絶望から生きる意欲へ、人間性を取り戻すことができる)
- 様々な人と繋がりを大事にしていきたい。
(仲間づくり)

講演活動



囲碁仲間と



認知症の人とともに築く 総活躍のまち“ごぼう”



御坊市市民福祉部介護福祉課 谷口 泰之
御坊市在宅介護支援センター藤田 玉置 哲也

御坊市について

- 紀伊半島海岸部のほぼ中央部
- 総面積：43.91km²
- 日高川を境に河北、中央、河南エリアに生活圏域
河北：地元の方と移住の方が混在。
中央：官公庁や商業施設が集中。
河南：農業や漁業が盛ん。2世帯同居が多く残る
- 昼夜間人口比率：113%



平成30年4月1日現在

総人口	65歳以上人口	高齢化率	日常生活圏域	認知症地域支援推進員
23,780人	7,245人	30.5%	6圏域	6人
独居高齢者数	要介護認定者数	認知症日常生活自立度Ⅱ以上	第7期介護保険料基準額	地域包括支援センター数
2,239人	1,759人 (第2号40人)	1,101人 97	6,520円	1(直営)

御坊市の自慢



スターチス生産量日本一



人を見たけりゃ”御坊祭”



日本のシンデレラ”宮子姫”生誕地



幻の品種”まり姫”



麻雀牌・サイコロ生産量日本一



西日本一短い鉄道”紀州鉄道”

ごぼう総活躍のまちづくりプロジェクト

少子高齢化により人口減少が進む中、認知症の方や障害がある方でも、「総活躍分の1人」となれる社会を目指し、安心・安全に暮らせるまちづくりを5ヶ年計画で実施。（H28年度～）

企画課：プロジェクトの企画調整

○健康づくり

健康福祉課：生活習慣病予防、健康意識普及啓発、食育推進

○生きがいづくり

商工振興課：語り部育成

社会福祉協議会：シルバー人材センター機能強化

○地域づくり

介護福祉課：認知症地域支援を通じた活躍の場の創生

認知症の人が活躍する って、どんなことだろう？

スターチスグッズ作製で「活躍」



もっと
役に立ちたい！



自分の「居場所」 → 地域で活躍！



使い慣れた道具を持参して作業



お地藏さんのほくら作り



デイサービス内で本人ミーティング



手づくりのお地藏さん

NHK厚生文化事業団「認知症にやさしいまち大賞」
受賞団体への表彰状を御坊市在住91歳の認知症の女性が筆耕

・第一

認知症にやさしいまち大賞

ごぼう総活躍のまちづくりプロジェクト

西山さんから始まった地域づくり

あなたの方の活動は認知症七百万人時代と
目前にした今 認知症とともに生きる
当事者とすべての人達が自らの住む町で
ともに安心してよりよく暮らしていくための
先駆的な取り組みとして選考委員から
高く評価されました
取り組みがより発展し国内全体に
広がっていく事を期待しここに表彰
します

平成三十年二月十八日

NHK厚生文化事業団

理事長 鈴木賢一



認知症にやさしいまち って、どんなまち？

市の責務と使命、そして理念を条例に

「さまざまな場面で本人たちが地域で活躍している。認知症にやさしいまちって何なのか？誰もがより良い暮らしができる地域をつくるという市の責務と使命を表明するために条例をつくらう！」



介護福祉課長

課長の熱い思い

「支援する、してあげる」なんて思い上がった行政にはならないように、本人とともに条例をつくるんだ！

ワーキングチーム結成

御坊市のような田舎には、研究機関や学術機関などない。有識者会議なんてできないんじゃないか？
でも、同じ思いの仲間がたくさんいる。認知症サポート医、医療機関、事業所、家族、そして本人。

認知症にやさしいまちづくり条例(仮) 作成ワーキングチーム結成

ワーキング会議メンバー

- 市内在住の本人及び家族
- 若年性認知症の本人、パートナー
- 市内の認知症サポート医
- ケアマネジャー
- 認知症対応型デイ管理者
- 病院地域医療連携室相談員
- 総務課（法制担当）
- 企画課（総活躍まちづくり担当）

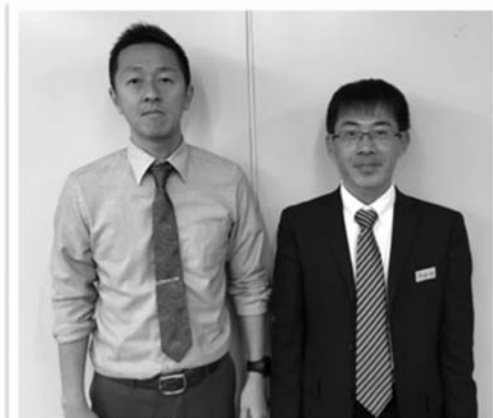


必要に応じて、日本認知症本人ワーキンググループ
等からもご参加いただく

行政内部でも横断的な連携を

ワーキングチームのメンバーには、行政の立場として介護福祉課だけではなく、総活躍プロジェクトの企画課、条例の法制担当の総務課の職員にも参加要請。

形式的な人選（課長級等）じゃなく、実際の担当者を入れる！



企画課と総務課の強い味方！！

部署・立場を超えての連携 作成のプロセスを最初から共有

ワーキング会議実施

6月27日、第1回条例作成ワーキングチーム会議を開催。それぞれの思う「認知症にやさしいまち」について話し合う。

- 本人 「認知症の人」という見られ方をするから隠そうとする。（本人が）そんなこと気にしなくていいと思える条例を作りたい。
- 本人 認知症になってもできることがある、少しでも役に立てることがある、そう思って地域に出ることができる。そういうことを伝えたい。
- 企画課 認知症にやさしいというと「守ってあげる」というイメージだったが、ごぼう総活躍のまちづくりで本人の活躍を見て意識が変わった。

地域の本人に聞いてみる

第2回の会議で「地元で暮らす本人たちの声も聞いてみたい」と意見があり、在宅で暮らす人、デイサービスの利用者、グループホームの入居者等の声を聞く。

- 在宅の人 認知症地域支援推進員、ケアマネジャーが訪問して聞く
- デイサービス ワーキングメンバーと認知症地域支援推進員で施設を訪問
- グループホーム 管理者に依頼

地域の本人たちの声

在宅60代男性

市が条例を作ってくれるのはありがたい。読んでもよくわからんけど、要するに希望を捨てずに暮らせるってことやる？認知症になってもそんなに変わらんよ。認知症になることは怖くないよ。

在宅90代男性

認知症の人は、皆誰かが認知症になりたくてなったのではないということをすべての人が理解し、一人の尊い人格を持った人間として人権を尊重してほしいというのが一番の願い。

デイサービス利用者90代女性

90歳を過ぎたからといって見捨てないで。90年生きたからこそできること、私にしかできないことがあるの。そういうことができる条例があれば、私ももっと頑張れる気がする！

グループホーム入居者70代女性

地域のためにできることは何でもしたい。みんなの力になってあげたい。でも、常に周りの人といるとしんどくなるので干渉し過ぎないでほしい。条例は生きることに対する興味に繋がる。

第3回ワーキング会議にて

○地域の本人の声に対して

「年齢に関係なく、本人たちが様々な思いを持っていることがわかった。本人たちの思いを反映した条例にしたい」

○“家族”についての意見（本人より）

「本人と家族、と併記することはどうか。条例の目的、誰のため何のためなのか曖昧になる。ここをしっかりと考えないと（家族視点からのことを）わーっと言われてしまう」

○“家族”についての意見（家族より）

「この条例の目的は何なのか。本人を中心にした条例という柱があるのに、家族の声が入ると（違う方向に）広がってしまうと思う。
（家族として）家族の声・思いを入れてほしいという気持ちもあるが、ここは認知症の人1本で通したほうがいい」

最終の会議に向けて

これまでの意見から事務局で構成案作成



法制担当者に修正、条例案作成依頼



会議資料として事前にメンバーに送付

第4回（最終）ワーキング会議にて

○「認知症」の定義について（本人より）

介護保険法からの引用だけでいいのか？認知症の人はやっぱり大変とか旧来のイメージにならないか？

○「認知症の人」の定義について（パートナーより）

「認知症の人」という言葉も言わない地域になればいいと思うが今はどうしても必要。だから、この定義も作ればどうか？前向きなイメージで。

○本人の役割について（本人より）

「本人から関係機関に発信する」という表現は「僕がせなあかん」と思ってしまう。もっと前向きに「発信していいんだよ」と思えるようにしたい。

○条例の名前について

「認知症にやさしい」という表現は、これまでの意見からこの条例に合わない。本人とともに地域をつくっていくんだと思える名前を。

御坊市認知症の人と ともに築く総活躍のまち条例

条例に盛り込む内容

目的

誰もが生き生きと活躍でき希望を持って自分らしく暮らして続けることができるまちを実現する

基本理念

自らの意思に基づきできることを安心、安全に行え、いつまでも新たなことに挑戦できること
認知症の有無にかかわらず、ともに暮らしやすい地域となるためにそれぞれが活躍できること

市の責務

認知症の人の意見を聞き、本人とともにより良いまちづくりを不断に目指す

本人の役割

認知症とともに暮らしていく中で自らの希望や思いや気づいたことを、身近な人、市、関係機関等に発信する

市民の役割

認知症への理解を深め、認知症になってからもより良い暮らしができるよう備える
本人が様々な領域で日常的に社会参加できるよう配慮する

事業者の役割

働くことへの配慮、従業員への理解の普及、認知症の人の暮らしに関わるサービス等の環境整備

関係機関の役割

安心して暮らしていくために必要な関わりや支援を互いの連携と協働によって実施

条例案を本人に話してみた

ワーキングメンバーから条例案を本人に見せた。

本人のことは

「市がこんな条例作ってくれるの？うれしいねえ。
私も色々言っているんだね」

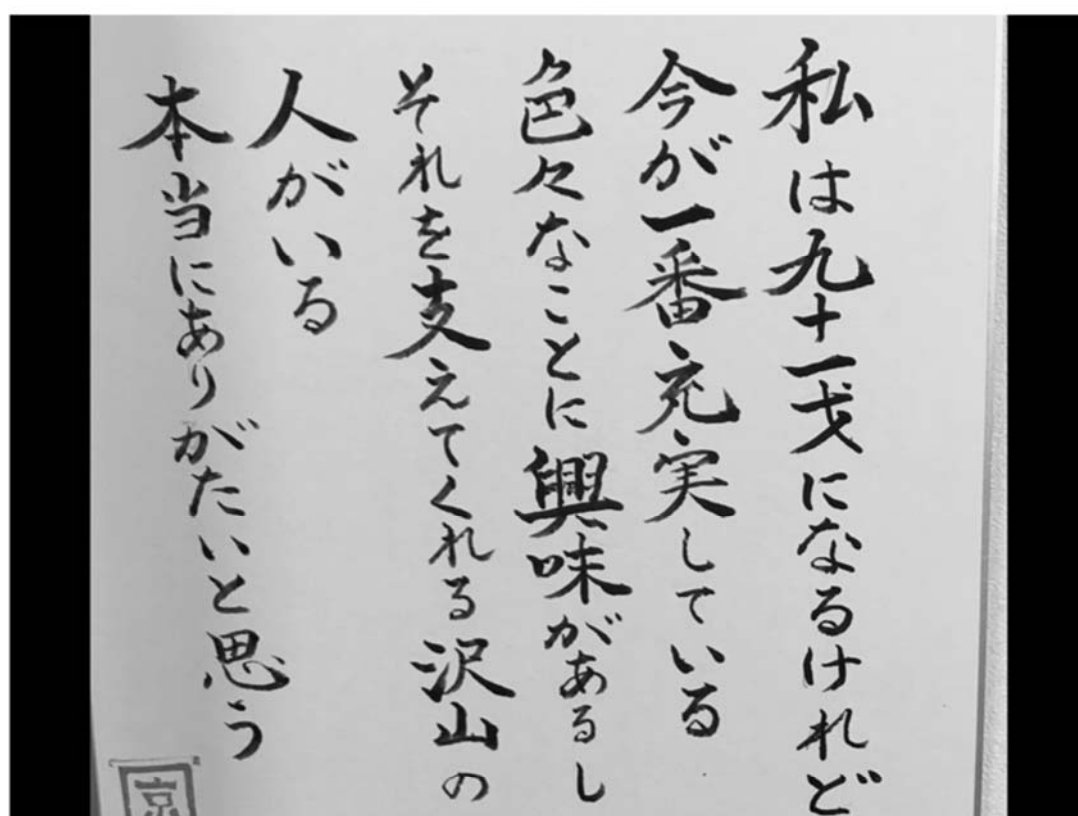
「こんな条例あれば、私ももっと頑張らねば！って思えるよ」

本人たちとともに条例作成を通じて

市の使命と決意を表明することを目的に条例づくりに取り組んだが、本人が参画することによって、これまで気づかなかった視点から意見をいただき、未来志向となる条例をつくることができた。

そして、条例を制定して終わりではなく、これからも本人とともに地域をつくりながら、常にこの条例の内容が地域の実情や時代に合っているかの確認を本人の視点から確認する必要があるとの共通認識を得ることができた。

将来的に、「認知症の人」と区別しない地域、そして、この条例が必要ない地域になればいいと願います。



本人の声を聞く、ということがそれほどハードルが高いことなのか？実は地域づくりにおいて、本人の声を聞くことが一番シンプルな方法なのではないか。

ご静聴ありがとうございました



本人の立場でワーキング会議に参加してくださった山際裕三さんと湯布院へ旅行
旅先でのひと言「普通のことは気を遣わんでほしいよ」

参考Ⅰ：報告地域以外の試行地域の取組概要

○各試行地域の取組経過内容を一部抜粋して概要として紹介。

Ⅰ. 高齢者・こども110番の家（北海道 北見市）

認知症の人が意見を表し、関係者が聴く際に、配慮すべき点や工夫
＜本人が率直に語ることができるために＞ リラックスした環境をつくる。 過去情報から得意な話題から導入し徐々に雰囲気づくりを行い本題に入る。 ＜そのための機会・場を作るために＞ 高齢者・子供110番との人等と本人・会員、本人の親しい仲間に参加していただく。 ・まず、関係者等が一同に集まりこれまでの内容を報告。 ・本人からの発言内容を更に詳細に分析し、話していただいた記憶からのことばを記録し根拠を確認させていただく。 ＜情報化（可視化）するために＞ 水害の写真・留辺蘂自治区の写真をパワーポイントでみていただくこと、これまでの本人からの発言を基に文章化し災害地区関係者等が加わり、これまでの発言からの課題を揉む。 ＜確認・共有するために＞ 留辺蘂・北見市災害ボランティア等の関係者から留辺蘂のあゆみ（図書館）から入手し情報を収集。 上記と平行し、認知症の人への災害時対応について話しあう。 ・同室者との良好な関係性を保つ為に考えること ・不安の軽減 ・恐怖・環境の変化から認知症の進行防止をどのように考えるか。 ・軽度認知症の人の力を借りる支援 ネガティブではなくポジティブに認知症の理解を学べる場へと可能性をもつ
認知症の人の意見を地域（地元）の認知症施策の改善に活かすには（改善を具体化するためには）
＜施策の改善に向けて、意見の共有が必要な人・組織・範囲は＞ 認知症の人の言葉（発言）を丁寧に扱う事。 地域包括・ケアマネジャー・地域住民・行政・介護保険事業所の人々、高齢者・こども110番の会員等で介護勉強会等を検討。 ＜改善について話しあう機会・場の作り方は＞ 今までの積み重ねを知っていただき参加していただいている家族会・町内会・運営推進会議・地域包括の場も含む。 ＜改善を計画・企画するために必要なことは＞ 認知症の人の力。他の事は忘れても鮮明に残る記憶もあり、認知症の人の症状は個別でありたとえ疾患が同じ診断であっても多様である事。 災害時に混乱をしない為に事前に学習する事の大切さ（東北大震災からの学び）。また災害時の認知症の

発症リスクを軽減させること。

<改善を実践するために必要なことは>

環境さえ整えば認知症の人でも災害時には助け合い励ましあい大きな役割となることを知る。



『いやーおっかないなんていうもんでない！』
『人間はあれほど無力だとは思わなかった』
『つかまれーつかれー！草でも何でもつまれー』って、言っ
てな。
『防ぐにはどうしたらよいのかには・・・』
川をきれいにし、川幅を広げる事だ。
堤防ができるといい。

2. 大崎市（宮城県）

認知症の人が意見を表し、関係者が聴く際に、配慮すべき点や工夫

- ・本人がリラックスして話せるような場所、環境づくりが必要。（本人のなじみの場所で実施。関係者も本人との信頼関係づくりを行う必要がある。）
- ・当事者と話をする方は様々いるため共通のツール（エクセルシートなどの簡単に書き込めるもの）などを活用し、情報共有を図る。

認知症の人の意見を地域（地元）の認知症施策の改善に活かすには（改善を具体化するためには）

- ・医師、ケアマネジャー、介護事業所職員などと検討が必要。
⇒認知症事業推進協議会にて認知症の人の意見を伝え、認知症施策にどのように生かしていけるか参加者で検討する
【1月16日認知症対策推進協議会（医師・歯科医師・薬剤師・ケアマネジャー・保健所・家族・区長等参加）について「こころの声アンケート※」の結果、その後の活動を報告。それぞれの立場から来年度の活動に向けての意見・要望等聞かれた】
- ・認知症の人の意見を地域の方々に伝えていく。
⇒お茶っこ会や百歳体操の場など地域での居場所に出向き、意見を伝えていく。さらに、認知症施策についても改善できるところの意見を地域の方に問いかけていく。

※「こころの声アンケート」とは、大崎市に住む認知症の方本人、家族、支援者である介護支援専門員に対し聞き取りのアンケートを行ったもの。

<本人の「こころの声」より>

「認知症＝自覚がない・すべてが失われる」は大きな間違いです！ご本人の「感情・思い」は、今までもこれからも生きています。

- ・ほめられるとうれしい！叱られると悔しい。冷たくされると悲しい。
 - ・役に立ちたい！〇〇に行きたい！ ⇒役割や趣味がある、うれしい・楽しい。
 - ・忘れる、できなくなったことへの不安、将来の不安、身体の不安…
- ⇒自分自身の変化に気づいているからこそ感じる心配事

3. 有田市（和歌山県）

認知症の人が意見を表し、関係者が聴く際に、配慮すべき点や工夫
＜本人が率直に語ることができるために＞ ・個々のプライバシーを守り、生活場面などでゆっくりと話を聞く。 ・本人ミーティングを行い、本人同士で語る。 ・「ひとりひとりの方の声を地域に活かしていきたい」と目的をしっかりと伝える。 ・「はい」「いいえ」などの限定された答えにならないよう、開かれた質問で聞く。 ・他者や自身の経験等を引き合いに出さず、個々の本人のこととして傾聴する。 ＜そのための機会・場を作るために＞ デイサービスや認知症カフェ、自宅など特別な場所でなく、本人の慣れた場所で話を聞く。 ＜情報化（可視化）するために＞ 本人の声や映像などの記録を残す。 ＜確認・共有するために＞ 本人の声を冊子などにまとめ、一般の方が見られるように行政の相談窓口などに置く。
認知症の人の意見を地域（地元）の認知症施策の改善に活かすには（改善を具体化するためには）
＜施策の改善に向けて、意見の共有が必要な人・組織・範囲は＞ ・市や管内の認知症に関する各部局の長 ・介護サービス事業所 ・自治会、民生委員、婦人会、老人会などの地縁団体 ・我がこと、丸ごととして本人や家族、官民も協働で取り組む ＜改善について話しあう機会・場の作り方、改善を計画・企画するために必要なこと、改善を実践するために必要なことは＞ ・地域ケア推進会議にて認知症に関する情報共有を行い、施策の計画作成へ繋げる。 ・若い世代へも PR できる情報発信。

3. 有田川町（和歌山県）

（１）点検ミーティング（昨年度の管内本人ミーティングより） ①本人ミーティング（管内市町合同実施） ②ぴありんくる（介護家族の会）に選定 （２）点検アクション（１０月～１１月） ・認知症地域支援推進員３名で自宅へ伺い話を聞いた。本人の生活環境でゆっくり話を伺うことで、
--

ご本人の本音部分についての話を聞くことが出来た。

- ・他の相談事案の中でも、本人とゆっくり話す事の大切さを実感できた。
- ・地域密着型デイサービスの運営推進会議にて、本人の声を聴く取り組みについて紹介。デイサービス職員より、「わざわざ話を聞こうとしても本当の気持ちは中々聞くことが出来ないのではないか?」「送迎中や介助中の何気ない時に本人の本音を聞くことがある。」それなら、聞き流してしまっっては勿体なのでは、デイサービスの活動内容の検討に使うことが出来るのではないか?ということでデイサービスセンター職員の発想で「希望ノート」を作成。センター内の壁に引っ掛けてあり、気軽にいつでも職員が書き込めるようにしている。

(語られた内容について)

- ・忘れていくことの不安な気持ち ・将来への不安 ・今の平凡を保ちたい
- ・家族の健康への不安 ・「何もようせん」という諦め ・「わからないという気持ち」
- ・「今はないが」以前はこうだったという懐かしい気持ち (目が輝いていた)
- ・出来なくなることへのショック、悲しさ ・やさしくしてもらとうれしい

※自分たちが良いと感じることも、本人の立場で考えると決してそうではない。その言動に至るには、本人のしっかりした思いがあることを改めて認識する。

(3) 点検後ミーティング (案) (12月)

- ・本人、家族の話を聞く中で自分たちの価値感が変わった。こちらがアンケートの内容を聴くことより何気ない雑談の中の方が本人の思いを語られることが多かった。

→知らず知らずのうちに、意見を聞かなくてはならないと、こちら主導の取り組みになっていなかったか?

- ・推進員も事業をしていると無理をしていなかったか。推進員も無理はせず、本人や家族の話の流れに身を任せてはどうか?

→なので、ミーティングを開催して、当初考えていた様な、何かを作りだそうというスタンスではなく、

「まずは本人同士や家族同士の出会いの機会を作ってみよう！」

→推進員は「出会いの場作り」のみを行おう！

→無理なく集まれる人で、特別な場所ではなく普段の場所によって、今後の集まりの中でどう発展して行くかは未定

(4) 改善アクション (1月)

- ・介護されているご家族から以前に、認知症の本人と安心して一緒に出掛けられる場所が欲しいとの声を聴いており、会議室の様なクローズな場所ではなく、日常的に通うことの出来る場所を検討。

- ・ご家族より、最近オープンした古民家カフェ (代表の方が地域住民の居場所として立ち上げた) へ、本人ミーティングを開催できないか?との相談を受け、推進員より古民家代表者へ打診。企画について前向きに理解して頂き、様々な案やご意見を頂き開催する運びになる。

(参加者の募集について)

- ・職場内で今まで関りのあったご本人やご家族に声を掛ける。
- ・今まで本人ミーティングに参加していた方に声を掛ける。

・窓口に来庁したケアマネに、本人ミーティング開催の説明を行い、プラン担当している方で参加してくれそうな方を紹介してもらう。

・家族会に参加していた方に声を掛ける。

⇒この集まりの趣旨を説明するとともに、参加案内を持参し推進員で一軒ずつ訪問。

当事者、ご家族と当日の企画を検討する中で、ハーモニカを趣味で演奏しているご夫婦が、当日演奏してくれる話になり、またその奥さん（当事者）が数十年ぶりにピアノ演奏にチャレンジしてくれることになる。

・ケアマネが付いている方には、出来るだけケアマネにも参加してもらえるよう依頼。

・当日は急な欠席もあったが、12名の当事者、家族が参加。

まずはお互いを知ってもらえる様に、自己紹介タイムを長めにとることにした。

・その後、ご本人とご家族が気兼ねなく話せるように、別れて話す時間をもった。

・最後にハーモニカ演奏とピアノ演奏を行い、みんなで合唱。

⇒時間にも制約のある中で、まずはお互いを知ってもらえる機会を作ることが出来た。

・事前に想定出来なかった、やってみたからこそ分かった反省点も多くあった。

例えば、途中で当事者と家族が別になる時間をこちらで準備していたが、司会として号令をかけたことに違和感があった。全体で話されている姿が良い雰囲気だったので、こちらで段取りするのではなく、当事者同士、家族同士の会話の中から自然な流れで行われたほうが良かった。

⇒でも1歩踏み出して良かった。自分たちの意見だけではなく、当事者や家族の意見が自分たちの後押しになった。やはり声を聴くことの大切さを理解した。



4. 鳥取市（鳥取県）

認知症の人が意見を表し、関係者が聴く際に、配慮すべき点や工夫
＜本人が率直に語ることができるために＞ ・ 本人が話しやすい環境を本人と一緒につくる（人、場所、時間を考慮する）。 ＜そのための機会・場を作るために＞ ・ 本人ミーティングなどの設定された機会だけでなく、その打ち合わせや振り返りを大切にする。 ・ 日ごろから本人の意見や気持ちを聴き、何気なく本人から出た言葉をメモする。 ＜情報化（可視化）するために＞ ・ 本人ミーティングで出た意見や、パートナーが本人から聞いた意見を記録する。 ＜確認・共有するために＞ ・ 議事録を全員に配布する。⇒気づきがある。⇒確認や共有につながる。
認知症の人の意見を地域（地元）の認知症施策の改善に活かすには（改善を具体化するためには）
＜施策の改善に向けて、意見の共有が必要な人・組織・範囲は＞ ・ 関係者全員が改善について話し合う場 ＜改善について話しあう機会・場の作り方は＞ ・ 話し合いをするために関係者が特別に集まるのではなく、本人をとりまく地域のサロンや病院の待合室など、話が出たところから取組を考えていく。 ・ 病院主催の認知症当事者の会に本人と認知症地域支援推進員が参加（2月） ・ 本人ミーティングを認知症疾患医療センター内で開催（センター内に活動を理解してもらう。12月、2月） ＜改善を計画・企画するために必要なことは＞ ・ 本人ミーティングばかりでなく、出向いていく（患者会など）本人の声を聴かせてもらうことにつながる。⇒政策につながる。 ＜改善を実践するために必要なことは＞ ・ 政策に生かすための話合を特別にするのではなく、本人の声が地域に届くために必要なプロセスと一緒に考えていく。 ・ 企画・修正を行政・関係者・本人とともにやり取りをしながら作りあげていく。 ・ 本人ミーティングのチラシを参加者と一緒に考えて作成し、地域包括支援センターや認知症疾患医療センターに配布。 ・ 本人ミーティングのチラシを県主催の認知症連絡会でおしらせをする予定 ＜その他＞ ・ 施策づくりが最終目標ではなく地域づくりが大切。 ・ 本人と関係者がお互いに納得いくまで話し合いを行う中で、多くの気づきを体験し合えることが重要。 ・ 介護保険計画の策定委員会に本人が参画する。 ・ 本人ミーティングに参加することで、（本人の変化）少しずつ前向きに考えることができるようになった人もある。例えば、新聞社の取材に応じるとか若年性サポートセンターのパネルディスカッションに登壇する予定（3月）。 （専門職の変化）本人を含めた話し合いを行うように本人の意見を聴く場を設けるようになり、一緒に考

える機会が増えた。

5. 大和村（鹿児島県）

認知症の人が意見を表し、関係者が聴く際に、配慮すべき点や工夫
＜本人が率直に語るができるために＞ ・ なじみの人となじみの場所で（本人のホームベースで） ・ 集団の時は多すぎない人数（5 人以下） ・ 普段の本人のスタイルの延長の中で（参加しているサロン等） ・ 聴く技術（本人の趣味や得意なことを交えるなど） ＜そのための機会・場を作るために＞ ・ 本人にあわせた場を考える（友達がいた方が話しやすければ友達も誘ってなど） ・ 本人が参加している（参加したいと思っている）普段の地域活動にあわせて ＜情報化（可視化）するために＞ ・ 実施後すぐに振り返り検討。 ＜確認・共有するために＞ ・ 記録まとめ→参加者で確認→回覧→広報周知
認知症の人の意見を地域（地元）の認知症施策の改善に活かすには（改善を具体化するためには）
＜施策の改善に向けて、意見の共有が必要な人・組織・範囲は＞ ・ 担当チーム、本人家族 OB、住民有志メンバー、関係機関など ＜改善について話しあう機会・場の作り方は＞ ・ 上記を中心としたメンバーでその都度話し合いながら実施方法も考える。 ＜改善を計画・企画するために必要なことは＞ ・ 各種関係会等との意見交換・情報収集、計画書作成→起案→広報・実施→検証。（地域特性にあったものは常に考慮）

参考 2：日本認知症本人ワーキンググループ(JDWG)

<http://www.jdwg.org/>

日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）は、「認知症とともに生きる人が、希望と尊厳をもって暮らし続けることができ、社会の一員としてさまざまな社会領域に参画・活動することを通じて、よりよい社会をつくりだしていくこと」を活動目的にした一般社団法人です。

<活動の方針>

「地域とともに」

一人ひとりが、住み慣れた地域でよりよく暮らしていくために「本人による、本人のため、社会のための活動を具体化し、息長く続けていくために、会員それぞれが暮らしている地域に根差して、その地のさまざまな人たちと一緒に活動していく。

＊ともに取組んでいく中で、それぞれの地域のさまざまな人たちに「認知症の人」への真の理解を広げる。

＊本人抜きで進めず、本人とともに進める新たな地域連携・協働の姿を具体的に示していく。

「小さな声を大切に、大きな流れを」

各地の会員の声を丁寧に集め、国や関係省庁、団体等に提案し、どこに住んでいても暮らしやすくなるための全国レベルでの仕組みに反映させていく。

「海外の仲間とともに」

海外の仲間も試行錯誤しながら進んでいる。国際的につながり、情報収集・連携を進めながら、活動の充実を図っていく。

「プロジェクトを組んで力強く」

活動の具体的成果をあげていくためには、実働する人・知恵・資金等が不可欠。法人の姿勢を守りつつ、各種事業はプロジェクトを組んで進めていく（自治体、研究機関、企業等と力を合わせて）。

「一人ひとりが、ともに」

活動の源は、全国の認知症の本人とそのパートナー。一人ひとりができることをできる範囲で取組み、全体として（法人として）よりよい活動体となっていくことを目指していく。

「本人にとってのよりよい暮らしガイド」のご紹介

「本人にとってのよりよい暮らしガイド（本人ガイド）」は、
J DWGのホームページから、無償でダウンロードできます。



平成 29 年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「認知症の診断直後等における認知症の人の視点を重視した支援体制構築推進のための調査・研究事業」（委員長 東京都健康長寿医療センター研究所 栗田主一 研究部長）

「本人にとってのよりよい暮らしガイド（本人ガイド）」は、
J DWGのホームページから、無償でダウンロードできます。

J DWGでは、「本人ガイド」が全国のすべての市区町村で、認知症の人の手に行き届き、どこで暮らしていても、一人ひとりが希望あるよりよい日々を過ごしていけることを、心から願い、当法人の公益活動の一環として、この「本人ガイド」を当事者の方に頒布する活動を行っています。

- ◆認知症のご本人からの個人のご要望については、可能な限り、お一人に一冊、無償でお送りいたします。
- ◆自治体や団体・企業等の皆さまが、事業等で利活用される場合については、有償配布とさせていただきます。

頒布活動を今後持続的に行い、皆さまと共に、より多くの当事者に「本人ガイド」を届けることにつながりますようご理解願います。

詳しくは、J DWGホームページをご覧ください。

※有償配布は、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターと一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループの「本人にとってのよりよい暮らしガイド」に関する著作物利用許諾契約に基づいて実施しています

「認知症とともに生きる希望宣言」

日本認知症本人ワーキンググループ（JDWG）は、2018年11月1日、厚生労働省内で記者会見を行い「認知症とともに生きる希望宣言」を表明しました。

「認知症とともに生きる希望宣言」は、わたしたち認知症とともに暮らす本人一人ひとりが、体験と想いを言葉にし、それらを寄せ合い、重ね合わせる中で、生まれたものです。今とこれから生きていくために、一人でも多くの人と一緒に宣言をしてほしいと思っています。この希望宣言が、さざなみのように広がり、希望の日々に向けた大きなうねりになっていくことをこれから願っています。

本日の報告会の付帯資料として配布しています。

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ

認知症とともに生きる希望宣言

- 1
自分自身がとらわれている常識の殻を破り、
前を向いて生きていきます。
- 2
自分の力を活かして、大切にしたい暮らしを続け、
社会の一員として、楽しみながらチャレンジしていきます。
- 3
私たち本人同士が、出会い、つながり、
生きる力をわき立たせ、元気に暮らしていきます。
- 4
自分の思いや希望を伝えながら、味方になってくれる人たちを、
身近なまちで見つけ、一緒に歩んでいきます。
- 5
認知症とともに生きている体験や工夫を活かし、
暮らしやすいわがまちを一緒につくっていきます。

JDWGのホームページからダウンロードできます。

平成30年度 厚生労働省 老人保健健康増進等推進事業
認知症の人の意見に基づく
認知症施策の改善にむけた方法論等に関する
調査研究事業

事業報告会配布資料



本資料は、日本認知症本人ワーキンググループのホームページに掲載します。

<http://www.jdwg.org/>

平成31年2月9日 発行・配布

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ
contact@jdwg.org